

新・ロータリー随想

その周辺とともに

菅生浩三

1999年6月

ロータリアンが語る

21世紀「人間教育」への新提言!

世紀を超えて生き続ける「ロータリー精神」の真髄!

ロータリーの精神"The Ideal of Service"とは何か—

新・ロータリー随想

その周辺とともに

菅生浩三

はしがき

先般『続・ロータリー随想』を世に出してから、三年という月日が経過し、当初『ロータリー随想』を世に問うて以来から指折り数えれば、六年という時が経過した。そして目下私どもは、二〇世紀のゴールと二一世紀のスタート・ラインを正に目前にして、長くかつ深い未曾有の構造的不況に喘いで来ているが、このことは、私どもが明治以来営々と築き上げて来たわが国社会の仕組みと価値とが、グローバルな国際社会への全面参入を強いられるという新たな事態に伴い、音を立てて崩れ去り、私どもが否応なくその抜本的な見直しと再構築を迫られていることを意味する。のみならず、来るべき二一世紀には、そのグローバルな国際社会自体が、科学技術の果てしなくあるのなない開発や、人々が個人として生き或いは社会のなかで生きる意識と倫理や価値観があらゆる側面で着実に変質しつつあることによって、有史以来の根本的な変革を

迫られることになると思われる。このような人間と社会の状況を背景として、ロータリー自体も、サービスの理念 The Ideal of Service が不変であることはいうまでもないこととして、活動とその手法のあり方については、ポール・ハリスが予想したところを遙かに超える変化への対応が必要となつて来るものと思われる。

このような状況下で、この三年間に書き留めた小文の中には、論旨や表現が重複していたり、前書以上に見当違いの内容も散見するけれども、相も変わらぬ未熟な試行錯誤の一里塚として、敢えて除外しないこととした。

前書に引き続きご笑読賜り、ご意見やご叱正を与えていただければ幸甚である。また、本書上梓にあたり、数々の貴重なご指導やご助言を賜った諸先輩や友人のロータリーアン各位のご厚情に深謝し、併せて前書に引き続き出版のお世話をいただいた小倉淳平氏に心から感謝申し上げます次第である。

一九九九年六月

菅生浩三

目次

はしがき 1

ポール・ハリスの思い出 9

ロータリー四人男 19

二二世紀に向けてのロータリーの進路 27

——ロータリー研究会（一九九七年一〇月八日、九日、札幌）における発言要旨——

個人の自己制約とロータリーのサービスの理念 43

不況とロータリー 49

識字率向上月間を迎えて 57

現今におけるロータリーの国際奉仕の意義 65

ロータリー財団の素描 69

——一九九八～九九年度のための地区協議会のために——

国際親善奨学生活動に因んで 97

GSE活動の今日的意義について 101

世界社会奉仕プロジェクトと財団の同額補助金プログラムについて 105

米山月間に寄せる 109

米山記念奨学会活動にかかる一つの視点 113

シエルドンと米山梅吉 117

現今社会を背景に米山記念奨学会活動を考える 125

教育問題特別委員会の設置について 129

教育問題二題 131

現代教育を眺める一つの視点 141

人間教育への提言 149

教育の目的 161

現代教育が抱える問題点と解決への糸口について 165

科学技術の急激な変化が青少年に与える影響について 185

— 京都におけるR I会長主催アジア会議のパネラーとして —

科学技術の急激な変化と子供たち 197

人の幸せとは 203

企業その他の団体の倫理とサービスの理念 205

新しい原始生産への回帰を夢みる 207

原田、鴻池両先輩会員の思い出 213

一九九三～九四年度 R I 第二七二〇地区大会における R I 会長代理の挨拶 217

一九九八～九九年度 R I 第二七二〇地区大会における R I 会長代理の挨拶 239

ポール・ハリスの思い出

周知のように、ロータリーの創始者であり、ザ・ファースト・ロータリアンであるポール・ハリス Paul Percy Harris (以下「ポール」という。)は、終戦後間もない一九四七年(昭和二十二年)一月二七日に、七九年にわたる生涯をシカゴの自宅で閉じた。一九九七年(平成九年)は、正にその没後五〇周年に当たる。そこで、国際ロータリーのルイス・ジアイ Luis Vicente Gray 会長は、全てのクラブに対し、この五〇周年に当たる年度の七月一日から翌年六月末日までの年度を通じて、ポールの思い出に敬意を表するように呼びかけ、次のような具体的なアイデアを提案された。①一月二七日を「創設者の日」と定め、特別の行事や記念式典を計画する。②ロータリーの歴史と各クラブの伝統を学び、史料の展示やマスコミの報道を通じて、社会の人々と分かち合う。③ポールの逝去を記念して創設された最初のプログラムであるロータリー

財団の奨学金プログラムを、ロータリー奨学生を中心として祝賀する。④一月中のクラブの例会で、ポールの自伝『ロータリーへの私の道』からの抜粋を読んだり、ビデオ『ポール・ハリスは語る。』を上映したりする。この四項目である。

ポールは、一八六八年（明治元年）四月一九日に、シカゴの北六〇マイル、ビールで有名なミルウォーキーの南二五マイル、ミシガン湖の西岸に位置するウィスコンシン Wisconsin 州ラシーン Racine の町で誕生した。父方はスコットランド系の移民といわれ、母方はアイルランド系の移民で、母方の祖父は弁護士でラシーンの市長であった。時代は、今日アメリカの生みの苦しみの洗礼であった南北戦争が終わり、リンカーン大統領が暗殺された一八六五年の数年後で、北部を中心に産業革命と近代資本主義が展開を始めていた時期であった。ところが、ポールが三歳のときに、父親が雑貨商の事業に失敗して父母が別居したため、一八七一年（明治四年）に兄とともにバーモント Vermont 州のウォーリングフォード Wallingford の町の父方の祖父父母のもとに預けられた。ポールは、この最もアメリカらしいニューイングランド New England の地で少年時代を過ごし、ブラック・リバーのアカデミーに入学したが、当時のポー

ルは茶目っ気に溢れた腕白小僧で、いたずらと乱暴が過ぎて放校処分を受けた。一八八五年（明治一八年）にバーモント大学に入学したが、二年生のときに、またもやいたずらの度が過ぎて退学処分になった。もっともこの大学は、後に一九三三年（昭和八年）になって処分を取り消し、ポールに名誉博士号を贈っている。一八八七年（明治二〇年）にはニュージャージー州のプリンストン大学に入学し、一八九〇年（明治二三年）には祖母のすすめで弁護士を志してアイオワ大学の法学部に入学した。卒業後は、弁護士を開業する前に色々な社会を見て人間としての幅を広げておこうと、五年間の計画的な放浪の旅 Five Years of Folly に出て、アメリカの各州、各都市を廻り、その間に、新聞記者、果樹園の手伝いを手始めに、箱詰缶詰工場の人夫、実業学校の教師、劇場の俳優、ボーイ、ホテルの夜勤、大理石のセールスマン、農場人夫と種々雑多な職業を体験し、牛の輸送船の人夫として英国に二度渡ったほか、フロリダ州ジャクソンビルの大理石商ジョージ・クラーク George Clark を親友に得たことも幸いして、キューバ、バハマ諸島から、イギリス、オーストリア、ドイツ、ベルギー、イタリアなどヨーロッパの主要国や主要都市を廻り、最後にニューヨークの大都会の生

活を経験した後、一八九六年（明治一九年）二八歳のときに、シカゴで懸案の法律事務所を開設した。ポールの目には、当時のシカゴは、ゴールド・ラッシュの旋風で荒廃して雑然としていたが、未知の活力に溢れ、将来の発展を約束された都市であると映ったようである。弁護士としてのポールは、多くの仕事に恵まれ忙しい日々を送っていたが、友人がなく、淋しい生活に明け暮れていた。そこで、一九〇〇年（明治三三年）に、都会の中では人は皆孤独で本当の心の友を求めている筈だから、友情を心の核として色々な職業の人たちを集めてクラブを作ってみてはと思ひ立ち、約一年間の準備期間を経て、一九〇五年（明治三八年）二月三日の夜に、当時のポールは三七歳になっていたが、シカゴのディアボーン街のユニティ・ビル Unity Bldg 七階七一一号室にあった友人ガスターバス・ローア Gustavus Loehr の事務所で、石炭商シルベスター・シール Silvester Schiele、鉦山技師ガスターバス・ローア、洋服商ハイラム・シヨレイ Hiram Shorey を集め、四人でロータリー・クラブの第一回の会合を開催した。これが最初のロータリー・クラブであるシカゴ・クラブの誕生で、初代会長はシールがつとめ、ポールは一九〇七年（明治四〇年）に三代目の会長をつとめ

た。一九一〇年（明治四三年）には、後に国際ロータリーの事務総長となったチェスリー・ペリー Chesley Perry の盡力で、当時一六にふえていたクラブで全米ロータリー・クラブ連合会を組織し、その初代会長に就任した。また、スコットランドのエジンバラ出身のジーン・トムソン Jean Thomson と結婚し、二人が初めて出逢ったシカゴの郊外の丘に居を構え、夫人の郷里の街路の名に因んで、カムリー・バンク Camery Bank と名付けた。一九二八年（昭和三年）には、『ロータリーの創始者』The Founder of Rotary を発刊した。ポールと妻ジーンは子宝に恵まれなかったが、ロータリー・クラブがポール夫妻が生んだ娘であった。ポールらが生み出したロータリー・クラブは、当時のマスコミから「奇妙な団体で、会員はその団体から何も得ないどころか、善を行うという特権を手にするために会費を払うのである。」と評されながら、着実に全世界の各地に発展して行った。そして、ポールは、その生涯を通じて世界中のロータリー・クラブを次々と精力的に訪問し、一九三二年（昭和七年）の北米の旅以来、国際間の理解と親善のシンボルとして、訪問先の地に「友情の樹」Tree of Friendship を植樹したが、その足跡は、主要なものでも、ベルリン（ドイツ）、ター

リン（ラトビア）、ヘルシンキ（フィンランド）、ゲーテボリ、ストックホルム（スウェーデン）、ベルゲン（ノルウェー）、上海（中国）、ブリズベーン、キャンベラ、ホバート、ローンセストン、メルボルン、シドニー（オーストラリア）、オークランド、デューネディン、ウエリントン（ニュージーランド）、メキシコ・シティ（メキシコ）、パナマ・シティ（パナマ）、ポゴダ（コロンビア）、リマ（ペルー）、サンチャゴ、パパライソ（チリ）、ブエノスアイレス（アルゼンチン）、モンテビデオ（ウルグアイ）、リオデジャネイロ、サンパウロ（ブラジル）の各地に及んでいる。その間、一九三五年（昭和一〇年）には、マニラの第五回太平洋地域大会に出席する途次に日本を訪問し、東京では帝国ホテルで月桂樹の記念植樹を行って東京会館の歓迎晩餐会に出席し、大阪では新大阪ホテルの歓迎午餐会に出席したほか、横浜、京都、神戸の各地を廻り、多数の日本のロータリアンとの懇親を深めた。また、同じ年に、ロータリアンのバイブルといわれる『ロータリーの理想と友愛』This Rotarian Age を発刊している。一九四七年（昭和二十二年）一月二七日、七九年にわたる生涯を安らかにシカゴのカムリイ・バンクの自宅で閉じ、シカゴの郊外ブルーアイランドのマウントホープ墓地

Mount Hope Cemetery の親友シルベスター・シールの隣に葬られた。没後一九四八年（昭和二十三年）になって、逝去直前に脱稿していた自伝『ロータリーへの私の道』My Road to Rotary が発刊された。

ところで、ロータリーという組織と団体は、ポールの発想を現実化したものであるから、その性格が創始者ポールの思想と人柄や氣質を離れて存在しえないことは、いうまでもない。ところが、ポールがその幼年期や少年時代を過ごしたニューイングランド地方ウォーリングフォードの自然の風物と、ポールを慈しみ育てた祖父母の人柄は、ポールの人格形成に決定的な影響を与えた。ニューイングランドといえば、キリスト教世界の複雑な事情を背景に、メイフラワー号に乗って故国イングランドを逃れ、新しい地を求めて新大陸に渡来した清教徒の集団によって開かれた地域であることは、周知のとおりである。清教徒といえば、スコットランドを中心に、聖書の原点に帰ることを徹底する改革を志向して、カトリックの伝統を残す国教会と鋭く対立したプロテスタント・カルヴァン派のグループであった。美しいグリーン山脈の「丘の上の灯台」である教会を中心に築かれ、ハーバード大学やボストン交響楽団などアメリカ

かの歴史と文化を代表し、古き良きアメリカの気風を象徴する田園都市地域で、そこに生まれ住む人たちこそ、ヤンキーであった。高潔と名譽、自己犠牲と献身、真実と誠実、質朴、頑固、勤勉、寡黙、友情と寛容、それに子供たちに対する深い愛情は、ニューイングランドの古き良き時代の家庭を代表する素朴な美德であり、ポールの祖父と祖母の家庭は、正にそのようなニューイングランドの典型的な家庭であった。ポールは、幼年期から少年期を過ごしたこのような生活環境から、美しい自然に恵まれた素朴な風習や人間同志の親しみに溢れた田舎の町の生活、ひたむきなプロテスタントの信仰と社会への献身、真実に基づく誠実な生活態度、友情と他人への愛情や思いやりに溢れた人間関係、宗教や政治の面での寛容などの貴さを、しっかりと身にしみて教え込まれた。このようにして育ったポールの横顔のうち代表的なもの二、三を取り上げてみると、次のような諸点であろう。先ず、友情であった。ポールは友情を最も大切にし、友人を裏切ることとは絶対になかった。また、ポールは寛容であった。人々の違いや欠点に目を付けるよりは、人々の共通点や長所を取り上げた。次に、仕事を大切にした。仕事の処理はどこまでも誠実で、依頼人から絶大な信頼をかち取っ

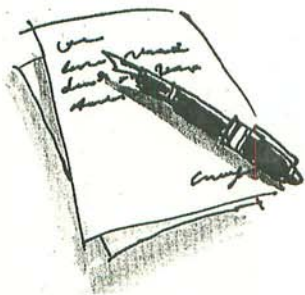
た。また、常に夢を持ち、強い意志と熱意を持って事にあたった。さらに、謙虚であった。常に自分は表に立たず、友人を立てていた。このようなポールの資質が、ポールをロータリーの創設に向かわせ、ロータリーの基底にしつかりとそのような志向を定着させたのである。

さらにポールは、シカゴ・クラブにアーサー・フレデリック・シエルドン Arthur Frederic Sheldon とチェスリー・ペリーという二人の友人を入会させ、このまたとない二人の友人の決定的な協力を得た。シエルドンは、サービスの理念 The Ideal of Service をロータリーの精神的基盤として定着させ、そのソフトを完成させた。またペリーは、三〇年間にわたり継続して事務総長の地位にあり、ロータリーの組織を構築し、活動の基本を策定して、そのハードを完成させた。このような貴重な友人を発見して選択し、彼らにロータリーの運命を委ねたことは、ポールの精神的指導者としての高い資質を実証して余りあるものである。

ポールは、その逝去を目前に脱稿した自伝『ロータリーへの私の道』の巻末に、「神よ、人々や国々の欠点が目に入らなくなりますますように、長所だけが目につくよう

になりますように。——地上に平和がありますように。」という辞世ともいふべき祈りの最後の言葉を書き残したが、ロータリーについてポールが持っていた意識と志向を一言に凝縮したものといふべきであろう。

(一九九七年一月)



ロータリー四人男

一九九八～九九年度のジェームス・レイシー James Lacy 会長は、「ロータリーとその活動はロータリアンの夢によって作られたし、また作られている。」と述べている。私どもがロータリーに思いをいたすとき、ポール・ハリス Paul P. Harris、アーサー・シエルドン Arthur F. Sheldon、チェスリー・ペリー Chesley R. Perry の三人と、アーチ・クランプ Arch C. Klumph を、私どもにロータリーの夢を与えた偉大な人物として忘れることはできない。ポール・ハリスは、ザ・ファースト・ロータリアンとして、ロータリーに生命を与えた創設者である。シエルドンは、ロータリーにサービスの理念 The Ideal of Service というソフトを与えた人である。ペリーは、ロータリーにハードとしての組織を与えた人である。クランプは、ロータリーにロータリー財団という財政の基盤を与えた人である。この四人の夢なくしては、今日のロータリーは

存在しなかったわけである。

まず、ロータリーは、ポール・ハリス（以下「ポール」という。）の発想を現実化したものであるから、その性格が創始者ポールの思想と人柄や気質を離れて存在しえないことは、いうまでもない。ところで、ポールがその幼年期や少年時代を過ごしたニューイングランド地方の自然の風物と、ポールを慈しみ育てた祖父母の人柄は、ポールの人格形成に決定的な影響を与えた。ニューイングランドといえば、キリスト教世界の複雑な事情を背景に故国イングランドを逃れ、新しい地を求めて新大陸に渡来した清教徒の集団によって開かれた地域であることは、周知のとおりである。清教徒といえば、スコットランドを中心に、聖書の原点に帰ることを徹底する改革を志向して、カトリックの伝統を残す国教会と鋭く対立したプロテスタントのカルヴァン派のグループであった。美しいグリーン山脈の「丘の上の灯台」である教会を中心に築かれ、ハーバード大学やボストン交響楽団などアメリカの歴史と文化を代表し、古き良きアメリカの気風を象徴する田園都市地域で、そこに生まれ住む人たちこそ、ヤンキーであった。高潔と名譽、自己犠牲と献身、眞実と誠実、質朴、頑固、勤勉、寡黙、

友情と寛容、それに子供たちに対する深い愛情は、ニューイングランドの古き良き時代の家庭を代表する素朴な美德であり、ポールの祖父と祖母の家庭は、正にそのようなニューイングランドの典型的な家庭であつた。ポールは、幼年期から少年期を過ごしたこのような生活環境から、美しい自然に恵まれ素朴な風習や人間同志の親しみに溢れた田舎の町の生活、ひたむきなプロテスタントの信仰と社会への献身、真実に基づく誠実な生活態度、友情と他人への愛情や思いやりに溢れた人間関係、宗教や政治の面での寛容などの貴さを、しっかりと身につけた。このようにして育つたポールは、友情を最高に大切にし、友人を裏切ることが絶対になかつた。また、ポールは寛容であつた。人々の違いや欠点に目を向けるよりは、人々の共通点や長所を取り上げた。次に、仕事を大切にされた。仕事の処理はどこまでも誠実で、依頼人から絶大な信頼を勝ち取つた。また、常に夢を持ち、強い意志と熱意を持って事にあたつた。さらに、謙虚であつた。常に自分は表に立たず、友人を立てていた。このようなポールの資質が、ポールをロータリーの創設に向かわせ、ロータリーの基底にしっかりとそのような志向を定着させたのである。

次にポールは、シカゴ・クラブにシエルドンという友人を入会させたが、このことが、ロータリーのソフトの完成を可能とした。創設当初のロータリーは、ポールの人柄を反映して、真実を基本として、誠実な人間関係と他人への愛情や仲間への友情を大切にする真面目なクラブではあったが、結局において欧米社会に珍しくない異業種人士の集合で、仲間同志の懇親と相互扶助を主な目的とするいわゆる平凡な社交クラブの域を出るものではなかった。Food (おいしい食事)、Fun (楽しみ)、Fellowship (仲間同志の友情) の頭文字を取った三Fクラブという命名が真剣に検討されたくらいであった。ところが、創設後三年経った一九〇八年に入会したシエルドンは、書籍のセールスマンであったが、利を貪るに手段を選ばない当時のシカゴの無法社会の実情の中で、果たしてロータリー・クラブにどれだけの存在意義があるのかと深い疑問を持った。そして、他人のために盡くす気持で商売をしている者が結局は最後の成功を勝ち得ている多くの实例を観察して、*The Profits Most Who Serves His Fellows Best* 「仲間に最も良く奉仕する者は、最も多く利得する。」との結論に達し、一九一〇年の全米ロータリー連合大会の晩餐会の席上でこの考え方を発表するとともに、この

Service 「サービス」という観念の意義をポールに進言した。元来社会への献身を志向する気質を持っていたポールは、すぐにこのシエルドンの言を理解し、これをロータリーの存在意義とすることを決意した。かくて、シエルドンの言葉は、His Fellows 「仲間」という閉鎖的と受け取られ易い表現の部分を削除して、He Profits Most Who Serves Best 「最善のサービスを行う者には、最大の利得がある。」の表現となり、翌一九一一年のポートルランドの全米ロータリー連合大会で、大会決議として満場一致で採択された。これが「サービス」の観念がロータリーの世界に登場した最初であり、さらに翌一九一二年のデュルースの国際大会で、定款の中の「綱領」の中心観念として The Ideal of Service 「サービスの理念」(「奉仕の理想」と邦訳)という表現で規定されて今日にいたっていることは、周知のとおりである。シエルドンは、専ら事業家の立場で「サービス」を説いたが、シエルドンのサービスの観念に刺激されたミネアポリス・ロータリー・クラブの会長のフランク・コリンズ B. Frank Collins は、弁護士という専門職務の立場からさらに徹底して、Service, Not Self 「無私の奉仕」という言葉を提案した。しかし、「無私」は極端であるとして「超我」と修正され、

Service Above Self「超我の奉仕」として同様大会決議として採択された。この二人の言葉は、ロータリーの公式の標語 Motto と云れ、Service Above Self He Profits Most Who Service Best と云う表現は、長くロータリアンの人口に膾炙してロータリーの理解にはかり知れない深い影響を与えていることも、周知のとおりである。ポールは、「牧師が宗教の世界に神の言葉を伝道する如く、シエルドンはロータリーの世界にサービスの精神を伝えた伝道師であった。」という言葉で、シエルドンを讃えている。結局においてシエルドンは、ポール・ハリスが抱いていた主観的な人間愛に、自己制約を中心とする醇化された社会性を賦与することにより、客観性を備えた高度のソフトとして完成させたのである。

さらにポールは、もう一人の友人ペリーを、シエルドンと同時期にシカゴ・クラブに入会させた。ペリーは、一九一〇年に一六クラブから成る全米ロータリー連合会を組織してその大会を成功させ、この組織を今日の国際ロータリーに発展させたわけである。その後一九四二年に引退するまで三〇年にわたり、引き続き事務総長の地位にあり、定款、細則の内容から、各種の会合と活動、クラブ、地区、国際ロータリーに

いたるまで、ロータリーの社会組織としての存在の確立と充実のために、その人生の大半を捧げた。ポールが播いた一粒のロータリーの種は、その後九四年、没後五二年を経て、全世界一五九の国に、総数一、一八八、八一六人のロータリアン、二九、一七のクラブ、五二七の地区を数えるにいたっているが、このようなロータリーの全世界にわたる驚異的な発展の現実的な基礎の確立は、ペリーの資質と努力に負うところが多大である。

結局において、ロータリーとは、ポールが提供した素材と設計思想のもと、ペリーが構築した堅牢なハードの中に、シエルドンが提唱した人間社会普遍の真理「サービスの理念」をソフトとして盛り込んだ、国際社会における壮大で不滅の組織的な実験体であるともいうべきであろうか。そして、その実験体は、クランフの提唱によって創設されたロータリー財団という素晴らしい財政基盤の発展と充実によって、その実効性を限りなく高めつつあるのである。

(一九九九年四月)

二一世紀に向けてのロータリーの進路

——ロータリー研究会（一九九七年一〇月八日、九日、札幌）における発言要旨——

一、はじめに——二〇世紀と二一世紀の総括

ロータリーの立場からすれば、二〇世紀は、正にロータリーの世紀であった。この世紀の初頭、シカゴの最初のただ一人のロータリアン、ポール・ハリスの胸に宿った「サーブスの理念」The Ideal of Service は、ほぼ一世紀を経た今日、全世界一二万余のロータリアンの胸にしっかりと宿っている。その都市ただ一つのクラブは、全世界二万八千余のクラブへと驚異的な拡大を遂げた。その間ロータリーは、その基本理念を此かも変えることなく堅持しながら、社会の変化に応じて手法の適切な対応を重ね、活動の総量を全世界に拡大して来たのである。

ところが、来るべき二一世紀は、正に激動の世紀となるものと思われる。人間は、優れた知能という類い希な資質を与えられた生物であるが、この知能という原資を過

去無制約に無限定に開発し利用して、その活動の成果を集積して来た。二二世紀は、その集積の結果が、善きにつけ悪しきにつけ、私ども人間社会の基盤に、自然や社会の環境はおろか、私どもの個体としての存在自体にまでも、一挙に激甚な変化として表面化して来る世紀になるものと思われる。もちろん、ロータリーの基本理念は不変であるが、ポール・ハリスも指摘しているように、私どもは、社会の変化の感得に敏であると同時に、対応の手法の選択において適切でなければならぬ。かつてない深刻で本質的な変化への直面が予定される今日、この問題は、非常な切実さを以て私どもに検討を迫って来ている。今回の研究会のテーマに、この問題が取り上げられた所以であると思う次第である。

そこで私は、先ず二二世紀にどのような変化や問題点が予想されるかを一瞥し、次いでロータリーがこれらに対して採るべき対応の手法のあり方に言及したいと思う。

二、二二世紀に予想される変化と問題点

いうまでもなく、二二世紀に予想される変化の主因は、人間の知能である。そして、

変化の内容を要約すれば、欧米に発した科学と技術を中心とする知識の開発と展開の急激な進行によって、人間社会の基盤に激甚な拡大と変質が進行することである。ここで、科学とは自然科学と社会科学の双方を、技術とは工業技術と社会管理技術の双方を、それぞれ含む。もちろん、このような知能の科学技術にかかる知識部分の開発は、私どもに極めて高度の快適生活の保証を与えてくれるが、反面その高価な代償として、社会基盤の破壊を招きかねない次の四項目に集約されるような深刻な障害を、私どもに課して来ている。

①自然の破壊の進行

現代社会は工業技術によって支えられているといっても過言ではないが、その工業技術は、実は膨大なエネルギーの需要を前提として成り立っている。その結果、地球上において化石燃料や核燃料など過去に蓄積された太陽エネルギーの恣意的で大規模な開放を行うこととなる現時のエネルギーの調達と消費の継続は、私ども現在の生物が生存を続けて行くために必要な地球の生態系と気象の現況の基本条件の均衡の維持

に、着実に逐次甚大な影響を及ぼしつつある。地球温暖化による陸地都市部分の水没の危険とか、オゾン層破壊による皮膚ガン増加の懸念などは、その一例に過ぎない。さらにまた、次々と新しく開発される化学物質の多用の累積は、私どもの生存の生理条件に徐々に恐るべき変化を与えて行くであろうし、バイオテクノロジーの開発と利用は、私どもの生存の象徴である遺伝子自体に引き返すことのない加工を加えて行くであろう。そして、このような事態は、地球の自然は人間のために存在するという人間中心の観念と価値観によって、益々深刻の度合いを増すこととなるであろう。

②人間と社会における病理現象の進行

科学技術の開発は物の開発を結果し、物の開発は人々の物に対する関心と欲望を挑発する。また、政治や経済その他の社会機構の組織と運営にかかる社会管理技術の整備は、これを支える社会科学とその基本前提である人間の個人的存在を絶対とする意識を進行させ、これに起因する価値観の多様化と混乱を進行させるであろう。この二つの要因の相乗効果として、まず企業その他の社会集団を含む社会全体が物の表面的

な強化や整備に向けて傾斜を深めて行くという病理の進行が促進されるであろうし、次に家庭などの生活集団の個人への分解とこれに続く個人自体の内部意識の分裂という病理が進行するであろう。

③ 人文その他の精神文化の衰退

欧米に発した科学技術を中心とする知識文化の世界レベルへの瀾漫はまんは、世界の諸民族の精神文化を含む広義の人文、なかならず非欧米の諸民族のそれとのボタンのかけ違いを多発させ、一面的で画一的な評価を適用することによって、本来多様であるべき人文の保存と育成への意欲の着実な低下や消退を招き、ひいては人文自体の著しい衰退を招く。このような諸民族の人文の衰退は、民族間の真の相互理解の質を低下せるとともに、諸民族相互間の調整のために必要な各種の基準、例えば部族や民族間の対立抗争を調整するための基準や、世界レベルで経済秩序を公正に規律して行くための基準や、先進、発展途上、未開発各社会の人々の相互間の生存条件を調整するための基準などを、合意によって設定することを著しく困難とし不可能とすることにな

ろう。そしてこのことは、ロータリーが究極の目的とする世界の人々の相互理解と親善及び平和を実現するための障害を解決するどころか、却つてこの理想に背馳する災厄を定着させ増加させる結果をもたらすこととなるであらう。

④教育の欠陥による問題の増幅

先ず基本的に、私どもの意識が自然に対する人間中心の観念と価値観から一步も出ていないことは先述のとおりであるが、このことは、私どもが受けた現代教育が、同様の根本的な欠陥を帯有していることの証左である。次に、人間資質に対する現代の評価は、その帰属の個人的側面だけが強調され、社会資源としての性格に対する評価が完全に欠落している。その結果、現代教育は、個人の利益を追求する能力を獲得する手段としての知識教育に偏向し、人間と社会を形成するための基本的な社会活動であるとの視点が欠落している。また、社会的存在としての人間に与えられた知能には、社会性による制約があることは自明の理であるのに、現代の教育には、知能の自己制約の必要とそのあり方を教える部分が欠落している。現代教育の内容が科学技術に偏

向し、人文の要素が稀薄であることは、指摘するまでもない。このような教育の欠陥によって、①から③までに述べた問題点は、時を追うに従って増幅し深刻化して来るものと思われる。

三、二一世紀における変化と問題点に対するロータリーの対応のあり方

二〇世紀におけるロータリーの活動は、いわゆるアイ・サーブとウイ・サーブのいずれであるかを問わず、いわば既成の社会基盤を当然の前提として、その上で展開されてきたといえよう。ところが、その二〇世紀の百年間において、人間社会の基盤は、点から線、線から面へと世界レベルに飛躍的に拡大し変質したが、その拡大と変質は、先述したとおり、科学技術の開発を主たる要因として展開された。しかるに、その間ロータリーは、科学技術に内在する各種の消極的な問題点に必ずしも十分な関心を払ったとはいえなかったと思われる。そのために、二〇世紀における人間社会の基盤の拡大と変質は、殆どロータリーとは無関係に進行したといっても過言ではない。ところが、来るべき二一世紀における社会基盤の変化は、二〇世紀における変化の延長を

遙かに超え、果てしのない拡大と予想を絶する変質が予定される。ここにおいて、二一世紀のロータリーは、社会基盤の存在を既成の前提とするのではなく、社会基盤の構築自体を活動の対象として取り上げ、その基本理念の提唱と実現に向けての努力を払うべく、さらに一步を踏み込むべきものと考える。何故ならば、ロータリーの活動が、従来のように社会基盤自体を既成の前提条件としてその上で行われるべき活動に限定されるならば、二一世紀の人間社会は、ロータリーの活動とは関係なく、ロータリーの手の届かないところに拡大と変質を遂げて行く公算が大であり、このことは、人間社会にとつて取り返しのつかない不幸な事態と考えられるからである。

このような観点からロータリーの採るべき対応の手法の具体例を簡単に例示すると、大略次の五項目に集約されると思われる。

①自然の破壊の修復と保全への努力

地球の自然は、人間の社会基盤のさらなる根元的な基礎であるから、その過去における無秩序な破壊の修復と今後における嚴重な保全の継続は、人間がその生存を続け

るために課せられた基本的な責務である。ただ、その際に厳に注意すべきは、先述したとおり、人間中心の考え方を根本的には是正する必要があることである。地球の自然は、人間のために、人間がそのほしのままの欲望を充足するために存在するという従前の観念と価値観は、明白な誤りである。人間は、たまたま自然の摂理により他の生物とともに地球上にその生存を許された生物の一類型に過ぎないことを、厳に自覚しなければならぬ。人間は地球の自然と地球上の他の生物とともに地球上に生存を許されている生物に過ぎないという真実の認識に立脚した観念と価値観への転換が必要である。この意味では、安易に多用される「自然の環境」という用語すら、人間中心の発想の表現として、適切を欠く疑いがあることに留意すべきであろう。

② 人文の尊重と強調

諸民族の人文は、先述したとおり、人間の国際社会において、民族本来の存在自体ともいふべきかけがえのない重要な本質を持つものであり、その重要性は、科学技術を中心とする知識に優るとも劣るものではない。そこで、科学技術知識の優位が依然

として着実に進行している現状のアンバランスを是正し解決する必要がある。そのためには、とりあえず人文の衰退に歯止めをかけてその回復をはかるために、各自の悩みや欠陥や困難にかかる訴えを相互にきき合い、理解し合い、その解決のために協力し合うための共同作業の実施が必要となるだけでなく、さらに進んで、積極的に諸民族の人文相互の認識と理解を促進することとして、相互の接触や情報と成果の交換その他の共同作業を効果的に実施することが必要となろう。

③教育活動の根本的変革への努力

現代教育が帯有する先述の欠陥を根本的に是正することは、緊急の課題である。そのためには、先ず根本的に地球の自然と地球上の他の生物に対する人間中心の観念と価値観からこれらを相互等質共同の存在として位置付けるといふ自覚に基づく観念と価値観への転換を教育面に的確に反映させる変革が必須であることは、いうまでもない。また、個人の利益を追求する能力を獲得するための手段たる知識教育から人間社会を形成する基本的活動たる教育への転換、知能の無制約な開発を目的とする教育か

ら知能の自己制約をしつかりと教え込む教育への転換、科学技術偏重の教育から人文を再認識して重視する教育への転換、などを主たる内容とする根本的変革が早急に検討され実施されるべきであり、そのための調査や、検討、提言と、非政治的手法による影響力の行使が予定されるべきである。

④ 各種社会管理領域の監視と改善への努力

教育のみならず、行政、経済、医療、社会福祉その他あらゆる社会活動の管理領域には、従来から数々の不備不整が漫然と放置されて来ただけでなく、今後さらに次々と新たな不備不整が続発し、社会基盤の悪化を確実に進行させて行くこととなるので、これらの領域の現状に対する不断の観察、点検、情報の蒐集、是正への提言や、非政治的手法による影響力の行使が予定されるべきである。

⑤ 解決のための体制の確立

以上の①から④までに例示したような諸問題の解決のためには、個別の事例から出

発して逐次実績を拡大して行くというロータリー独特の従来手法のほかに、それぞれの社会の状況に応じ、もつと全面的で、組織的で、継続的な対応をはかるに必要な体制の整備と確立が必要となるであろう。

因みに付言するならば、ロータリーの従来の中にも、このような視点と効果が期待されるものが現に存在する。例えば、世界社会奉仕(WCS)や青少年交換のプログラムもそうであるし、財団のプログラムの関係でも、教育的プログラムでは、途上国に奉仕する大学教員のための補助金、ポール・ハリス・センター計画、ジャパン・プログラム、職業研修プログラムなどがあり、また、人道的プログラムでは、シエルター建設を可能とした同額補助金、保健、飢餓追放と人間性尊重の三Hプログラム、ヘルピング・グラント、ポリオ・プラス及びポリオ・プラス・パートナー・プログラム、ロータリー・ボランティア補助金、平和プログラムその他数多くのプログラムがあるが、これらは運用次第では同様の効果が期待できるし、研究グループ交換を文化交流プログラムに移行して新たな位置付けをした視点なども、同様の評価が可能である。ただ、来るべき二一世紀における社会基盤の変動は余りにも激甚であること

が予想されるので、向後さらに新たな視点から、早急に徹底的な検討と抜本的な手法の再構成への努力が、絶対に必要であろうと思われる。この点、キンロス Glen W. Kinross 会長は、就任にあたり、ロータリアンがロータリーの心を地域社会や世界とそこに住む人々に示すことを求め、さらに、貧困と飢餓への挑戦を宣言し、ロータリーが職業人の連合体にふさわしい影響力を社会と職業に発揮し、貧困と非識字問題との悪循環を断ち切るための具体的行動に参加することを呼びかけられたが、これらの提言は、このような意味において、二一世紀のロータリー活動へ向けた正しい指向の一步を踏み出す適切な指導であると考えられるのである。

周知のとおり、経済界の指導的部分の一部には、二〇世紀は戦争と国家及び経済と企業の世紀であったが、来るべき二一世紀は人間と文化が花開く豊かで活力ある市民社会の輝かしい世紀でありたいとの期待があることは、承知している。しかしながら、このような期待も、現在社会の基盤への厳しい点検と、将来社会の基盤の公正な構築に向けての着実な努力が払われることよってのみ、初めて実現可能となるものと考えるのである。

四、おわりに——私どもの進路に向けて

マザー・テレサは、「貧しい人々の顔の中に、神の顔がみえる。」と言い残された由である。私どもロータリアンには、「お互い一人ひとりの顔の中に、ロータリーの顔がみえる。」のである。ロータリーの顔は、ロータリーの心である。ロータリーの心は、「サービスの理念」The Ideal of Serviceである。サービスの理念とは、自分を思い自分を大切にすると同様に、むしろそれ以上に、他人を思い社会を大切にして生きて行くところに真の幸せがあると自覚して生きることであろう。この意味において、サービスの理念の実質は、知能の自己制約の理念である。何故ならば、制約のない知能からは、他人を思い社会を大切にする考えは絶対に生まれて来ないからである。放縦で制約の欠けた知能の開発を続けその乱用を重ねて来たツケは、二一世紀の社会の基盤に恐るべき荒廃をもたらすことが予想されるが、私どもロータリアンは、その解決のために知能という両刃の剣を正しく使って行くという、筆舌に盡くし難い難作業に立ち上がらなければならない。幸い私どもロータリアンには、百年の歴史を背負ったサービスの理念という輝かしい自己制約の理念がすでに用意されている。私ども口

ロータリアンは、二〇世紀が終わろうとする今、この理念を高らかに掲げ、ロータリーの手法の本質を堅持しつつ、来るべき二一世紀の社会基盤の公正な構築に向けて、創意と熱意と勇気をもって、観察し、検討し、発言し、行動して行くべきであると信ずる次第である。

(一九九七年一〇月)



個人の自己制約とロータリーのサービスの理念

周知のとおり、欧米社会は、個人の存在の絶対を基本的な前提として成り立っている。この個人の存在の絶対という欧米社会の基本的前提は、欧米主導による国際社会への瀾漫（びまん）に伴い、人権思想の徹底や社会の近代化の普及など見るべき成果を国際社会にもたらした。しかしながら、その反面、数々の深刻な被害を世界的規模で人間社会に及ぼしており、私どもが解決を迫られている負の遺産の大半が、この個人の存在の絶対を根本的な素因とするものであるといつて過言ではない。そもそもこの個人の存在の絶対という思念は、今日の欧米社会の祖型であるゲルマン社会に由来し、ゲルマンの秀れた科学技術の素質と一体となって、僅々（さかん）数百年間に、生産手段の開発から産業革命による経済実果の集積を経て、今日の資本主義経済社会の絶対優位を確立するという社会の現状を招来した。ところが、その結果、私どもは、人間中心の意識の保

有を当然のこととして、現代工業技術に不可避のエネルギーの過剰消費と、地域環境から地球環境に及ぶ生態系や気象条件の変動と破壊、局部の効用のみを当面の目的とする各種化学物質の開発と多用の累積、遺伝子の加工による生物存在の基本の破壊、科学技術の非倫理的開発に伴う人々の意識の物的傾斜、家族その他の人間集団の個人への分解と個人自体の意識の分裂などの病理の進行、欧米人文の安易な国際的瀾漫に伴う諸民族の個性的人文の消退など、私どもの生存自体を危うくする数多くの深刻な被害にさらされている。しかも、このような被害は、人間中心の観念を前提とし、知能の個人的帰属のみを強調してその社会的資源としての側面を看過するだけでなく、社会性に基づく知能の内在的制約を自覚せず、その個人の恣意的な利用を放置してはばからない欧米教育の欠陥の国際的波及により、益々拡幅していく現状にある。

ところで、この個人の存在の絶対という思念は、実は身分社会を打破して個人を因襲的な社会のハードから解放するために提示された必要条件であって、いわば歴史的に後ろ向きの性格のものである。従って、この思念は、私どもが人権を確立した近代社会で一応幸せな生を送るための必要条件ではあっても、それだけでは私どもが前向

きに幸せな生を営むことを保証されるための十分条件ではない。そこには、個人の存在の絶対は何らかの制約を加える必要がある。なぜならば、人間は一人でないとしていけないが、同時に、一人では生きていけないという根本的な矛盾に生きる生物であるからであり、この矛盾の解決は、その性質上、個人の存在に何らかの制約を加える以外にはありえないからである。この制約のうち、最も安易なものは、私どもの外部から加える制約であつて、例えば、民主政体等の政治体制、共産主義や修正資本主義などの経済体制、社会主義などの人間精神の管理体制、その他、習俗、慣習、法律などのハードとしての社会規範などであるが、このような外部的制約は、人間の精神と活動を必要以上に抑制し否定する方向に機能するものとして、本格的な成果をあげることが著しく困難で、結局は失敗に終わることが歴史的に実証済みであり、到底本来的なものではありえない。次の制約は、宗教的な規範であろうが、宗教的な制約は、私どもの現実の社会からの逃避ないしは私どもの生に占める現実の社会の価値の軽視ないしは否定を前提とするものであり、実社会に根ざした生を重視し、或いは宗教を持たない心の自由を意図する多くの人々にとつて、一般に受け容れることのできない

制約といわねばならない。かくて私どもは、個人の存在の絶対に対する本質的な制約が、人々の心の内面から各自が自発的に課する制約、いわば自己制約でなければならぬことに想到する。

ところが、このような個人の心の自己制約は、教育によって実現する以外に有効な方法はない。その場合の教育とは、地球は人間のためにだけあるのではなく、人間は地球の自然とともに生きなければならぬこと、人間の能力は個人に帰属するものであるだけでなく、社会資源としての性格を併せ持つものであること、人間は社会的制約のもとに生きるものであるから、人間の知能にも本質的に社会的制約があること、科学技術を中心とする知能は人間の存在のごく一部に過ぎず、人間にはそれ以外の多様な素質があり、その総合的で全体的な開花こそが人間の真の幸せであること、人文は人々の生の根であるから、その個性的存在の尊重は、人々の幸せな生を保証する貴重な要素であることなどの考え方を中核とする、いわば人間教育というべきものでなければならぬ。自然科学と工業技術や社会科学と社会管理技術などの科学技術の修得を主たる目的とする欧米教育を祖型とする現代の知能教育では、人の心の自己制約

の達成は全く不可能であり、私どもは、新たな人間教育の創設を必要としている。因みに、欧米社会では、キリスト教とその教会の存在が、人間教育に類する目的でこれに代替する効用を果たしているようであるが、宗教的制約には先述の限界があるだけでなく、欧米社会が帶有する幾多の不可解な矛盾の素因の大半もこれに帰するものと思われ、到底本質的で妥当な制約とはいいい難い。現実の社会にしっかりと立脚した人間教育の創設を必要とする所以である。

ロータリーのサービスの理念『The Ideal of Service』は、人の社会性の認識とその醇化によって、人々の社会的活動の質の水準の向上、地域社会から国際社会にいたる良質な社会の構築、そこに住む人々の幸せなどを併せ確保しようとするものである。しかも、その創設の動機の一つとなったプロテスタントとしての創設者の感性も、ソフトとハードの国際化によって、より一般的な高次の理念に高められている。従って、ロータリーを支配するサービスの理念は、究極において人の心に対する自己制約を提唱するものとなっている。ロータリーは、他に人間教育の核をもたない現代の社会にあって、人間教育を目的とした類例をみない巨大な社会教育組織といふべきであり、

私どもロータリアンは、今やその組織の存在意義とその中核となるサービスの理念が私どもの心に占める価値を、深く再認識しなければならぬと思うのである。

(一九九八年二月)



不況とロータリー

近時世界的な不況で、ロータリー・クラブの拡大や会員の増強が一般に停滞気味であり、一九九八年六月末現在で、ロータリアンの数が、ロータリーの歴史始まって以来初めて、前年度末から一二、一五三名も減少したとのことである。特に構造的不況が長びくわが国にあつては、目下のところここ五年間、クラブ数と会員数は若干の増加を見ているものの、一九九八年六月末には遂に一、〇〇〇名以上の会員が減少し、今後さらさらにクラブが消滅したり会員数が相当に減少したりするのではないかと憂慮されている。事業が破綻に当面したり、その維持に著しい困難があるような場合に、関係会員の退会を防止することは、事実上至難であろう。また、経済の状況が不順な場合に、新たなクラブの拡大や新しい会員の増強が困難となつて来ることは、否めない現実であろう。しかしながら、私どもは、そのような現実をそのままやむをえない

ものとして見過ごしてよいものであろうか。そのような情勢の下にあつてこそ、ロータリーの存在意義なり評価に、もつと根本的な検討を加えてみる必要があるのではなからうか。

私どもは、ややもすれば、不況は例外的な不幸な現象であり、原則である好況に速やかに回復すべきものと考えがちである。しかしながら、長い眼で見れば、波長の大の差や間隔の時間差はあれ、景気は好況と不況の波を交互に循環しているものであり、好況も不況もいわば経済の常況といふべきものであつて、私どもは、平常心をもつて等しくその経過を甘受すべきものであろう。不況の時期は、好況の時期に見逃がした無駄や誤りや贅肉を取り除き、人間の真実と不実の見分けを明らかにし、物的に傾斜した心を取り戻し、人の生にとって真に価値あるものは何であるかの真実の価値観の認識を透徹させる絶好の機会と受け止めるべきであらう。従つて、ロータリーをもつて、自己の物的成功を自画自賛して謳歌する機会であるとか、自己のより強い表面的な社会的認知を獲得する機会であるとか、これらを前提とする安易な人間関係の享受の増加をはかる機会であるなどと捉えるならば、このような人々が不況とともに

ロータリーを去つても、やむをえないであろう。また、ロータリーをもつて、人の心のあるべき姿を認識し自覚する貴重な機会と心得る人々は、不況であつてもロータリーを去ることはなく、かえつて不況のときほどロータリーに対する期待と熱意を高めるであろう。

人は一人でないと生きていけないが、同時に、一人では生きていけないという、根本的な矛盾に生きる存在である。従つて、人は、個人の上に徹する生によつても、社会の枠の中に完全に個人を置く生によつても、ともに幸せな生を全うすることはできない。かつて私どもは、封建的な身分社会とか、一切の生産手段を共有する統制社会とか、人の心の社会性を徹底して提唱する社会主義の社会など、外からの強力な枠組みの中に個人を置く社会を構成しようとする幾多の試みを見て来たが、そのいずれもが結局は失敗に終わったことを歴史的に体験するとともに、その原因や理由を半ば納得し理解している。そしてその結果、私どもは、個人の存在を大幅に尊重し志向しようとする社会に生きているが、個人の能力の恣意的な行使を放置せざるをえない不条理と危険の横行や、各種社会集団や生活集団の個人への分解と個人自体の心の分裂と

いう社会病理の進行などにより、生態系の破滅への道を進みつつある。真の救いは、この両者の考え方の中間にしか存在しないことは理の当然であるが、一言で要約すれば、個人の存在に適切な制約を課することによってしか達成することはできないということであろう。しかもその制約は、人の心の外から加える外的な社会制度などには有害無益であることは実証済みであるし、社会の根を軽視しまたは否定することを前提とする宗教的な制約が適切を欠くことも、容易に理解される。その制約は、各人が社会の現実にしつかりと足を踏まえながら、心の内から自ら課する自己制約以外にはあり得ない。私どものロータリーは、明確な自己責任の下に、人の社会性と社会的活動を醇化して、地域から世界に及ぶ良質な社会を構築することにより、人の幸せを確保しようとする組織であるから、その中核となるサービスの理念 *The Ideal of Service* は、正に人の心の内から自ら課する自己制約の精神的努力以外の何物でもない。ここで、ロータリーの精神と組織の存在は、景気の好不況とは本来全く関係がない所以が明らかとなる。むしろ、不況のときこそ、人とその社会の真実を認識するため、ロータリーの理想と存在が社会に高く掲げられなければならない。不況によってロータ

リーが部分的に退潮するようなことがあるならば、退潮するその部分は、実はロータリーではなく、ロータリーを仮装した社会の虚飾にすぎないと考えられるであろう。

なお、退会防止の問題が、不況下におけるロータリーの重要な課題として強調されている向きがあるので、この点について付言したい。もちろん、退会防止の問題を不況と関連付けて論ずること自体は、現実の問題として重要であろう。ただ、退会防止の問題は、単に不況下における特殊な強調課題として論ぜられるだけでは不十分であり、ロータリー自体に固有の一般的な広がりや深みを持った課題として論ぜられるべきであることに留意されねばならない。レイシー現会長も入会当初に一旦退会をした体験の持ち主であり、多くの優秀な新会員が退会寸前の心理状態に追い込まれた体験を持っていることなどや、一九九七～九八年度現在、一年間に一二万人強の新会員が入会しながら一二万人弱に及ぶ退会者があるという現実も、厳しく検討されなければならぬ。その一二万人弱の退会者のうち三分の二は、死亡、疾病、高齢化、事業の破綻、転勤などのやむをえない事由によるものであるが、残りの三分の一に相当する約四万人は、自由な意思に基づき退会であり、端的にいえば、ロータリーに対する希

望と期待を失ったことによる退会ということである。もちろん、ロータリーの存在意義や価値に対する万全の自覚を持ち、ロータリーに対する満腔の希望を抱くことを新会員に期待することは不可能であるから、既に入会している先輩会員、なかんずくその新会員を推薦した会員やベテランの会員などが、新会員がクラブの空気になじみ、他の会員と親しく交流できる雰囲気を作ったり、ロータリーに対する理解を深めるような情報を新会員に提供するなど、色々な形での努力をして行かなければならないことは、いうまでもない。退会問題は、クラブ側や先輩会員達の受け入れ体制に問題がある場合に表面化しているといっても、過言ではない。

ただここで、先輩会員の新会員に対する働きかけの性格に、非常に重要な視点があることが看過されてはならない。先輩会員の新会員に対する働きかけは、先輩会員が新会員を育てるという新会員のための奉仕活動であるとする見方がごく普通であろうが、それだけでは問題の本質を十分に捉えたことにならない。先輩会員の新会員に対する働きかけは、実は先輩会員自身のための自己教育であるという視点が、先輩会員の側で明確に自覚されなければならない。人は、他を論じてみて、初めて自らの不足

や誤りや欠点に気がつくものである。先輩会員は、新会員にロータリーを説くことによつて、先輩会員自身のロータリーに対する従来の認識と理解を、さらに一段と深めることができるのである。そして、この努力こそが、会員各自とクラブの質の増強を促進する最も有力な手法であることが、クラブと先輩会員たちによつて銘記されなければならぬと思ふのである。

(一九九八年一月)

識字率向上月間を迎えて

周知のとおり、RIでは、一九九七年七月度の理事会で、今後毎年七月を識字率向上月間と定めた。一九九八年七月は、その最初の月間である。同理事会では同時に▽識字率及び計算能力 (Literacy and Numeracy) 向上のプログラムをロータリー創設一〇〇周年にあたる二〇〇五年まで継続して拡大する▽識字率向上のライトハウス計画 Lighthouse Strategy (灯台戦略) を一九九八年のアナハイムの国際協議会とインディアナポリスの国際研究会の論題に取り上げる▽各ロータリークラブと各地区が政府機関などを活用して目的を効果的に遂行するよう激励する、などの諸点を決議した。かくて、識字率及び計算能力向上問題は、ポリオ・プラスの後を継ぐRIの最重要課題となっている。

識字率及び計算能力の問題とは、平たく言えば、読み書き算盤の能力のことである。

我が国では、明治以来の義務教育の普及により、国民の大部分が基礎的な識字率及び計算能力を充足しているので、今更この問題を取り上げる実益はないとする考え方もありえる。しかしながら、世界的な視点からは、識字率及び計算能力を欠く人々が非常に多数存在し、貧困との悪循環のために、国際理解と平和ひいては人類の福祉の実現の重大な障害になっている。このような現実に鑑み、識字率及び計算能力が充足された地域の人々が、これが欠除している地域の人々を支援することにより、世界的なレベルで、識字率及び計算能力の欠除の問題を解決して、国際理解と平和ひいては人類の福祉の実現に努力することは、国際社会に課せられた最後の目標であるといわねばならない。

識字率及び計算能力の向上問題については、かねてより世界社会奉仕活動、同額補助金、三日補助金等の各プログラムとして取り上げられて来たことは周知のとおりであるが、RIは、今回この問題を組織的に取り上げることにより、あらためて貧困と飢餓の問題への挑戦を宣言した。思うに、貧困と飢餓が、栄養不良、早産、精神障害、重篤な疾病、死亡、幼児の虐待、子供の重労働、ストリート・チルドレン、捨児、家

庭破壊、犯罪、部族紛争、戦争その他この世におけるさまざまな悪の根源であり、地域社会の最も困難な問題であるとともに、国際社会における相互理解と平和の重大な障害となっていることは、いうまでもない。そこでRIは、その解決のための最も有力な手法として、すべての人々の識字率と計算能力の向上に全力をあげて真剣に取り組むように提唱している。けだし、私どもは、文字と数字の世界に生きているといつても過言ではないが、貧困は、人々から教育や学習によって読み書きと計算の能力を身につける機会を奪い、これらの非識字者たちは、相互に理解し合い平和な心と豊かな感情を持つて生きることがおろか、自立して自らの生計の糧を手に入れる手段すら与えられず、貧困からの脱却は絶望的であるだけでなく、さらに次々と新たな貧困を生み出して行く。世界人口の二〇%以上が貧困と飢餓に苦しむ人々であり、世界で九億人になんなんとする人々が非識字者で計算能力を欠く人たちであるという現実を直視し、貧困と非識字問題との悪循環を断ち切るために、識字率や計算能力の高低にかかわらず、全世界のロータリアンが一致してその向上の課題に取り組むべきことを、ポリオ・プラスの後を継ぐ最も重要なプログラムとして、RIが提唱している所以で

あろう。

RIでは、世界の全ての地域とゾーンと地区を通じ、全てのロータリー・クラブとロータリアンがこの問題に対する認識を深めて現実の計画に参加することを促すために、タスクフォースを設けた。そして、RIの本部にゼネラル・コーディネーターを、全世界の八つの各地域にエリア・コーディネーターを、全世界二四の各ゾーンにゾーン・コーディネーターを（一部の複合ゾーンでは、そのセクションにアシスタント・ゾーン・コーディネーターを併せて）任命している。ゼネラル・コーディネーターは、この問題の世界の先導者であるリチャード・ウォーカー氏 Richard F. Walker（オーストラリア、サリスベリRC）である。わが国のロータリーが属しているアジア地域のエリア・コーディネーターは、ノラセス・パスマナン氏 Noraseth Pathmanand（タイ、バンコクRC）である。わが国のゾーン・コーディネーターは、重田政信（ゾーン一、高崎北RC）、岡崎全宏（ゾーン二、横浜南）、小生（ゾーン三、大阪北）、須之内淳二（ゾーン四、アシスタント、松山西）の各氏である。

周知のとおり、タイでは、一九八七年から九一年にわたり、タイのロータリアンが

オーストラリアのロータリアンの支援の下に「灯台戦略」という識字率向上の三Hプロジェクトを実施して、非常な成功をおさめた。その結果、このプロジェクトは、タイ政府の手によって全国の小学校に公式に採用されて現在にいたっているという実績がある。アジア地域のエリア・コーディネーターがタイから選出され、九七年度のワークシヨップが一九九七年七月にタイのバンコクで開催された所以である。

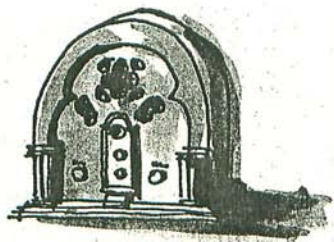
識字率及び計算能力向上の手法としては、家族の識字率向上、児童の早期教育、学校教育の改善、成人、女性、職場などの各教育における識字教育や、ストーリー・チルドレンの問題など、数多くの項目がある。このうち、小学校教育の改善問題については、義務教育化や就学率の向上のほか、「CLEの手法」Concentrated Language Encounter Techniquesがある。このCLEの手法は、一つの問題を、子供たちとともに集中的に討論しながら、子供たちの心の内面から興味と関心を掘り起こして行く手法で、総花式に広く浅く外面から教え込んで行くわが国などの管理教育の手法とは対照的であり、一旦就学した児童は卒業後も非識字者に戻らないし、未就学ないしは不定就学の児童を小学校に確定的に吸引する大きな力がある由である。

前述のアジア地域のワークショップでは、初等教育のCLEプロジェクト（タイプA）、女性を含む成人の識字教育プロジェクト（タイプB）、ストリート・チルドレンのプロジェクト（タイプC）を、試験的に取り上げることとなった。そして、ゾーン五（北インド、パキスタン、ネパール）、ゾーン六（南インド、スリランカ、タイ、バングラデシュ、マレーシア、シンガポール、インドネシア、ブルネイ）、ゾーン七（北西オーストラリア、パプア・ニューギニア、フィリピン）の各ゾーンから、それぞれの試験的プロジェクトをエリア・コーディネーターに提出する一方で、わが国などのゾーン一から四までは、世界社会奉仕 World Community Service やロータリー財団の三Hプログラム、同額補助金 Matched Grants などの手法による支援を行うこととされ、すでにゾーン六などから、CLEプロジェクト（タイプA）はじめ、各種の具体的なプロジェクトが提出されている。

各クラブにおかれては、このような識字率及び計算能力向上問題の意義、目的及びその現状等について十分に理解を深められ、地区が取り上げる個々のプロジェクトに参加され、或いは各クラブ独自のプロジェクトを実行されるようお願いする次第であ

る。なお、この問題については、RIが作成して各クラブに頒布している「識字率を高めるロータリー」(六〇一—IA—一九七)が参考となることを付言したい。

(一九九八年四月)



現今におけるロータリーの国際奉仕の意義

今世紀の相当期間にわたつて国際社会を風靡した共産主義も、理論の問題としてはともかく、実社会の規律としては極めて不適切で、人々の心と活動を萎縮させ退化させる弊害が致命的であるという批判と自覚が遍く私どもに行きわたり、決定的な蹉跌をみたことは、周知のとおりである。ところが、近代の経済社会の本則である資本主義を基調とする理念で、国際社会の混乱が收拾されたかというところではなく、却つてその混乱は多様で深刻の度合いを深めている。その原因は、多々あることと思われるが、その主なものは、個人の絶対という觀念への硬直した固執であろう。

本来個人の存在の絶対性は、かつての身分社会ないしは封建社会から私ども人間を解放するための必要条件として定立された、いわば後ろ向き理念である。ところが、その個人の存在の絶対性が、人間の幸せを志向する人間社会のあるべき姿を前向きに

実現するための十分条件であるかといえ、決してそうではない。むしろ、現状においては、その個人の存在の絶対という觀念が、却つて私どものよりよい幸せな人間社会を実現するうえでの障害にすらなっている。このように、必要条件と十分条件とが安易に混淆され、個人の存在の絶対に何を加えどのような修正をするかが明確に私どもの意識に捉えられていないところに、共產主義が終熄した後の私どもの国際社会の不安定と混乱の真因があるといふべきであらう。

ここで、果てしのない個人の放縦に人々の言動を委ねた二〇世紀初頭のアメリカの混乱した社会の内部から、「サービスの理念」という自粛と自戒の制約を唱えてロータリーを創設したポール・ハリスの志向が想起される。何故ならば、今日の国際社会の混乱は、二〇世紀初頭におけるアメリカ社会の混乱が世界的規模に拡大したものであるといふべき実質を多く帯有しているものであるからである。従つて、ポール・ハリスが提示した「サービス」という自己制約の理念は、個人の存在の絶対性を、よりよい社会を構築するための十分条件とするために加えるべき制約として、現時に一段と広くかつ深く機能することが期待されねばならない。しかも、ロータリーも世界の規模に

拡大した以上、その中核である「サービスの理念」も、欧米の人たちだけでなく、わが国はじめ非欧米の人たちによっても、等しく多様により高い次元で理解され支持されなければならぬ。ここに、私どもわが国のロータリアンの国際社会に対する奉仕活動の原点と方向性が存在する。

深刻な国内不況の現在、わが国ロータリーの国際奉仕活動も若干の停滞ないし後退もやむをえないとの議論を聞く。しかしながら、その論旨には反対である。国内の経済不況は、よく解析すれば、現今国際社会の帶有する先述の混乱の一側面に過ぎない。私どもロータリアンは、ロータリーという世界的組織の一員として、国際社会の現実にかつ全面的に接触し、これを逐一体験して行く機会を与えられていることに感謝すべきである。そして、このような混乱を解決するためにこそ、国際社会に向けて、ロータリーの理念に基づき、より本質的に、さらに一段と強力に発言し、提案し、行動して、その成果を高めて行くべきであると考える。

(一九九八年九月)

ロータリー財団の素描

——一九九八年～九九年度のための地区協議会のために——

一、ロータリー財団の歩み

ロータリー財団は、一九一七年アメリカ・ジョージア州アトランタの国際大会において、第六代の国際ロータリー会長アーチ・克蘭フ Arch C. Klumpf が世界的な規模で慈善や教育その他社会奉仕の分野で何かよい事をしようと呼びかけて設立された基金がその前身であり、翌一九一八年アメリカ・ミズーリ州カンザステイター・ロータリー・クラブから寄せられた米貨二六ドル五〇セントが最初の寄付金であった。一九二八年アメリカ・ミネソタ州ミネアポリスの国際大会で、この基金の名称がロータリー財団と改められ、アーチ・克蘭フほか五名の管理委員が任命された。

一九四七年一月ロータリーの創始者ポール・ハリス Paul P. Harris の逝去にあたり、その死を悼みその功績を讃えて全世界のロータリアンからの寄付金が続々と寄せら

れ、翌一九四八年七月には、寄付金の総額が米貨二二〇万ドルに達し、ここに財団は、永年の夢であった財務の安定という目標と理想を叶えるためのプログラムの創設を現実のものとする事ができることとなった。大学院課程の学生を対象とした国際的な奨学金の教育的プログラムが実現し、世界七か国から選ばれた一八人の優秀な学生に奨学金が支給されて、最初のロータリー国際親善奨学生が誕生したのである。

今日において、財団は、民間における世界最大の育英組織へと発展した。その後、人道的プログラムが加わり、さらに最近文化交流プログラムが加わって、国際理解と友好と平和を掲げて人類社会の福祉を実現しようとする財団のプログラムが飛躍的な充実を見るにいたっていることは、周知のとおりである。

ロータリーは、ポール・ハリスの人間愛を素材とした彼の設計思想によって創設され、アーサー・シェルドン Arthur F. Sheldon によってこの人間愛に社会性を賦与されたサービスの理念 The Ideal of Service をソフトとして与えられ、チェスリー・ペリー Chesley R. Perry によってクラブから国際ロータリーに及ぶ包括的な組織体をハードとして与えられたが、最終的にアーチ・クランプが提唱したロータリー財団によつ

て活動の財政基盤を確保して、醇良で巨大な社会的存在を確立したのである。

二、財団の組織と運営

財団は、正式の名称を「国際ロータリーのロータリー財団」The Rotary Foundation of Rotary International といひ、法律上は、アメリカ・イリノイ州の法令に基づいて一九八三年に設立された非営利財団法人であり、ただ一人の法人会員である国際ロータリーによって構成されている。

その組織と運営は、財団自体の定款と細則に基づいて行われているが、現実の運営は、国際ロータリー会長が国際ロータリー理事会の承認を得て任命する任期四年の一名の管理委員と一人の事務総長によって処理されている。管理委員のうち四名は国際ロータリーの元会長であり、委員長及び副委員長各一名が選ばれる。この管理委員の国際ロータリー会長による任命制によって、国際ロータリーと財団の運営の整合性が制度上保障されている。

財団の使命が、世界理解と平和を達成しようとする国際ロータリーの努力を、国際

レベルの教育的、人道的、文化交流の各プログラムを通じ支援することであることは、
いうまでもない。

三、財団のプログラム

財団のプログラムは、教育的、人道的及び文化交流の三つに大別される。先ず、人間社会のあり方は人によって決定されるので、人を作る教育プログラムの重要性はすべてに優先する。次に、人の真の育成と政治行政の充実が実現するまでの間は、人道的努力の必要は人間社会にとって殆ど不可欠であろう。最後に、良質で幸せな人間社会は、民族とその人文の個性の相互交流によって実現されるものであるから、文化の交流は私どもの最終の国際的作業であろう。ロータリー財団に三つのプロジェクトが存する所以である。

〈教育的プログラム〉

教育的プログラムとしては、(一) 国際親善奨学金 Rotary Ambassadorial Scholarships と、(二) 開発途上国で奉仕する大学教員のための補助金 Grants for

University Teachers to Serve in Developing Countries とがある。

(I) 国際親善奨学金には、①一学年の奨学金と、②二年または三年のマルチ・イヤ
ー奨学金とがあり、③大学院課程と、④大学課程の種別があるほか、⑤障害者教師、
⑥ジャーナリズム、⑦文化研修、⑧国際親善ジャパン・プログラム（ジャパン国際親
善奨学金）、⑨職業研修（実用研修）などのための奨学金がある。

①一学年の奨学金は、最も基本的なものである。

②マルチ・イヤー奨学金は、他国で学位を取得するための費用の一部として、年額一
律米貨二万一〇〇〇ドルの奨学金を支給するものである。

③大学院課程と、④大学課程の各奨学金は、それぞれの課程に対応する奨学金である。

⑤障害者教師と、⑥ジャーナリズムの奨学金は、障害者の教師になろうとする者と、
ジャーナリストを志す者に与えられるものである。障害者問題と民主社会におけるジ
ャーナリズムの機能を重視する国際ロータリーの姿勢が看取される。

⑦文化研修のための国際親善奨学金は、三か月ないし六か月間他国で集中的な語学力
強化の研修をうけ、その国の文化実習を行う機会を提供するものである。奨学金の上

限額は、旅費を含め、三か月の場合が一万ドル、六か月の場合が一万七千ドルである。二年間の大学課程を終了しているか、または職業に従事していることが要求される。現在勉学の対象となっている言語は、アラビア語、英語、フランス語、ドイツ語、ヘブライ語、イタリア語、日本語、標準的中国語、ポーランド語、ポルトガル語、ロシア語、スペイン語、スワヒリ語、スウェーデン語である。言語を中核とする民族文化の特質の理解と交流を重視する国際ロータリーの姿勢のあらわれであろう。

⑧ ジャパン・プログラムは、一九九四年一〇月に採択された三年間の試験的プログラム Pilot Program で、日本で日本語と日本文化を学ぶ機会を提供することを目的とする。語学研修のための九か月間奨学金米貨二万五千ドルと、九か月の語学研修と三か月の職業研修（実用研修）を含む二か月間奨学金二万九千ドルの二種類がある。日本文化の特質を重視し、これを国際社会に導入しようとする国際ロータリーの志向をうかがうことができる。

⑨ 職業研修（実用研修）奨学金は、一九九八～九九年度から三年間の試験的プログラムとして設けられたものである。世界から競争的に選ばれた一〇ないし一五人の者に

支給される。奨学金の額は米貨一万ドルないし一万五千ドルで、期間は三か月ないし九か月である。少なくとも二年間職業に就いていた経験が必要である。飢饉救済や環境保全のための国際ロータリーの強調事項を希望する者には、特別の考慮が払われる。一地区で一人を推薦できる。職業の社会的機能を前提として、国際社会のレベルでその修得と交流をはかろうとする国際ロータリーの姿勢をうかがうことができよう。

(II) 開発途上国で奉仕する大学教員のための補助金は、一九八五～八六年に試験的プログラムとして発足したものである。才能のある教員に開発途上国の学校で専門的な能力や知識を分かち合う機会を与え、教員と学生双方の国際的な視野を広げることが目的としている。三か月から五か月間の一万ドルの補助金と、六か月から一〇か月間の二万ドルの補助金とがある。すでに七〇人以上の教員がこの補助金を授与されて活躍している。開発途上国の立場を重視し、その独自の発展と国際社会における先進国との調和をはかつて行こうとする国際ロータリーの意向をうかがうことができる。

このように、一九四七年以来一二七か国の二万五千人以上の奨学生が、財団の教育的プログラムの成果をうけて、医師、弁護士、裁判官、技師、大学教授、学者、行政

官、外交官、政治家、牧師、作家、音楽家、オペラ歌手、オーケストラ指揮者など、あらゆる分野で活躍している。国連難民高等弁務官としての緒方貞子さんの活躍は、わが国の奨学生の草分けとして、私どもの記憶に新しい。

へ人道的プログラム

人道的プログラムとしては、①人道的な国際プロジェクトのための同額補助金 Matching Grants for International Humanitarian Projects (同額補助金)、②保健、飢餓追放及び人間性尊重補助金 Health, Hunger and Humanity Grants (三H補助金)、③カル・ミラー助成金 Carl P. Miller Discovery Grants (世界社会奉仕助成金)、④ヘルピング・グラント Helping Grants、⑤新入道補助金 New Opportunities Grants、⑥ロータリー・ボランティアのための補助金 Grants for Rotary Volunteers、⑦ロータリー平和プログラム補助金 Grants for Rotary Peace Program、⑧災害救援のための補助金、⑨ポリオ・プラス・プログラム Polio Plus Program、⑩ポリオ・プラス・パートナー・プログラム Polio Plus Partner Program がある。

①同額補助金は、一九六四年に開始され、ロータリー・クラブまたは地区が、他国の

ロータリアンと協力して、有意義な人道的世界社会奉仕プロジェクトを遂行することを援助しようとするものである。援助提供国と援助受領国の最低二か国のロータリー・クラブまたは地区の参加が必要であり、双方の提供する資金の合計額と同額（提唱者の提供額が受領者の提供額より少ないときは、提唱者の提供額の倍額と同額）の補助金を財団が支給するものである。一九六四～六五年度にはわずか三件であったものが、一九九三～九四年度には七〇〇件以上の補助金が承認され、現在までに一三〇か国以上の国の三五〇〇件以上のプロジェクトに補助金が支出されている。飲料水、下水設備の供給、車椅子、救急車、消防車の提供、歯の治療等の保健問題、教材教具の提供等の識字率向上プログラムその他あらゆる世界社会奉仕プロジェクトのために、比較的少額の米貨数百ドルから数万ドル単位の補助金が提供されている。なお、従来は建物の建設や給与の支払いなどは同額補助金の対象とはならなかったが、一九九七年七月一日の「建物の建設に関する新方針」により、主としてアフリカ、アジア、ラテンアメリカなどの第三世界の恵まれない家族向けの仮設住宅（シェルター、Shelter）を、一定の条件のもとにこの補助金の対象とすることができるようになった。

②三H補助金は、国際ロータリー創設七五周年を記念して一九七七〜七八年度に国際ロータリーが開始したプロジェクトを、一九八二〜八三年度に財団が引き継いだものである。国際理解、親善及び平和を促進するために、人々の健康状態を改善し、飢餓を救済し、人間的な社会的な発展向上をはかるためのものである。一件の補助金の額が同額補助金より大きく、米貨一〇万ドルから五〇万ドル、一件平均一七万五千ドルに及び、提唱者に補助金の最低一〇%の寄付を義務付けている。プロジェクトの期間も二年から三年までの長期にわたっている。このプログラムの性格は、治療よりも予防に、慈善より自立を助けることにある。現実のプロジェクトも、保健分野では、治療、基本保健と保健教育、薬物濫用防止、治療とリハビリテーションなど、飢餓追放分野では、農林業と養殖漁業、特に食糧の生産貯蔵配給など、人間性尊重の分野では、自立の手段提供のための識字率の向上、職業訓練、所得増加のための地域社会開発などで占められている。要約すれば、地域社会から世界社会に永続的な影響をもたらさうとするものである。ポリオ・プラスのプログラムやタイにおける識字率向上のためのCLE教育問題などは、この補助金から始まった著名な成功例である。なお、三H

補助金のために、三H計画準備助成金もある。

③カール・ミラー助成金は、一九六三〜六四年度の国際ロータリー会長カール・ミラー Carl P. Miller と夫人の米貨一〇〇万ドルの寄付金を基金として設立されたもので、基金の収益で国際規模の奉仕プロジェクト開発の検討及び調査のための旅費その他の関係経費を支給するものである。この助成金のお蔭で、事前調査にあてていた資金の全額がプロジェクト自体に使えるようになっただけでなく、この助成金から、同額補助金や三H補助金のプロジェクトへと発展した例も数多くある。

④ヘルピング・グラントは、提唱クラブまたは地区の提供資金額の五〇%を財団が支給するもので、補助金の上限は米貨一万五千ドルとなっている。他国における人道的国際奉仕プログラムのためのもので、同額補助金とよく似ているが、援助受領国にロータリー・クラブがないとか、ロータリー・クラブや地区があってもその参加が期待できない場合に適している。

⑤新人道的補助金は、既存の財団プログラムの資格基準を充たすことができないが斬新でユニークな世界奉仕プロジェクトを遂行するためのもので、米貨一〇〇〇ドルか

ら一万ドルまでの限度で、地区に地区シエア資金を使う裁量を与えるものである。プロジェクトは、人道性がありかつ他国で使うものでなくてはならないとされている。

⑥ロータリー・ボランティアのための補助金は、自分の事業または専門職務上の知識や技能を他国で提供したいと思うロータリアン、財団学友、ローターアクターで、職業奉仕部門のロータリー・ボランティア・プログラムに登録している者が、奉仕地を見つけた場合に、旅費その他の一般経費を支給される補助金である。補助金を支給された者は、他国で四ないし八週間奉仕することになる。また、一九九八〜九九年度から、三年間の試験的プログラムとして、長期ボランティア補助金が採択されており、地区資金から一人につき二万ドルの資金を支出するもので、奉仕する期間は最高一年となっている。

⑦ロータリー平和プログラム補助金は、一九八七〜八八年度から開始され、紛争解決のための新しい方法や手段を探る会議を開催して、国際平和を推進するためのものである。飢餓追放、識字率向上、職業研修、経済開発、人種差別の解消、環境保全、武装紛争の解決などが主題として取り上げられている。会議は、オーストラリア、バン

グラデシユ、ブラジル、カナダ、コスタリカ、コートジボアール、英国、フランス、ハンガリー、インド、日本、トリニダード、トルコ、米国、ドイツ、北アイルランド、フィリピン等で開催されている。異なる文化と見解を超えて相違を解決し、国家間の相互理解を推進する方法を討議するまたとない機会を提供している。

⑧災害救援のための補助金は、一九九二年七月から始まったもので、地震、台風、洪水、火山の噴火、山火事などの災害救援のため、ガバナーの申請により、米貨五万ドルを上限とする補助金を財団が被害地区に授与する。国際ロータリーの災害急報制度を補足するものである。一か国一件の災害を一回救援し、一年間に一か国に最高二回まで補助することができるとある。また、地区は、国際ロータリーの災害急報に応じ、地区シエア資金から、一万ドルの限度で、災害救援活動を援助できる。

⑨ポリオ・プラス・プログラムは、一九五四年にアルバート・セーピング博士によって開発された経口生ワクチンを使用して、ポリオのほか、麻疹、ジフテリア、破傷風、百日咳、結核の五つの伝染病の小児に対する予防接種を、ユニセフや世界保健機構などの国連機関と提携して、学齢前の児童に行うプログラムである。一九八六年七月か

ら世界的な募金キャンペーンを始め、一九八八年六月に当初目標の二倍に近い米貨一億四八〇〇万ドルの寄付金を集め、一九九一年中に希望する全開発途上国にワクチンを五年間提供するという当初の目標を達成した。この間、世界の延べ一〇〇万人を超えるロータリアンがポリオ撲滅運動に参加し、一九九六年末までに一〇億人以上の子供たちに予防接種が行われ、さらに中国とインドを含む八二か国で約四億人の子供たちに予防接種が行われている。一九九六年六月現在では一五四か国でポリオの発生はないと報告されているが、一九九六年の発生件数は全世界でなお約四万件ないし五万件と推定されている。因みに、わが国の寄付総額は、一九九一年六月現在で四九億円となっている。国際ロータリーでは、一九九五年のカラカスの規定審議会で、西暦二〇〇〇年までポリオを一掃し、その後ロータリー創設一〇〇周年にあたる西暦二〇〇五年までにポリオの撲滅を証明し宣言することとしているが、世界保健機構の推定によれば、西暦二〇〇〇年までにポリオを一掃するためには、ワクチンの調達や、新規発生の緊急事態への対応、監視体制の整備などに、関係政府の出費を加え、毎年米貨一億二千万ドル以上の費用が必要であるとされている。財団としても、ポリオの予定

どおりの撲滅のためには、さらに十分な対策の追跡と継続が必要で、ロータリー自体のポリオに対する寄付の総額は、最終的に米貨四億ドルに達するものと考えられている。

⑩ポリオ・プラス・パートナー・プログラムは、ポリオ・プラス・プログラムをより効果的に遂行するため一九九五年一〇月に発足したプログラムである。ポリオ発生地域のロータリアンを援助し、予防接種のための社会的動員、ポリオ・ウイルス検査所への援助、ポリオ担当者と専門医への援助などを行うため、必要な用具や補給品を提供するものである。

〈文化交流プログラム〉

文化交流プログラムとしては、研究グループ交換 Group Study Exchange (GSE) がある。一九六五年に発足したもので、異なる国の二つの地区がペアーを組み、二五歳から四〇歳までのロータリアンとその家族以外の事業と専門職務に携わる四人の若く優秀な職業人に、チームリーダーであるロータリアン一人を加えた編成であることが原則とする。四週間ないし六週間相手地区に滞在して、相手国の社会や歴史など異

文化を觀察研究し、相互の問題や意見を理解し、文化の交流を通じて国際理解と親睦を推進しようとするものである。発足年度には三四チームであったものが、一九九六〜九七年度には五〇〇を超えるチームが参加している。一九九六年以来一〇〇か国、四五〇〇以上のチーム、二万五千人以上のメンバーが参加する人気の高いプログラムとなった。さらに、従来のGSEに加えて、ポリオ・プラスのチーム、非ロータリー国との交換チーム、新しくロータリー国となった国のための全員ロータリアンのチーム、隣接する二地区の交換チームのほか、単一職業のチーム、文化人のチーム、識字率や薬物濫用防止など国際ロータリーの国際的強調分野の一つのチームなどのGSEが追加されている。また、地区のシェア資金の配分によって、非ロータリアンの二人までのチーム・メンバーの追加ができることとなっている。財団のプロジェクトに、教育的と人道的の従来のプログラムのほかに新たに文化交流の分野を加え、従来は教育的プログラムに入っていたGSEをこれに移して多彩な充実をはかったことは、国際理解と平和を推進する財団のプロジェクトの将来を考える上で、極めて意義深いことである。

四、財団に対する寄付と表彰

財団に対する寄付金は、用途を指定しない無条件のものが推奨されており、年次寄付と恒久基金の二つに大別される。

〈年次寄付〉

年次寄付は、一般寄付ともいわれ、毎年クラブと地区が目標額を設定して、これを達成するために継続して行う寄付のことである。個人寄付、地区とクラブの特別行事に伴う寄付、特別寄付の三つがある。現金だけでなく、それ以外の不動産や証券などその他の色々な資産も、寄付の対象となる。

個人寄付は、年次寄付の大半を占めている。

地区やクラブの特別行事としては、オークション、タレント・ショー、チャリテイ・コンサート、ダンス・パーティー、スポーツ・トーナメントなどがある。

特別寄付には、ロータリアンの会社が、従業員の寄付に合わせて、その数倍の慈善的な教育的な寄付をする法人のマッチング・ギフトや、故人を追悼するメモリアル・ギフト（追悼寄付）などがある。

いずれも、三年間据え置いた後に、具体的なプロジェクトに使われる。三年間据え置くのは、プロジェクトの検討と熟成を待ち、また、運営経費を生み出すためである。一九九六～九七年度の年次寄付総額は米貨五九九三万ドルに達し、財団の大きな力となつている。

なお、関係者の努力により、教育目的の寄付で三〇万円以上のものは、わが国においても税法上の優遇措置を受けられることとなつている。

年次寄付の使用にあたっては、シェア・システム The Share System が適用される。このシステムによって、寄付金の六〇%が地区に配分され、四〇%が財団に留保される。前者は地区財団活動資金 District Designated Fund (DDF、地区シェア資金) と呼ばれ、国際親善奨学金、同額補助金の提唱者側負担分、GSEの追加分など、地区の裁量で自由に使用できる。後者は国際財団活動資金 World Fund (WF) と呼ばれ、財団によって、研究グループ交換補助金、三日補助金、同額補助金、ロータリー・ボランティア補助金などに使われている。地区の財団プログラム参加の自主性、自発性、計画性を高める趣旨である。寄付金は、全額が一旦財団に送金され、地区財団活動資

金は、地区が使用する都度、財団から地区に送金されることとされている。地区財団活動資金は、他地区に寄贈することができる。これを地区財団活動資金の寄贈 Donation といひ、他地区の財団プログラムの支援に役立てられている。地区の国際性を高める趣旨である。寄贈には、無条件のもの、国際親善奨学金に対するもの、GSEの追加資金としてのもがあり、奨学金に対するものは、その種類を明記しなければならぬ。

自己または第三者の名義で米貨一〇〇〇ドルを寄付した者には、ポール・ハリス・フエロー Paul Harris Fellow (PHF) の称号が与えられ、二度二度と重ねて米貨一〇〇〇ドルを寄付した者には、その都度マルチプル・ポール・ハリス・フェロー Multiple Paul Harris Fellow (MPHF) の称号が与えられる。数回に分けて一〇〇〇ドルを寄付する意思を表示して最低一〇〇ドルを寄付した者には、ポール・ハリス・準フェロー Paul Harris Sustaining Member (PHSM) の称号が与えられる。一九九五年一〇月現在、五〇万人以上の者が、ポール・ハリス・フェローと認証されている。すでにポール・ハリス・フェローの寄付をしてポール・ハリス・フェローの称号を

得た個人が、続いてポール・ハリス・フェローとなる一〇〇〇ドルの寄付をし、またはポール・ハリス・準フェローとしての寄付をしたときは、他の人をポール・ハリス・フェローまたはポール・ハリス・準フェローに指名する権利を有する。これを個人の据え置きクレジットの権利という。ただし、この権利は、寄付をした時から三年を経過した年度の末までに行使しなければ、消滅する。従つて、ポール・ハリス・準フェローの場合は、クレジットの権利を行使する者がその時まで回数に数回の寄付をしてゐる場合には、その金額と時期によつて、クレジットの指名を受けた者がポール・ハリス・フェローの称号を受けるまでにすべき寄付金の額が変動することがありうることとなる。また、クラブは、クラブの名でポール・ハリス・フェローの寄付をして寄付金が蓄積されている場合に、クラブの理事会の決定で、会員または会員以外の一定の個人に一〇〇〇ドルまたは一〇〇ドル以上の金額を与え、その個人にポール・ハリス・フェローまたはポール・ハリス・準フェローの称号を与えることができる。これをクラブの据え置きクレジットの権利といい、寄付の時から三年を経過した年度の末までに行使しないと消滅することは、個人の場合と同様である。

〈恒久基金〉

恒久基金は、一九八〇～八一年に発足した世界理解と平和のためのロータリー財団基金が発展したもので、一九九四年一月にロータリー財団恒久基金と改称された。寄付金の元金は永久に蓄積され、運用収益だけが財団プログラムを遂行するために使用される。一九九六年度末現在で恒久基金の額は米貨五四〇〇万ドルに増加したが、ロータリー創設一〇〇周年にあたる二〇〇五年までに米貨二億ドル、いずれは一〇億ドルとする目標が設定されている。

恒久基金を充実させるために、米貨一万ドル以上の大口寄付が推奨されており、使途の指定のない大口寄付は、恒久基金に組み入れられる。最低二万五千ドル以上の大口寄付によって冠名基金を設置することができ、二万五千ドル、五万ドル、一五万ドル、一〇〇万ドルの各段階ごとに、寄付者に対する表彰の対応が定められている。

大口寄付を達成するために、寄付者の生存中に合法的に資産を贈与する計画寄付が推奨されている。例えば、遺贈、遺言による寄付、生涯年金の寄付、生命保険の贈与、住居または農場の譲渡と生涯財産留保、収益譲渡寄付などがある。

恒久基金に米貨一〇〇〇ドルを寄付した者には、ベネファクター Benefactor の称号が与えられる。

年次寄付と恒久基金は同等に重要であり、互いに補いあっている。年次寄付は今日の財団プログラムを支え、恒久基金は明日の財団プログラムを安定したものとするものである。

財団への寄付金は、使途が指定されない年次寄付と恒久基金の二つがその主なものであるが、これ以外に使途指定寄付もある。指定された使途以外には使用できない寄付で、ポリオ・プラス、同額補助金などが使途に指定されることが多い。大口寄付の方法によることもでき、冠名奨学金及び冠名奨学金基金などがその例である。

〈寄付に対する表彰〉

財団への寄付に対しては、一定の表彰が行われる。ロータリアン個人に対する表彰としては、先述のポール・ハリス・フェロー、マルチプル・ポール・ハリス・フェロー、ポール・ハリス・準フェロー、ベネファクターのほか、大口寄付の表彰がある。

また、財団管理委員会によるロータリー財団功労表彰 The Rotary Foundation for

Meritorious Service と、ロータリー財団特別功労賞 The Rotary Foundation Distinguished Service Awards の表彰がある。さらに、地区ガバナーによるロータリー財団地区奉仕賞の表彰がある。また、クラブに対する表彰としては、年間一人当たり平均寄付額上位三クラブ、年間一人当たり平均寄付増加率上位三クラブの各表彰がある。

五、財団学友

財団は、元国際親善奨学生、研究グループ交換チームの元メンバーとチーム・リーダー、元ロータリー・ボランティア、カール・ミラー助成金元受領者、開発途上国で奉仕する大学教員のための補助金の元受領者などの財団プログラムへの参加者を財団学友 Foundation Alumni として、学友が世界中のロータリアンや学友と継続的な関係を育てられるよう援助し、国際社会への献身と国際理解と平和の推進に協力することに努めている。けだし、財団プログラムに参加した体験を持つ財団学友は、ロータリーの精神とロータリーが人間社会に対して抱いている意図について十分な具体的理解

を保有しているので、彼らの生涯を通じてその成果の活用をはかるとともに、彼ら自体や彼らとロータリアンとの相互交流を充実することは、ロータリアンの究極の目的である国際理解や親善の推進に極めて有用であるからである。

このため、奨学生が帰国しだい正式に迎えて名簿を作成し、学友を地区またはクラブの行事へ招待し、講演や投稿を依頼し、定期的な懇親会を開催し、有力なロータリアンの候補者とみなし、プログラムの新しい参加者へのオリエンテーションに参加を要請する。

さらに、事業または専門職務に実績を上げた学友で、人類への奉仕を通じて国際理解と平和の推進に努力した者に対し、一〇年から二〇年前にプログラムに参加した者一人に学友業績賞を、二〇年以上前にプログラムに参加した者一人に学友優秀賞を、それぞれ毎年国際大会で贈呈することとしている。

六、ロータリー財団月間

国際ロータリー理事会と財団管理委員会は、毎年十一月を、ロータリー財団月間

The Foundation Monthと定めている。

各クラブが月間中少なくとも一つのプログラムを財団にあてることとして、財団の意義とそのプログラムへの認識を高め、寄付の増進に努めることを求めることが、その目的である。

七、財団をめぐる問題点

財団をめぐる問題は、いくつかの問題点がある。

先ず、実務的なレベルの問題としては、税法上の優遇措置をすべての寄付に拡大すべきではないかとする点、各ロータリー・クラブに対する財団情報の充実と徹底をさ
らにはかるべきであるとする点、より優秀で適切な奨学生の見と選択に努力すべき
であるとする点、財団の将来を考へて恒久基金の充実を重視すべきであるとする点、
国際社会の現状を考へて人道的プログラムを重視すべきであるとする点、財団の国際
社会への寄与をより継続的で効果的なものとするために財団学友の制度のさらなる充
実と強化に努力すべきであるとする点、国際ロータリーが識字率及び計算能力向上の

プログラムを重点課題として取り上げていることに鑑み、これと財団プログラムとの関連の強化に注力すべきであるとする点などが、論ぜられている。

次に、古典的な問題としては、アイ・サーブかウイ・サーブかの性格論がある。いずれの考えをとるかによって、財団の活動に対するロータリアン個々の積極性に差を生ずる。しかしながら、本来アイ・サーブかウイ・サーブかの問題は、理念の段階と行動の段階とに区分して考えるべきものである。理念の段階で考えるならば、我々ロータリアンの心掛けがアイ・サーブでなければならぬことは、いうまでもない。行動の段階でとらえる場合に初めて、アイ・サーブかウイ・サーブかの問題が生じる。この場合、その両方が同等に評価されねばならないことは、容易に理解される。財団の活動がロータリーの行動面における方法論であることは疑いのないところであるから、個人的なアイ・サーブの活動と並行して、ウイ・サーブの財団活動をより活発に展開することにより、世界理解と平和を推進するためのより効果的な成果の実現に努力すべきであることは、論を俟たない。ただ、外的な行動に没頭する余り、理念の面における内的なアイ・サーブの精神を忘却したり無視したりすることにならないよ

う、厳に戒心すべきであることが指摘されるべきであらう。

さらに、二一世紀を迎えて社会の基盤自体の根源的な激変が予想される今日、従来どおり既存の社会基盤に安住してロータリー活動を展開するだけでは、ロータリーの存在意義は徐々に限りなく低下して行かざるを得ない。今後のロータリー活動は、社会基盤の構築自体に向けても、企画され発言され実行されなければならぬ。このよ
うな見地から、財団の活動についても、その原点からの抜本的な見直しを急ぐ必要が
あるものと思われる。

(一九九八年五月)

国際親善奨学生活動に因んで

近時、国際社会のグローバル化が声を大にして指摘され、また、時代の趨勢として大方に理解され受容されていることについては、疑う余地がない。ところが、このグローバル化自体は、欧米の社会および文化への同化を当然の前提として進行するものと理解されているようであるが、実は、そこには、次の二点を中核とする幾多の重大な問題が伏在していることに、留意されねばならない。

まず第一点は、欧米の社会ないし文化は、自然科学と社会科学を中核とする知識と、これらに基づく技術力と、これらの集積である経済力とに至上の価値を置き、しかも個人および社会人としての人間形成の大部分を、宗教であるキリスト教に委ねているが、このことは、人間のあり方としては相当の不整ないしねじれといふべきであり、このことが、彼らの社会と関係社会に、深刻で一見不可解な数々の混乱を多発させる

結果となつてゐる点である。

次に第二点は、欧米の文化ないし価値観は、人種的、歴史的、地域的、社会的諸要因の長期的定着の成果である諸民族の個性的な人文を、表面上重視するように見えながら、実は究極において軽視しないしは否定する方向に推移する特性を有しており、このことは、諸民族間の相互理解を平面的でかつ一面的なものとするだけでなく、実体を偏向させかつ豊かさを欠除させることによつて、その質を著しく低下させる結果を導くこととなつてゐる点である。

そこで、国際社会のグローバル化は、欧米の社会と文化を先進的なものとして、これに十分な評価を払いつつも、徒らにこれに盲従することを極力自制することによつて、同化に伴う弊害の国際社会への拡散の回避に深い配慮を払うことにより、いわばソフトウェアの手法をもつて推移すべきものであることが判明する。

奨学生が派遣国で学習したところの一半は、知識教育とその補完であつたであらうが、その他半は、派遣国の人文に身を以て接触しこれを体験することであつたと思われる。かつて奨学生であつた財団学友も、帰国した奨学生も、今後奨学生として派遣

国で学習される学生も、知識の学習はさておき、派遣国の人文への接触とこれに対する理解こそが肝要であり、このことは、今後二一世紀を迎える時の経過とともに、その重要性がますます高まるであろう。国際理解と相互の親睦により平和な国際社会を築き、人類社会の福祉を実現することを目指すロータリーの国際奉仕の理念を、奨学生として派遣され学習した成果によって現実のものとするべき所以が、そこにあると信ずる次第である。

(一九九八年八月)

GSE活動の今日的意義について

今般私どものR I第二六六〇地区は、カナダ・オンタリオ州のR I第七〇八〇地区から、商工会議所、農業食料品、広告、教育、銀行の各関係者五人からなる基本型のGSEチームを迎え、同チームは、四週間にわたる充実した国際交流活動を終えて先日帰国した。ところで、わが国社会は、経済や教育を始めとして、全般的に極度の不況と混乱の状況にあり、そのことは、外国のGSEチームを受け入れるうえで、一見適切な環境でなかったように思われるが、よく考えると、却って非常に有意義であったと思われる。

共産主義の思想と制度の消退と経済のグローバル化の進行に拘わらず、国際社会は、民族、宗教、人文、習俗などの個性の一方的な集団的主張と、これらを完遂するための社会的、政治的な力や、果ては武力などの実力行使を伴う対立や抗争が続発し、人

間社会にとって不幸で悲惨な事象が激化する様相にある。その結果、個人と集団の個性の相違を相互に理解し合い受容し合い、その間の相互調整に全力を傾注して行く以外に、人間社会の福祉は望めない現状にある。

わが国の社会は、明治初年の脱亜入欧の国是定立以来、相当程度に社会の欧米化の実現を見たが、古来の精神文化も部分的に残存して、今日その逆流現象も発生し、さらには社会の封建的性格の残滓、幾層次にわたる多数の宗教の受容とその共有と混淆、国家と人権にかかる政治的傾向や社会の構造とその価値にかかる意識と観念の相違、その他、人文や習俗にかかる一般の相違が厳存し、表面的な対立抗争に発展することなくとも、社会の底流として潜在し、先般来の構造的不況と称せられるものも、わが国社会に在するこのような矛盾の経済的側面が発現したにすぎないとする見方もある。従って、わが国社会は、今日の国際社会が抱える諸々の矛盾を内蔵するいわばその縮図ともいふべきものであり、その点に、現今のわが国のロータリーが外国のGS Eチームを文化交流活動の一環として迎える意義があるといふことができる。

今後の国際社会は、経済のグローバル化の名の下に、一国の価値観と手法が世界に

強制される社会であってはならない。各国、各民族の人文の価値が、相互に理解され、尊重され、調整されることにより、平和に相互の共存がはかられる社会でなければならぬ。ロータリーの国際交流プログラムの最終目標として、ロータリー財団の文化交流プログラムの存在意義が、高く掲げられねばならないとする所以である。

(一九九九年四月)

世界社会奉仕プロジェクトと 財団の同額補助金プログラムについて

周知のとおり、世界社会奉仕プログラムは、ロータリーの国際奉仕の中核的な活動として、国際社会のレベルで、人々の生活の質を向上させ、人々のニーズに応えるプロジェクトを実施するとともに、異なる国のクラブと地区のプロジェクト遂行にかかる協力や、プロジェクトにかかる情報の交換を推進し、さらに、自主的なプロジェクト実施の重要性や、財団の補助金の活用に関する認識を喚起し、物質的、技術的、専門的な援助を提供することを通じて、国際理解と親善を推進しようとするものである。

一方、ロータリー財団の同額補助金プログラムの目標は、災害救援を含め、世界社会奉仕プロジェクトの遂行を援助することとされている。

元来、世界社会奉仕活動は、個々のクラブまたは地区の自主的な方針と責任と負担

で、プロジェクト交換一覧表、現物出資情報ネットワークなどを参考として、人材ネットワークを活用しながら企画され実施されるものである。一方、財団の人道的プログラムは、財団の寄付金を使用する関係上、財団が厳格な資格条件を設定している。例えば、同額補助金については、個人がセミナー、会議、国際交流活動などに出席するための費用、恒久的な財団や信託または恒久的利益をもたらず預金口座の開設のための資金、土地の取得または建物の建設の資金、給与、人件費、団体の運営費の補助などに使用することはできないとされており、世界社会奉仕関係のプロジェクトは、財団のこのような資格条件に適合するものだけが、同額補助金を受ける対象となる。そこで、世界社会奉仕のプロジェクト自体は、財団の補助金を受けるための資格条件に縛られることなく、どこまでもクラブや地区の自由な発想で、その責任と負担で、自主的に、柔軟に、多様に、強力に、豊かに企画し推進されることが期待され、そこに世界社会奉仕プロジェクトの独自の存在意義がある。従って、クラブや地区が、その活動の範囲を、財団の補助金の額の限度や補助金の交付を受けることができるプロジェクトだけに限定しようとするようなことは、望ましいことではない。例えば、シ

エルター以外の適切な土地建物の調達とか、優秀な人材の確保や識字率向上に関する総合的な支援なども、クラブや地区の自主的な世界社会奉仕活動によって、より強力に、より充実した企画の実施が可能となるであろう。地区と多数のクラブで、世界社会奉仕委員会が、国際奉仕部門の中核委員会として、引き続きその充実した存在と強力な活動が期待されている所以であると思われる。

(一九九八年二月)

米山月間に寄せる

わが国最大の民間奨学財団として米山記念奨学会がアジアからの留学生を中心に果たして来た支援活動は、世界的に極めて高い評価を受けており、日本のロータリーが世界に誇る国際貢献の一つである。私どもは、今後ともこの貴重な奨学会活動を継続し、さらにその充実と発展に努めて行かなければならない。

ところで、人間社会の国際化を支える教育自体の国際化は、私どもが等しく取り組むべき基本的な作業であり課題である。その場合、科学技術の学習の国際化は人類共通の思惟を前提とする関係から比較的容易であるのに比して、人文や精神文化の相互理解と移転は民族の個性を前提とする関係上、比較的困難であることに十分な配慮が必要であろう。さらに、本来米山記念奨学会は、米山梅吉翁の東アジアからの留学生を支援する志向と実績を記念して発足したものであったために、その事業もその目的

に沿う内容のものとして企画され実施されて今日にいたっているが、国際情勢が大きく変化した今日、その目的と内容は大きな変容が予定され、教育の国際化に向けてのわが国ロータリーの国際奉仕活動の一環としての位置付けに、あらためて検討を加えなければならぬ。このような観点から、現今の米山記念奨学会は、次のような幾多の課題を負っているものと思われる。

先ず、奨学生に提供しているわが国の教育の質自体の問題である。欧米の物質文明に追い付くことを当面の目的とした明治教育は、科学技術を中心とした欧米の知識教育の修得に偏向し、わが国固有の人文や精神文化との脈絡を欠落したまま推移し、終戦を折り返し点とする各半世紀ずつを経過してその間数々の異常な社会象の生起をみても、何ら根本的な解決がはかられることもなく、問題の認識すら指摘されていない現況にある。このような見地から、奨学生の教育の内容と環境に不備不整が認められるときは、その速やかな是正と補完のために、適切な措置が講じられねばならない。

次に、教育の国際化のために真に必要な課題は、科学技術を中心とする知識の学習と移転もさることながら、むしろ留学生の母国とわが国それぞれの人文や精神文化の

相互理解と移転にあるのであるから、これに必要な手法と機会が奨学生に適切に提供されねばならない。

さらに、支援のあり方も、経済的支援以外に、各種情報の提供など種々の手法が考えられるし、奨学生個人に対する経済的支援だけでなく、外国の大学における講座の開設と教員の派遣とか、発展途上国における各種教育施設の提供や人材の派遣など、多様で柔軟な手法が検討されるべきではないかと思われる。

均衡のとれた国際化のために、奨学生の選抜の範囲が韓国や中国、台湾に偏することなく、広く世界の各地から採用するよう努めるべきであるとか、非常な困難はあるが、奨学生募集の範囲を在日学生に限定することなく、現地募集に努めるべきであることは、いうまでもない。

いずれにせよ、社会の国際化は、現今の人間社会が抱える最大最終の課題であり、ロータリーが目指す真の国際理解と平和も、これによってのみ実現されるものと思われる。従って、その基礎作業である教育の国際化は、ロータリーにとっても最重要課題の一つであろう。私どもが米山記念奨学会活動の意義を再認識し、その新しい発展

と充実のために注力すべきであると考ええる所以である。

(一九九七年九月)



米山記念奨学会活動にかかる一つの視点

現代は、地球時代と呼ばれる。地球上の何処かで起きた出来事は全世界に影響を及ぼし、私どもは、絶えず世界全体を意識して生活することを強いられているからである。

一口に地球時代といっても、その内容は大別して三つに分かれる。その一は、民族とかその民族特有の人文の相互接触といったもので、極めて強固な個性的な存在の接触であるため、その相互理解と交流は容易でない。その二は、人間共通の資質の発現の成果たる科学や技術などで、そのグローバルな形成や伝達は、比較的容易である。その三は、右の二つの中間に位置するいわゆる国際問題であって、内容的には個性的な人文と共通の文化的諸要素の双方を含むが、国境の存在によって必要となるインターナショナルな解決の努力が、相互理解と交流を実現するための前提条件となってい

るものである。

ロータリーは、社会を組織する人間活動の基本を職業活動に置き、良質の職業活動の成果を中核とし、自己を取り巻く地域社会をよくすることを手始めに、最終的には、相互理解と友好を深めることにより、よりよい平和な国際社会と人間社会一般の福祉を実現することを理想としたが、百年近くを経過した現在、当時の最終目標は現実の課題となっており、先述三の地球時代への対応に迫られている状況にある。

ロータリー米山記念奨学会は、日本のロータリーの国際的努力の一環として創設されたものである。従って、この奨学会は、単に奨学生にハードとしての奨学金を給付するだけの制度ではない。奨学生が、在日体験を通じて、立派な客観的な国際人として成長することを期待しているのである。現今の日本は、地球時代に適応すべく苦悩し、懸命に努力しつつある。従って、奨学生 of 生活環境自体が、そのまま生きた教材である。また、奨学生は、母国を離れ、母国と比してその長所欠点を外から客観的に観察する機会が与えられている。これも、またとない生きた教材であるといわねばならない。

奨学生の滞日学習体験が、単なる知識や技術の修得にとどまらず、豊かな国際人として成長するための充実したものになることを期待する所以である。

(一九九八年五月)

シエルドンと米山梅吉

わが国のロータリーを考える場合、ポール・ハリスは別格として、シエルドンと米山梅吉の二人のことに触れなければならない。今日私どもがロータリーの生命として受け止めている「奉仕」——原語では Service ——という考え方を初めてロータリーに持ち込んだ人がシエルドンであり、このロータリーを日本に持ち込んだ人が米山梅吉であるからである。

周知のように、ロータリーは、一九〇五年（明治三八年）二月に、青年弁護士ポール・ハリスと三人の友人ガスターバス・ローア、シルベスター・シール、ハイラム・ショーレイによってシカゴで創立されたが、創立当時のロータリーは、ごくありふれた単なる社交クラブで、奉仕 (Service) といった考え方は全くなかった。おいしい食事 (Food) をし、面白 (Fun) を楽しみ、クラブの仲間だけの内輪の友情

(Fellowship) を大切にして互いに扶け合うだけのクラブで、頭文字を連ねてFFFクラブという名前を付けることが真剣に検討されたくらいであった。

ところが、創立後三年経った一九〇八年（明治四一年）にシエルドン Arthur Frederick Sheldon が入会した。彼はあくない利益追求と暴力に荒廃し切っていた当時のシカゴに、このような社交クラブの一つを加えて一体何の役に立つだろうかと疑問に思い、色々と観察し考えを廻らしているうちに、どのように混乱した社会にあっても、他人の立場を考え他人のためになるように盡くすという信念をもって事業活動を遂行している者が結局は競争に勝利して自他の幸せを手に入れているという事実に気づき、このような活動すなわち Serviceこそがロータリーの存在意義であると断じ、その旨をポール・ハリスに提言した。ポール・ハリスもシエルドンのこの提言に賛同し、さらに検討を加えるよう激励した。そこで、彼は、一九一〇年（明治四三年）の全米連合大会の晩餐会で、*He Profits Most Who Serves His Fellows Best* 「仲間に最も良く奉仕する者は、最も多く利得する。」という所見を発表し、次いで、翌一九一一年ポートランドの全米ロータリー連合大会で、「仲間に」*His Fellows* を削り、より一

一般的な形として、*He Profits Most Who Serves Best*「最善のサービスを行う者には、最大の利得がある。」という考え方をロータリーの目的とする提言を行い、出席者全員の万雷の拍手を以て大会の決議とされたのである。これがロータリーの世界に「サービス」*Service* という言葉が登場した最初であり、またメルドンのこの提言が今日にいたるまでロータリーの *Motto*「標語」としてロータリアンに親しまれていることも、周知のとおりである。ゆえに、*Service* という言葉は、一九二二年（明治四五年）のデュルースの国際大会で模範ロータリー・クラブ定款中の網領として取り入れられ、次いで一九一八年（大正七年）のカンザスシティーの国際大会では、*The Ideal of Service* という今日の表現となって、ロータリー・クラブの国際連合会自体の網領の中に取り入れられた。

このような経緯を一口で要約すれば、ロータリーとは、ポール・ハリスの発想と設計に基づき、三〇年の長きにわたって事務総長を務めたチェスリー・ペリー *Chesley Perry* が組織したハードの中に、メルドンのサービスの理念をソフトとして盛り込んで構築された、輝かしくも壮大な社会的作品といふべきものであろう。

このようなロータリーを日本の社会に初めて持ち込んだ人が、米山梅吉である。米山梅吉は、一八六八年（明治元年）東京で和田家の三男として生まれた。静岡県の三島は、母の郷里である。一九歳の時に米山家の養子となったが、自分の意思で渡米したため、在米八年間は苦学した。カリフォルニアのベルモント・アカデミー、オハイオのウェスレアン大学、ニューヨークのシラキュース大学などで法学を専攻し、帰朝後は一八九七年（明治三〇年）に三井銀行に入社し、一九〇九年（明治四二年）に常務取締役となり、一九二四年（大正一三年）に三井信託銀行を創立して取締役社長となり、一九三八年（昭和一三年）に貴族院議員に勅選され、一九四六年（昭和二十一年）に八〇歳で逝去されている。

その間、三井銀行の常務取締役であった一九二〇年（大正九年）には、かねて在米中に関心と理解を深めていたロータリーを日本に拡大することを意図し、東京ロータリー・クラブを創立して初代会長となったが、これがわが国に播かれたロータリーの最初の種である。一九二六年（昭和元年）にはR I理事に、一九二八年（昭和三年）には当時のR I第七〇地区（日本）のガバナーに、一九三九年（昭和十四年）には日

満ロータリー連合会を組織して会長となったが、当時の国際情勢の悪化に伴って翌一九四〇年（昭和十五年）には日本のロータリーが解散のやむなきに立ちいたったことも、周知のとおりである。

米山梅吉は、ロータリーをわが国の社会に持ち込むにあたり、網領に掲げられているその核心となる思想「サービスの理念」The Ideal of Service をどのように邦訳するかは大変腐心された。ところが、ロータリーの前提である欧米の社会は個人中心の社会、わが国の社会は全体優先の社会と、社会意識の決定的な相違を前にして、結局 Service はそのまま「サービス」としておく以外にはないとした。ただ、当時のロータリーの先輩の方々は、大変なご苦勞の末「奉仕」の訳を選択され、The Ideal of Service は「奉仕の理想」と訳されることとなった。この訳が連綿と使用され、ロータリーソングにまで採用されて今日にいたっているのである。ただ、サービスの理念は、全体優先の社会意識における「自己犠牲を前提とする無償の奉仕」の思想とは趣を異にするものであり、このずれが依然としてわが国ロータリーが抱える根本的な課題となっているものと思われる。

米山梅吉は、在米中の苦学の留学体験から、日本における留学生、なかんずく東アジアからの留学生に深い関心を寄せ、生涯私財を投じて支援を継続された。そこで、東京ロータリー・クラブは、米山梅吉が逝去された後の一九五三年（昭和二八年）に、米山さんの遺志を記念してクラブに「米山基金」を設置し、これが一九五六年（昭和三一年）に「ロータリー米山奨学委員会」という全国組織に発展し、一九六〇年（昭和三五五年）に「ロータリー米山記念奨学会」と改名され、一九六七年（昭和四二年）に財団法人となった。一九九六年一月現在、基本金四六億円、特別積立金四〇億円、奨学生四二か国から九四九人、奨学生累計六、一五六人に及ぶ日本最大の民間奨学会となっている。

米山記念奨学会の目的は、寄付行為から「アジアの」という限定が先年削除された結果、主としてロータリー所在国からの外国人留学生に奨学金を支給し、ロータリーの理想とする国際理解と親善に寄与することとなっている。世話クラブとカウンセラ制度という人間的接触を重視するわが国独特の奨学制度であり、わが国のロータリーが米山記念奨学会活動部門を保有していることは、ロータリーの目的とする国際理

解と親善を推進するうえで、大變に貴重な意義を持つてゐることを再認識すべきであらう。奨学会の活動は、単なる科学技術的な知識の移転にかかる経済的支援にとどまらぬ。各国各民族各地域固有の精神文化や社会的活動について、相互の交流を通じて理解を深めることが如何に大切であるかを、留学体験を通じて留学生の諸君に自覚して貰ふことにより、国際理解と親善を促進しようとする視点に立つた活動に及ぶべきものである。米山記念奨学会活動がわが国ロータリーの素晴らしい国際貢献の重要な一翼を担う所以であると考えらる次第である。

(一九九六年一〇月)

現今社会を背景に米山記念奨学会活動を考える

周知のとおり、産業革命以降現時にいたる人間社会は、欧米主導の科学技術を中核とする生産手段の開発とその成果である経済によつて領域の大半を支配され、その度は質量共に日一日と進行を早め、また国際的にも急激な拡散の一途を辿りつつある。

ところで、一部の識者の意見によれば、このような事態の進行は早晩行き詰まり、人間社会は危機的様相を迎える惧れがあるという。何故ならば、科学技術の果てしない開発は、人間資質の跋行的不均衡を結果し、徐々に人間精神の自壊をもたらすであろうからであるという。また、日々増加するエネルギーの需要は、化石燃料の利用の域にとどまらず、原子の核エネルギー利用の域に進みつつあるが、これは過去極めて長期間にわたり地球が太陽から逐次受容して物質自体に安定内蔵して来た巨大なエネルギーの集積を、大量かつ恣意的に一時に解放することを意味するものであって、私

どもの現在の生態系を、私どもの存続の前提である地球環境の現況ともども、根本的にかつ急激に破壊し去るものであることが確実に予測されるからであるという。さらに、私どもは、遺伝子への作為に着手しているが、これは私ども生物の安定した世代継承的な存在に、引き返すことが許されない危険とともに、はかり知れない混乱と変容をもたらすもので、これまた私どもの存在自体の否定を結果する無暴な挑戦というべきであるからであるという。

このような事態の進行が間違いなく予測されるとするならば、これを阻止するため私どもの手にどのような方途が残されているであろうか。科学技術の進行に自ら自律的な制約を課することができれば、最も効果的であることはいうまでもない。しかし、そのような期待は、殆ど絶望的であろう。さすれば、人間資質のうち科学技術の分野以外の精神的活動の分野と、その過去における活動の集積である精神文化の解析と理解を進め、これらを活性化する以外に方途はないことに帰着する。しかも、そのような精神的活動の資質分野とその集積である精神文化は、科学技術が民族を超えた世界の共通語であるのに比して、各民族ごとに个性的かつ多様であり、その本格的な

相互理解という甚だ困難な作業を通じてのみ、真の活性化と効用の実現をはかることができるものといえよう。従って、結局において、私どもが当面している危機的事態の回避という前代未聞の課題は、事の性格上、欧米の人たちの努力に依存するだけでは不十分であり、むしろ非欧米の人たちの自覚と努力に待つところが極めて多いといふべきである。そのような意味において、私ども日本人は、人間社会の近未来を見て甚だデリケートで困難な立場にあるといえようが、考え方によっては、極めて重要で決定的な国際貢献の道に進むかどうかの岐路に立たされているともいえよう。

このような視点は、私どもが、わが国の国民一般として、またわが国のロータリアンとして、世界のロータリアンだけでなく世界の人たちのすべてに向けて課せられた国際的課題であろう。ロータリアンのインターナショナル・サービスに掲げられる「国際間の理解と親善」は、窮極的に平和を目的とするものであるどころか、もつと根本的に、人間社会の救済自体を目的とするものであるかも知れないのである。

わが国のロータリアンが米山記念奨学会活動部門を保有していることは、その創設の経緯や目的がどのようなものであったかを問わず、すでに奨学生に対する経済支援の

域を超え、わが国のロータリーの発展と活動の充実を通じて、国際社会に向けて右のような情報を発信し、提言を行い、強力かつ有効な行動を提起して行くための極めて有力な機能を保有していることを意味していることとなるわけであり、米山記念奨学会活動の将来的意義をあらためて再認識する次第である。

(一九九六年七月)

教育問題特別委員会の設置について

近年におけるわが国の教育活動は、基礎的部分である学校教育の分野において、科学技術と物的価値を主潮とする知識に偏重した内容を、画一的かつ羅列的に提供することに終始し、人間と社会に対する深い省察と自覚に基づく人間形成の学習成果が漸次消退ないしは欠落する結果を招き、極めて低位の家庭教育並びに職業教育その他の社会教育一般の実情と相俟って、年とともに社会の質の低下が進行し、数々の困難で新たな社会問題が発生するなど事態が深刻化しつつある現況にある。しかも、教育活動における人間不在は、資金や設備の不足その他研究体制一般の不備と相俟って、学術研究活動の分野においても、基礎的部分から先端分野にいたるまで致命的な欠陥の内包を進め、なかならず、わが国の科学技術の分野の将来に、極めて憂慮すべき事態を予想させる現況にある。

もちろん、昨今の社会の諸事象を踏まえ、教育及び学術研究の理念や制度のあり方について、各種の観点から数々の論議が交わされており、そのこと自体まことに意義深く慶ばしい試みといふべきであるが、そのような論議が果たして人類社会における教育と学術研究の真のあり方を正しく指向しているかどうかの点については、人間存在の原点から、あらためて徹底した検討を加える必要があるかと考える。

かくて、人間社会形成の基本的作業である教育及び学術研究の現状の把握とその改善に努めることにより、人間社会の基盤の構築に向けてサービスの理念の具体的な適用に努めることが、極めて現代的なロータリーの課題であると思ふものである。

そこで、R I第二六六〇地区に教育問題特別委員会を設置していただき、教育及び学術研究の現状に検討を加え、基本的な不備または不整を認めるときは、一般の認識を喚起するとともに、その根本的な是正及び補完にかかる提言を行い、かつ提言の内容を実現するために必要な措置を策定して推進することといたしたい。

(一九九七年三月)

教育問題二題

当面のロータリーの教育関係の活動を、R I レベル及び地区レベルの一つずつについて述べてみたい。前者はいわば発展途上国における教育の質と量の絶対的不足に起因する問題である。後者は先進国における教育の質の不整と量の過剰に起因する問題である。いずれも、人間社会にとって深刻かつ不幸な事象であり問題であるといながら、その原因と結果においては極端な対照を示している。私どもにとって、今後この二つの問題を、教育という人間と社会を形成する活動としての原点から、統一的に理解し把握する道を模索する努力が、避けて通れないのではないかと思われる。

識字率及び計算能力 (Literacy and Numeracy) 向上プログラム関係 (R-レベル)

キンロス Glen W. Kinross 会長は、就任にあたり、一九九七～九八年度の R I テー

マとして「ロータリーの心を——あなたの住むところ 私たちの世界 そこに住むすべての人々に」を掲げられるにあたり、栄養不良、早産、精神障害、重篤な疾病、死亡、幼児虐待、子供の重労働、ストリート・チルドレン、捨児、家庭破壊、犯罪、民族紛争、戦争その他この世におけるさまざま悪の根源である貧困と飢餓との闘いを開始しようと呼びかけられた。そして、地域社会の最も困難な問題であり、国際社会における世界理解と平和にとって重大な障害となつている貧困と飢餓の問題に挑戦し、すべての人々の識字率と計算能力の向上に全力をあげて真剣に取り組むように訴えられた。けだし、私どもは、文字と数字の世界に生きているといつて過言ではないが、貧困は、教育や学習によつて読み書きと計算の能力を身につける機会を奪われた人々を生み出し、これらの非識字者たちは、人間の相互理解や平和の心とか豊かな生活の感情を持つて生きることはおろか、自立して自らの生計の糧を手に入れる手段すら与えられず、貧困からの脱却は絶望的であるだけでなく、さらに新たな貧困を生み出す。

キンロス会長が、世界人口の二〇%以上が貧困と飢餓に苦しむ人々であり、世界で

九億人を超える人々が非識字者であり計算能力を欠く人たちであるという現実を直視し、貧困と非識字問題との悪循環を断ち切るために、識字率や計算能力の高低に拘わらず、全世界のロータリアンが一致してその向上の課題に取り組むべきことを、ポリオ・プラスの後を継ぐR Iの最も重要なプログラムとして、提唱されている所以である。

R Iでは、世界の全ての地域とゾーンと地区を通じ、全てのロータリー・クラブとロータリアンがこの問題に対する認識を深めて現実の計画に参加することを促すために、タスクフォースを設け、R Iの本部にゼネラル・コーディネーターを、全世界の八つの各地域にエリア・コーディネーターを、全世界三四の各ゾーンにゾーン・コーディネーターを（一部の複合ゾーンでは、アシスタント・ゾーン・コーディネーターを併せて）任命している。ゼネラル・コーディネーターはこの問題の世界の先導者であるリチャード・ウォーカー氏 Richard F. Walker (オーストラリア、サリスベリRC)で、わが国のロータリーが属しているアジア地域のエリア・コーディネーターはノラセス・パスマナン氏 Noraseth Pathmanand (タイ、バンコクRC) であり、わが国のゾ

ーン・コーディネーターは、重田政信（ゾーン一、高崎北RC）、岡崎全宏（ゾーン二、横浜南）、小生（ゾーン三、大阪北）、須之内淳二（ゾーン四、アシスタント、松山西）の四氏である。

過般七月一八日から二〇日までの間、タイのバンコクにおいて、エリア・コーディネーターの主催の下にアジア地域のゾーン・コーディネーターのワークショップが開催され、わが国のゾーンからは小生が出席したが、周知のとおり、タイでは一九八七～九一年にわたってタイのロータリアンがオーストラリアのロータリアンの支援の下に「灯台戦略」Lighthouse Strategy という識字率向上の三Hプログラムを実施して非常な成功をおさめ、その結果、このプログラムは政府の手によって全国の小学校に公的に適用されて現在にいたっている実績がある。識字率及び計算能力向上の手法としては、家族の識字率向上、児童の早期教育、小学校教育の改善、成人、女性、職場などの各教育における識字教育や、ストリート・チルドレンの問題があり、このうち小学校教育の改善問題については、その義務教育化や就学率の向上のほか、「CLEの手法」Concentrated Language Encounter Techniques がある。このCLEの手法は、一

つの問題を集中的に討論して、子供の心の内面から興味と関心を掘り起こす手法で、総花式に広く浅く外面から数え込んで行く管理教育の手法とは対照的であり、一旦就学した児童は卒業後も非識字者に戻らないし、未就学ないしは不定就学の児童を小学校に確定的に吸引する大きな力がある。今回のワークシヨップでは、初等教育のCL Eプロジェクト（タイプA）、成人の識字教育プロジェクト（タイプB）、ストリート・チルドレン・プロジェクト（タイプC）を試験的に取り上げることとし、ゾーン五（北インド、パキスタン、ネパール）、ゾーン六（南インド、スリランカ、タイ、バングラデシュ、マレーシア、シンガポール、インドネシア、ブルネイ）、ゾーン七（北西オーストラリア、パプア・ニューギニア、フィリピン）の各ゾーンから、九月末日を用途にそれぞれの試験的プロジェクトをエリア・コーディネーターに提出し、ゾーン一から四までは、世界社会奉仕 World Community Service、ロータリー財団の三Hプログラム、同額補助金 Matched Grants などによる支援を行う準備を検討することとして、意見の集約が行われた。

さらに、RIでは、七月度の理事会で、①識字率及び計算能力向上のプロジェクト

を二〇〇五年まで継続拡大する。②識字能力向上のライトハウス計画（灯台戦略）を、一九九八年のアナハイムとインディアナポリスの国際協議会と国際研究会の論題に取り上げる。③七月を識字率向上月間とする。④各ロータリー・クラブと各地区とが政府機関などを活用して目的を効果的に遂行するよう激励する、などの諸点を決定した。そこでわが国のゾーン・コーディネーターとしては、このようなRIの方針を体し、わが国の全ゾーン及び全地区並びに全ロータリー・クラブが、ゾーン五、六、七からの具体的な計画の連絡があり次第、ゾーン単位または地区単位など相当規模で、世界社会奉仕や同額補助金などの手法による支援計画を立案遂行できる態勢を立てるよう、協力を期待している。

教育問題特別委員会関係（地区レベル）

近年わが国社会を揺るがしている異常な社会事象の続発は、明治以来の教育のあり方の不備不整ないしは欠陥がその根本原因である。過般来の臨教審、中教審の意見や、これらを基本とする文部省主導の教育改革は、無用どころか却って有害であって、真

の教育改革に必要な根本的で正しい提言を早急に行う必要があるとの観点を以て、前年度後半からの準備期間を経て、一九九七～九八年度当初から、地区の特別奉仕部門に、教育問題特別委員会が設置された。その構成は、委員長松岡博（大阪RC）、副委員長山本研二郎（大阪阪南RC）の両氏のほか、地区内の幼稚園、小、中、高校、大学、大学院、高専、専修、特殊学校などの国公私立の学校教育、幼児教育、家庭教育、職場教育、生涯学習を含む社会教育、登校拒否問題などの関係ロータリアン一人（今後も増員予定）の委員である。また、その活動計画は、①学校教育、幼児教育、家庭教育、社会教育など教育一般のわが国における現状について、可及的に的確な共通の認識を形成する。②わが国の教育が带有する問題点ないし欠陥を把握し、その原因を解析する。③教育活動の現状の認識を世界的視野において形成し、社会形成活動としての教育活動のあるべき姿を審究するとともに、これとわが国教育との関連のあり方について、歴史的、地域的その他の人文的諸要素を十分に加味しつつ、徹底した考察を行う。④わが国教育の欠陥の解消その他問題点の解決のための対策を考究し、その実現のために必要で効果的な提言を行う、との四点にあり、すでに活発な活動を

開始している。

周知のとおり、明治初年以来のわが国の教育は、欧米先進社会からの外面的な遅れを早急に取り戻すことを当面の目的としたために、社会の表面的な整備と物質文明の充実に必要な欧米流の科学と技術を中心とする知識の修得に偏向したものとなった。その結果、わが国固有の精神文化なり人文なりの非知識分野にかかる教育は、知識分野の教育との脈絡を断たれ、遂には教育の世界から忘れ去られたものとなった。戦前は皇国史観の存在が、戦後は人間教育を思想教育と速断したアレルギーの存在が、これらの跛行的現象を決定的なものとした。欧米流の知識の修得を以て豊かな人間性の涵養の完成とする後進的錯覚が、いわゆる知識人の間に汎く瀰漫していたことや、欧米流の知識教育に伴うべき人間教育への配慮が、欧米人に対する場合と非欧米人に対する場合とで本質的に相違する点が安易に看過されていたことも、その一因に加えるべきであろう。しかも、真の人文と人間の心への指向の欠落の弊は、深刻な敗戦の体験によっても殆ど是正されることなく経過し、戦後における企業などの社会集団の効率本位の体質や家庭その他の生活集団の個人的分化の進行などとの悪循環によって、

さらに悪化の一途を辿り、ただに社会病理の根本原因たるにとどまらず、民族としての精神的基盤の欠落さえ招きかねない状況にあるだけでなく、抜本的な改善の展望は、殆ど期待できない現状にある。

ところで、知識は外面からの管理教育によつても伝達は可能であるが、人間性ないしは人間の心といった非知識分野は、被教育者自身の内面からの自主的な努力を基本とする非管理的手法によらなければ、到底その涵養が不可能である。この点において、明治以来の従前教育を改革するとして文部省、中教審、臨教審などが発表している意見や実施している手法は、結局において知識分野に対すると同様の外部からの管理教育の手法をそのまま非知識分野に適用しようとする域を出ていないもので、その妥当性の根本において重大な疑問があり、近時わが国社会を揺るがしている異常な犯罪行為や反社会的行為の続出などの事態や、管理教育の面からの改革が論ぜられるつど却つて教育の現場の質が悪化する等の事態も、このような従前の管理教育の安易な継続がもたらした当然の同質的帰結とも考えるべきであろう。

しかも、以上のことは、欧米の教育に本来的に内在する根本的な問題であつて、そ

のような教育が世界の各地域に浸透して行くに伴って国際社会共通の問題として拡散しつつある。人間性と知識とを豊かに兼ね備えた人間を育成しうる教育の手法の案出は、知能という両刃の剣を備えた生物である人間にとって筆舌に盡くし難い難問であろうが、私どもは、よりよい豊かな人間らしい将来社会の形成を目指して、現状の根本的な改善をはかるために、渾身の努力を注ぐことが必要であろうと考える。私どもが、地区に特別委員会を設けて注力する所以である。

(一九九七年九月)

現代教育を眺める一つの視点

周知のとおり、昨今、子供たちや青少年層に、陰湿ないじめ、学校内や家庭内の暴力、不登校ないしは登校拒否、援助交際などの非行や犯罪行為から、学級崩壊などの教育秩序の否定などが激増するとともに、社会の全般に、薬物の濫用、人命の軽視、金銭感覚の鈍麻、精神的志向の消失をはじめとする倫理感の麻痺など、社会意識や価値観の混乱と人間関係の不整が限りなく進行し、このような事態を迎えてにわかに「心の教育」の必要が声高く叫ばれ、これを受けて、文部省が教育のあり方を中央教育審議会に諮問し、これに対して急遽数次にわたる答申が行われるといった事態が生じている。しかしながら、このような議論の経過と内容は、従前の教育に「心の教育」が不足していたことを指摘するのみで、いうところの「心の教育」がどのようなものであるかはおろか、従前の教育が果たしてどのようなものであったかを深く掘り下げ

て論じる視点と検討も十分ではない。このようなことでは、「心の教育」の不在を論じ、従前の教育のあり方を観察して本来あるべき姿との乖離を指摘するという、総合的で客観的な解析を加える条件が殆ど欠落しているといわざるをえない。答申がいか
に網羅的であり、作文としては優秀であつても、その基本に哲学を欠いた状態で関係
事項の標目を単に羅列するだけでは、単に対症療法の域を出ず、問題の本質の解明に
は何の効果もない。「心の教育」の問題を論ずるにあつては、その本質及び対象と
場について、もつと突つ込んだ本格的な論議が必要であらう。なお、問題の所在の認
識を正確にする点からも、作業に必要な手法の考察を的確にする面からも、「心の教
育」は、人間教育として把握する方が、より適切であると考える。

元来、わが国における従前の教育は、知能教育そのものであり、それ以外の何物で
もなかつた。思うに、わが国の近代教育は、明治の初年以來、明治政府によつて策定
され実行されたものであるが、長い鎖国に伴う物質文明展開の大幅な遅れを急遽取り
戻すために、全国津々浦々にいたるまで小学校を設置するほか、さらに数々の多様な
近代的上級学校組織を構築するとともに、この目的を達成するに必要な教育の課程を

定め、これを担当するに適した教員を養成して配置し、国家行政機関の一つである文部省がこれらを統一的に管理することによって実施された。従って、その実質は、自然科学と社会科学並びに工業技術と社会管理技術の各両面にわたり、科学技術の修得を中核とする知能教育に殆ど限定され、その祖型は欧米の教育にあったもので、本格的な人間教育の視点と内容を欠落したものであった。

ここで、知能教育と人間教育とは、その内容その他関係する分野が全く異なることが、明確に留意され理解されねばならない。例えば、教育作業の対象となる人間の資質をとってみても、知能教育の場合は知能のごく限られた一部分だけであるのに、人間教育の場合は知能の他の多くの部分と知能以外の感性的な部分や意思的な部分はもちろん、人間の素質自体の殆ど大半が対象となっている。また、知能教育と人間教育とは、その対象が異なるに伴って、訓練その他の作業の手法の態様や性格が全く異なっている。さらに、知能教育と人間教育とは、その目的が全然異なっており、知能教育の場合は、単に知りたいためとか、知る必要があるからとか、知れば実益があるからといった、倫理とは本来的に無関係なものであるのに対し、人間教育の場合

は、公正な個人の認識の確立と適切な人間関係の構築とか、これらに基づく正しい社会生活関係の実現などがその目的となっている。従って、知能教育の場では、教育課程及びその実現のための作業の策定と実施を始めとして、その成果の評価その他全般にわたり、管理教育の手法が適合するのに対し、人間教育の場では、管理教育の手法は殆ど効果がないばかりでなくむしろ有害であり、主として個人的接触を中核とする非管理的手法により、個人の資質の自主的で自発的な開発と形成を促進することが必要である。管理教育の課程と手法に習熟した従前の教員や管理者らにとって、人間教育の適切な処理は非常に困難であり、その双方の兼務的処理は、殆ど不可能に近い。極言するならば、既存の文部省や教育委員会その他各種の教育審議会などは、従来の教育の知能教育を管理教育の手法により永年担当し、その手法に習熟して来たものとして、人間教育の策定と実施については殆ど無力無関係な存在であるどころか、その介入は却って有害である。人間教育については、全く想を新たにした抜本的な別異の方途が検討されねばならないとする所以である。

ところで、わが国近代教育の祖型であった欧米の教育は、ルネッサンス以降、科学

技術の開発修得を指向する知能教育を中核的な課題としており、人間教育の側面を殆ど帯有していなかった。欧米社会を構築したゲルマンは、科学技術を中核とする知能教育を、キリスト教とともにルネッサンスから継受した関係から、人間教育の側面をキリスト教に安易にかつ全面的に委ねたことが、その原因である。従って、わが国が欧米の教育を模倣し継受するにあたっては、その祖型における人間教育の不在を解決するための万全の独自工夫と努力を払うべきであったのに、明治政府はその努力を怠っただけでなく、問題の認識すら全く持ち合わせていなかった。それどころか、富国強兵の目的を達成するため、皇国史観を前提とした誤った人間観を前提として欧米の科学技術を構築すれば能事終わるとする安易な方策に終始し、一般社会においても、多量の欧米知識の修得をもって人間的完成とする後進的錯覚が横行していた。第二次大戦の開始と敗戦は、むしろこのような本格的な人間教育を欠いたことによる国家なしいしは民族としての実力の不足の当然の帰結であったが、戦後は、このようなわが国の人間教育の欠落を解決する絶好の機会であったのに、米国の誤解に基づく方針と人間教育を思想教育と強弁する誤った唯物的な思想的アレルギーが社会を風靡して、完

全にこれを妨げた。その結果、わが国は、明治以来本格的な人間教育を真摯に社会に作出することなく、只管ひたすらに知能教育を弄びながら、漫然と百有余年の時を徒過した。老若男女と職種を問わず、国民の大部分が、人間不在の社会の口中に身を置きながら、現状の危機とその真因の認識すら不十分のまま、徒に右往左往して日を過ごしつつある現況にあることは、むしろ当然の結末といふべきであらう。

欧米社会においては、先述のとおり、キリスト教の存在が人間教育に代わる位置を占めて来たので、人間教育不在の問題は、表面上は一応問題化せずに移しているやにみえる。しかしながら、キリスト教は、ゲルマンにとつては資質的に本来借着である。キリスト教は、ユダヤのものであつて、ゲルマン固有のものではない。のみならず、キリスト教は、宗教である。宗教が人間教育に代わるこの意味は、その利点と同時にその弊害について、十二分に厳しく観察され、再検討されねばならない。欧米社会が帯有する不可解で深刻な矛盾との関連が、十分に解明されねばならない。今や国際社会は、政治経済その他社会的諸要素を総合的にグローバル化しつつあるが、そのグローバル化は、欧米社会の主導をもつて進行しつつある。本格的な人間教育を欠

く欧米の教育によって構築された欧米社会の主導による国際社会のグローバル化に伴って、欧米社会の持つ体質的な欠陥の国際社会への拡散がもたらされることを、極度に警戒しなければならぬ。欧米社会の欠陥の国際社会への拡散を防止し、各民族の個人と社会の独自の健全な発展を実現するためには、各民族の個性的な存在と生活の根であるそれぞれの人文の評価と発展が不可欠であり、そのような個性的な人文の評価と発展は、各民族の人間教育によってのみもたらされるものであることは、いうまでもない。ここにおいて、人間教育の不在の問題は、わが国教育の問題にとどまるものではなく、その祖型であり国際社会を構築しつつある欧米教育自体の問題として、さらには国際的な人類社会の場における教育のあり方の問題として、改めて根本的に問い直すところから始めなければならないことに帰着する。

(一九九八年八月)

人間教育への提言

近年、国の内外を問わず、自然と社会の各層各方面にわたり、続発して社会を揺るがしている障害や不祥事は、健全な社会感覚の消退ないしは心の病理の進行がその原因であろうが、実体は人が自らと社会のあり方を問いかける哲学と倫理の不在に帰着する。そして、根本的な素因は、わが国にあっては、人間教育の不在と欧米科学知識教育の無定見な模倣という、明治以来私どもが受けかつ与えて来た教育のあり方の不備不整にあるが、基本的には欧米の科学知識偏向教育自体にある。しかも、真に憂うべきは、日々表面に報道される目立った個別の事象よりは、むしろ着実に進行する自然の破壊であり、社会全域の水面下で静かに進行する人々の心の変質ないしは腐蝕であろう。

先ず、人間は優れた知能という類い希な資質を与えられた生物であるが、欧米人は、

個人の自由を思想的基盤とし、知能を手段として、自然と社会の両面において科学知識の無制約かつ無限定な開発を進めることにより、自然科学と社会科学の学術成果を蓄積しつつ、これらを技術面に活用して、工業技術と社会管理技術の合理化と高度化を実現し、さらにこれらの相乗効果として、巨大な経済実果を集積するにいたった。これらの科学技術は、高度の快適生活と社会の外面整備の享受を現実のものとし、その進行はとどまるところを知らない現況にある。また、非欧米人は、その現実の成果に驚倒して無批判に欧米の科学技術の学習と模倣に狂奔し、この傾向は全世界に向けて逐次拡大している現況にある。しかしながら、このような欧米の科学技術知識には、本来的に倫理性が稀薄であること、自然は人間のために存在するという考え方を価値観の当然の前提としていること、個人の存在を以てすべての価値の基準としていること、非欧米人に固有の個性的な人文を軽視し否定することとなるなどの根本的な問題点があり、わが国を含め、世界的に生起している自然的、社会的な重大な障害のすべては、これらの問題点をその主因とするものであることが、容易に判明する。

次に、わが国の近代教育は、長い鎖国の夢から醒めて社会の外面整備の致命的な遅

れを自覚した明治初年以來、物質文明の充實を当面の至上目的として、欧米の科学技術にかかる知識と実技の修得を無批判に継受することを主たる内容とする手法に終始し、人間と社会自体のあり方の根本を問うことにより、深く健全な心と社会意識の涵養を指向する教育本来の課題と使命を、殆ど看過し放棄して今日にいたった。もちろん、この場合における科学が自然科学と社会科学の双方を含み、技術が工業技術と社会管理技術の双方を含むことは、いうまでもない。この間、戦前にあつては、皇国史観が国の近代化の精神的基盤として引き続き不可避的に選択され強制されたことが、この跛行的現象を決定的なものとした。また、科学技術の開発が社会の外面的繁栄と快適生活の保証に見るべき現実の成果を私どもにもたらしたことが、真の価値に対する私どもの省察を遅らせたことも否めない。欧米流の知識の修得を以て豊かな人間性の涵養の完成とする後進的な錯覚がいわゆる知識人の間に汎く瀰漫していたことが、問題の的確な認識を妨げたことも、原因の一つに数えられる。さらに、本来人間の精神的資質は一体のものであるから、欧米の科学的知識部分だけを分別抽出して、これを非欧米人が学習の対象としようとする場合には、これを支える非欧米の人間資質全

体との調整が必要不可欠である筈であつたのに、わが国の明治教育には、このような問題の認識も教育上の配慮も全く欠けていたことが、事態の本質的な解決を本来的に否定していたと評することもできる。敗戦は、私どもが自らの自覚と努力によつてわが国社会に初めて人と社会にかかる考え方の基盤を確立する絶好の機会であつたが、戦前の皇国史観に対する反作用として人間教育を思想教育と速断するアレルギーが存在したことが、作業の着手と達成を決定的に妨げた。却つて、私どもが生活する社会環境は、人間教育の不在と科学万能教育の効果として、企業その他の社会集団が経済効率を追求するだけの外面的体質への傾斜を深め、家庭その他の生活集団が眞の基盤を欠く初歩的個人化を深めてその存在意義を減じて行く状況で推移し、ために私どもは、この絶好の機会を些かも利用することなく、今日にいたつてゐる。

二〇世紀から二一世紀に移行しようとする現在、私どもの人間社会においては、国の内外を問わず、深刻な問題が次々と提起されている。例えば、自然は人間のためにあるとの価値観は、エネルギーの過剰使用により、気象条件に重大な変動を与え、化学物質とバイオテクノロジーの多用により、遺伝子等生物存在の基本自体の破壊を進

行させているし、科学技術による物の開発は、人々の物に対する関心を激化させることにより、社会の物的傾斜の病理と各種社会管理領域の腐蝕を進行させているし、すべての価値基準を個人に置く考え方は、社会管理の高度化に伴い、社会の個人分化と個人の意識分裂の病理を進行させているし、知能の恣意的な利用の放置は、科学技術と経済社会の圧倒的優位の形成と過度の競争心理の増幅を促進させることにより、人の心の体質疲労の蓄積と空洞化を着実に進行させているし、民族個性の軽視は、人文の消退を招くことにより、人間関係の構築と国際理解の質の低下を進行させている。私どもは、徒にこれらの事象の発生と推移を平板的に羅列し、その悪化の着実な進行を眺めながら何らなすことなく放置して、その日を送る現況にある。ところで、現代の人間社会が抱えるこのような諸問題の根本的な原因は、すべて従前教育の欠陥に帰着する。何故ならば、教育とは、人間を形成しその結果として社会を構築する基本的な社会活動であるが、従前教育によって形成された人間によって私どもの社会に右のような諸問題が提起されているのであるから、その原因の大半は、従前教育の責に帰せられるべきものであるからである。そこで、このような視点から従前教育が帶有す

る欠陥を考察すれば、大略次のような諸点に帰着することとなる。

①基本的には、従前教育には、人間とは何か、社会とは何か、人間の個人としての存在とは何か、社会の中における人間の存在とは何かを、根本的に問い直し省察し学習する哲学と倫理が、完全に欠落している。その結果として、以下に述べる欠陥が、さらに二次的に派生している。

②従前教育にあつては、自然は人間のために存在するという人間中心の価値観が、当然の前提となつている。ところが、人間も他の生物と等しく、たまたまこの地球上に生を享けた生物の一類型に過ぎないことは疑いのない真実であるから、右の前提は明らかに誤っている。右の前提の誤りは、地球の自然を利用するにあたって、私どもの心構えの基本的な誤りを導く。この意味において、現時も安易に多用される「自然の環境」の用語すら、適切を欠く表現である憾みがある。

③従前教育においては、知能は個人の資質の一部に属するもの速断されている。知能には、社会資源としての重要な側面があるのに、その評価の側面が完全に欠落している。その結果、教育は、専ら個人的利益を追求する能力を獲得するための手段として

位置付けられ、人間を形成して社会を構築するための基本的な社会活動であるとの視点が、全く認識されていない。

④人間は、社会においてのみ生きて行くことができる社会的存在として、本質的に社会性による制約を受けているものであるから、人間の資質の一部である知能にも、社会性による制約があることは自明の理であるのに、従前教育には、知能の自己制約の必要とそのあり方を教える部分が完全に欠落し、知能を個人の恣意的な行使に委ねたまま放置している。その結果、社会経済の外面においてハード面の過度の競争を抑制する修正措置をいくら講じてみても、肝心の人の能力の内面からの自己抑制をはからない限り、人の精神のソフト面での被害は、全く解決しない。

⑤従前教育の内容は、科学技術の学習に偏向し、人文の要素が極めて稀薄である。人間資質の一部が知能であり、知能の活動成果の一部が知識であり、科学技術にかかる知識は、さらにそのような知識の一部に過ぎない。従って、知識の科学技術部分の過大な局部的開発は、人間資質の自壊をもたらし、精神の病理を進行させる。のみならず、人間の生活の根は、その生活社会の基盤に横たわる人文に存するものであるから、

人文の裏付けなくしては、真の人の幸せも、心の通い合う人間関係の構築も、ひいては国際的な相互理解も、実現不可能である。

以上のような従前教育の欠陥を是正しようとする場合の留意点を具体的に指摘すれば、次の諸点となろう。

①人と社会のあり方の根本を問う哲学と倫理を中核的なテーマとする人間教育の概念を定立するとともに、人間教育には、従前教育が帶有する前述の派生的な欠陥の是正を含めることとする。そして、人間教育に必要な指導者を育成して、高い社会的評価と待遇を保証する。そのために、文部省、教育委員会、教員、各種教育関係審議会など既存の管理教育の関係者や機関とは全く無関係に、社会の各層各面から柔軟な思考に恵まれた適切な委員を選任して新たな審議会と事務主担行政庁を設け、新たに国立の教育機関を設置して適切な教員を任命配置し、指導者育成のための教育の内容と課程を決定して実施する。

②現在の小学校、中学校、高等学校に学ぶ年齢層に大略匹敵する年齢の学童と生徒については、国立学校における一貫教育とし、①の指導者による人間教育と従前教員に

よる基礎学力の養成教育の双方を、徹底して並行実施する。この場合、人間教育については、文部省主導の管理的手法を完全に排除して、①の行政庁の事務主担のもとに、学童と生徒自身の内面からの自主的努力を喚起することを基本とする非管理的手法によつて実施するものとする。また、基礎学力養成教育については、文部省等の既存機関の管轄のもとで、従前の管理的手法により、学童生徒の能力区分に徹して、適切な学力養成教育を従前以上に強化して実施する。なお、この一貫教育は、すべて国立学校において行い、公立及び私立の学校の参加は予定せず、いわゆる学力テスト、通信教育、塾教育の関与を一切禁止する。少年期における能力の不自然な開発は、人格の形成と資質の向上の両面から、極めて有害であるからである。

③現在の大学、大学院その他の研究施設に学ぶ年齢層に大略匹敵する年齢の学生及び研究者については、国公立及び私立の各種学校施設により、職能教育、技術教育、学術研究の各層各面において、従前教育に倍加する多様多彩で高度な教育研究活動を、徹底して実施する。

④幼稚園その他の幼児教育、家庭教育や、職場教育、地域教育、生涯学習その他の社

会教育においても、①の行政庁の事務主担のもと、①の指導者の派遣や①の教育機関における希望者の受講等の機会を十分に確保することによって、学校教育における人間教育の補完に努める。

以上述べたところによつて明らかかとおり、例えばわが国の青少年や行政と企業の幹部らの異常な目に余る非行の続発などを目前にして、従前の管理教育の手法の安易な延長線上で、対症療法的に急遽「心の教育」を分別して取り上げてみても、殆ど無意味であるだけでなく、却つて有害である。従前教育で専ら主たる対象とされた知識だけではなく、これを含む人間の資質全体の存在のあり方自体を、非管理的手法により根本的に問い直す人間教育によつてのみ、充実した心の教育の成果を上げることができる。このことは、恐らくわが国だけではなく、欧米諸国はもちろん他の非欧米諸国においても、多少の異同はあつても事情は同様であらうと思われる。もちろん、教育の成果の受け入れ先である従前社会自体がその帶有する諸欠陥を是正しない限り、教育の従前体質を変えることは不可能であるとの論議もあらう。しかしながら、教育と社会とは、いわゆる鶏と卵の関係にある。私どもには、先ず社会を構築する人の形

成に着手する以外に、与えられた方法はない。科学技術と経済成果の力によって完全に支配されている人間社会の現状の病理的体質を、非管理的手法による人間教育の力によって徐々に変えて行くことだけが、着実に一步一步破滅に向かいつつある私ども人間社会を救う唯一の方途であると考えられるからである。

ロータリーは、人間の個人としてのあり方と社会におけるあり方を根本的に省察し、その社会性を醇化して、その結果を社会的な活動に反映することを社会に提言し、行動面において実現をはかって行くこととするものであるから、先述の人間教育の理念の確立、指導力の形成、あらゆる教育面におけるその実施に向けて、万全の支援と協力を努めなければならないことは、いうまでもないところといわねばならない。

(一九九八年九月)

教育の目的

教育の目的は、端的にいえば、自己開発と自己抑制の双方を実現することにある。自己開発とは、いうまでもなく、単なる知能だけでなく、感性、意志、体力をはじめ、人の個人的な資質の可及的多くの部分の学習と訓練を重ねることにより、潜在能力を引き出して増加させることであろう。自己抑制とは、したくてもしてはならないことと、したくなくてもしなければならぬことが厳に存在することを自覚させ、実践させることであろう。

教育とは、醇良な人間を形成し、その結果として良質な社会を構築し、人々が幸せな生を送ることができるよう努める基本的な社会形成活動であろうが、その目的を達成するためには、人々の自己開発と自己抑制を併せ実現することが、不可避の前提となる。しかも、人は、心的にも物的にも一人で生きて行かねばならないが、同時に

一人では生きて行けないという根源の矛盾に生きる存在であり、この矛盾を乗り越えて生きねばならないことが求められるので、自己開発と自己抑制という教育の目的も、共にこの自律と倫理に立脚して実現されなければならない。その際、人は一人でないとして生きて行けないが、同時に一人では生きて行けないという矛盾に生きねばならないのは、人間が知能という優れた両刃の剣を与えられていることの反映であることが、深く省察されなければならない。

科学技術は、その基本的な性格として自律的に開発が進行し、個人としての人間や社会的存在としての人間のために開発を進行させるといふ方向性や、人間のためにならない開発を抑制するといふ制約は、全く期待できない。正確には、科学技術にそのような方向性や制約が期待できないのではない。科学技術を支える知能に期待できないのである。現今のわが国社会が方向性と抑制を欠く現況にある根本的原因が、科学技術を中心とする知能の開発に偏し、他の人間資質の開発を殆ど等閑視してはばからないわが国の教育にある所以も、また明らかである。さらに付言するならば、現今のわが国の教育は、自己の欲するままに生きることを教え、自己抑制については、殆ど

教えることはない。自己開発も、科学技術を中心とする知識の開発に偏してはばからなだけでなく、何のために知識開発を行うのか、人の存在の根源の矛盾との関連はどうかなどの論点に、全く触れることはない。現代教育のあり方を根本的に洗い直す必要があると考える所以である。

(一九九九年四月)

現代教育が抱える問題点と解決への糸口について

周知のとおり、小学生や中学生から高校生に及ぶわが国の子供たちに、陰湿ないじめ、学校や家庭内の暴力、登校拒否ないしは不登校、中途退学、暴走族や暴力団への加入、薬物の濫用、不純な性行動、援助交際などの非行と犯罪行為や、学級から学校に及ぶ教育の崩壊はもちろん、父親、母親の教育能力の喪失、教育環境としての家庭の崩壊など、ありとあらゆる既存の教育価値の否定や教育秩序の混乱が続発し、さらには大学における教育の質の水準の著しい低下が、追い打ちをかけるように着実に進行しつつある。このような事態を迎え、中央教育審議会や文部省を中心に、主として学校教育の場における「心の教育」なるものの必要がにわかに声高く論ぜられ、マスコミやPTAその他の周辺関係者を加え、いわゆる学校叩きという社会現象が狂熱的に横行し、体罰の禁止とか校則その他諸規則の緩和や撤廃などを中心とする教育現場

の対症的見直し、自由で自主的とする教育への志向、個性を重視するとする教育への移行、ゆとりのある教育を目指すとする教育課程の軽減など、多種多様な教育方法の具体的方策が提唱され、実施されようとしている。しかしながら、このような学校教育の場における子供たちの病理現象の真因は、学校にあるというよりは、もつと広域的にわが国の社会自体にあると思われる。さらに、病理現象を呈しているのは子供たちだけでなく、大人たちわが国民の全体であろう。わが国の社会は、金銭感覚の鈍麻、勤労意欲の低下、利己的言動の跋扈、無定見な情報の氾濫、信念その他の精神的志向の消退、公共的な関心や国家意識の稀薄化、人命の軽視などをはじめとして、社会意識や価値観の一般的な混乱と人間関係の不整が限りなく進行しつつある現状にあるからである。従って、子供たちの非行や教育秩序の崩壊を表面的に観察し、「心の教育」の必要を抽象的に唱えるだけでは、何の根本的解決にもならないどころか、長期の視点からは却って有害であろう。審議会の答申や教育改革をめぐる議論は、従前の教育自体に「心の教育」が不足していたと指摘するのみで、いうところの「心の教育」がどのようなものであるかはおろか、従前の教育自体が果たしてどのようなものであつ

たかを深く掘り下げて論じる視点と検討も十分ではない。内容が網羅的であり、作文や言論として優秀であつても、その基本に哲学を欠いた状態で関係事項の標目を羅列するだけでは、事態の解説と対症療法の掲出の域を出せず、問題の本質の解明には何の効果も期待できない。「心の教育」の問題を論ずるにあつては、その本質及び対象と場について、もっと突っ込んだ本格的な論議が必要である。なお、問題の所在の認識を深化し、作業に必要な手法の考察を的確にする面からも、「心の教育」は、「人間教育」として把握する方が、より適切であると考ええる。

元来、わが国における従前の教育は、知能教育そのものであつた。わが国の近代教育は、明治の初年以來、明治政府によつて策定され実行されたものであるが、長い鎖国に伴う物質文明展開の大幅な遅れを急遽取り戻すために、全国津々浦々にいたるまで小学校を設置するほか、さらに数々の多様な近代的上級学校組織を構築し、これに必要な教育の課程を定めるとともに、教員を養成して配置し、国家行政機関の一環である文部省がこれらを統一的に管理することによつて実施されたが、その実質は、科学と技術の修得を中核とする知能教育に殆ど限定され、その祖型は欧米の教育にあり、

本格的な人間教育の視点と内容を欠落していた。ここで、科学とは自然科学と社会科学を併せ含むものであること、及び技術とは工業技術と社会管理技術を併せ含むものであることの認識が肝要である。このような学校教育の現場の実態を見ると、全体として学校組織が整然と構築され、すべての子供たちは、小学校から高等学校にいたるまで、学区制によつて区画された同一の学校組織の中を整然と横並びに進級するように仕向けられている。そこで行われる教育は知能教育であり、学習の方法と成果は、教育過程に基づく授業の実施と試験の採点という集団的な管理教育の手法により、評価に一見明白な量的格差を付して行われる。その格差は、そのまま最終学歴である大学の格差に持ち込まれ、この格差が、その後の実社会における職業生活における格差として、決定的な影響を持つている。社会においては、行政、企業、各種団体その他各層各面に格差があり、その格差は、終身雇用を中核とする各種の社会制度により、人々の生涯にわたつて影響を与え続ける。現在のわが国において、人が社会で生きるこの実態は、このようなことである。そこに存在するものは、学校と社会の両面にわたる科学技術知識と経済成果の支配であり、それへの対応の良否が人の生涯を支配

するという実態である。このような体制に対する対応として、教育は最も有効な投資であるとする思想が当然のことと観念され、いわゆる教育ママを中核とする受験戦争が激化し、その需要に応えるために、知能を病的に磨き上げる塾教育が世界に例を見ない質と量を誇示しつつ教育産業なるものに成長し、その競争的展開の進行によって、公的教育機関を核とする教育の本来的作業は、完全に社会の片隅に押しやられてしまった現状にある。

ここで、知能教育と人間教育とは、その内容や方法その他の関係分野が全く異なることが、明確に認識され理解されねばならない。例えば、教育作業の対象となる資質をとってみても、知能教育の場合は知能のごく限られた一部分だけであるが、人間教育の場合は知能の他の多くの部分と知能以外の感性的な部分や意思的な部分はもちろん、身体を含め人間の素質の殆ど大半自体が対象となっている。また、知能教育と人間教育とは、その対象が異なるに伴って、訓練その他の作業の手法の態様や性格が全く異なっている。例えば、知能教育では諳記とか解釈や応用といった知能活動が中心であるが、人間教育では認識とか考え方などの精神活動や躰などの身体的訓練が

中心となろう。さらに、知能教育と人間教育とは、その目的が全然異なっている。知能教育の場合は、単に知りたいためとか、知る必要があるからとか、知れば実益があるからといった、倫理とは本来的に無関係なものであるのに対し、人間教育の場合は、公正な個人の認識の確立や適切な人間関係の構築とか、これらに基づく正しい社会生活関係の実現などが、その目的となっている。従って、知能教育の場では、教育の内容やその実現のための作業の策定と実施はもちろん、その成果の評価その他全般にわたり、管理教育の手法が適合するが、人間教育の場では、管理教育の手法は殆ど効果がないばかりかむしろ有害で、主として個人的接触を中核とする非管理的手法によって、個人の資質の自主的で自発的な開発と形成を促進することが必要である。従って、管理教育の課程と手法に習熟した従前の教員や管理者の人たちにとって、人間教育の適切な処理は困難であり、その双方の兼務的処理は殆ど不可能に近いであろう。人間教育は手作りの教育であり、大変な努力と手間を必要とするものであろうが、だからといってこれを省略したり軽視したりすることは、人間がその将来社会の展望とあり方を考えて行くうえで、許されないことである。知能教育は知的訓練という方が

適切であり、真の教育とは人間教育だけであるというべきであるかもしれない。

わが国近代教育の祖型であった欧米の教育は、ルネッサンス以降、科学技術の開発と修得を指向する知能教育を中核的な課題としており、人間教育の側面を殆ど帯有していなかったと思われる。欧米社会を構築したゲルマンの人々は、キリスト教会による教化を受ける過程を通じて、科学技術を中核とする知能教育をキリスト教とともに一体として継受した関係から、人間教育の側面をキリスト教に全面的に委ねてしまつたことが、その原因である。従つて、わが国が欧米の知能教育を模倣し継受するにあつたことは、その祖型における人間教育の不在を解決するために独自の工夫と努力を払うべきであつたのに、明治政府はその努力を怠つただけでなく、問題の認識すら持ち合わせていなかった。それどころか、富国強兵の目的を達成するため、皇国史観を前提とした誤つた人間観を前提として、その上に欧米の科学技術を構築すれば能事終わるとする安易な方策に終始し、一般社会においても、多量の欧米知識の修得をもつて人間の完成とする後進的錯覚が横行していた。第二次大戦の開始と敗戦は、むしろこのような本格的な人間教育を欠いたことによる国家ないしは民族としての実力の不足

が招いた当然の帰結といふべきものであろう。敗戦期は、このようなわが国の人間教育の欠落を解決する絶好の機会であったのに、米国の誤解に基づく方針と、人間教育を思想教育と強弁する誤った唯物的な思想的アレルギーが、社会を風靡して完全にこれを妨げた。その結果、わが国は、明治以来本格的な人間教育を真摯に社会に作出することなく、只管ひたすらに知能とその成果である知識を弄びながら、漫然と百有余年の時を徒過した。世界有数の科学技術の水準を達成した先進国家とされながら、老若男女と職種を問わず国民の大部分が人間不在の社会の只中に身を置くことを余儀なくされ、現状の危機とその真因の認識すら不十分なまま、徒に右往左往して日を過ごしつつあるという奇妙で危機的な現況にあることは、むしろ当然の結末といふべきであらう。もちろん、欧米社会においては、先述のとおり、キリスト教の存在が人間教育に代わる位置を占めて来たので、人間教育不在の問題は、表面上は一応問題化せずに推移しているやにみえる。しかしながら、キリスト教は、本来的にユダヤの人々のものであり、ゲルマンの人々に固有のものではない。のみならず、宗教が、学校教育はもちろん、基礎的な家庭教育や社会教育における人間教育に代わるこの意味は、その利点

と同時にその弊害についても、十二分に観察され再検討されねばならない。欧米社会が帯有する不可解で深刻な矛盾との関連が、十分に留意され解明されねばならない。今や国際社会は、政治経済その他の社会的諸要素を総合的にグローバル化しつつあるが、そのグローバル化は、欧米社会の主導をもつて進行しつつある。欧米社会の持つ体質的な矛盾が、グローバル化の名の下に、国際社会に拡散されてはならない。国際社会の真のグローバル化のためには、各民族の個性的な存在と生活の根であるそれぞれの人文の相互の評価と発展が不可欠であり、そのことが各民族の人間教育によってのみもたらされるものであることは、いうまでもない。ここにおいて、人間教育の不在の問題は、国際的な人類社会における教育のあり方の問題として、改めて根本的に問い直すところから始めなければならぬというべきであろう。

二一世紀を迎えようとする現在、自然科学と社会科学の両面にわたる科学技術の開発により、人間社会は、科学技術と経済成果の完全な支配下にある。そこでは、国の内外を問わず、深刻な問題が次々と提起されている。例えば、自然は人間のためにあるとの価値観が当然の前提となっている。このことにより、先ずエネルギーの過剰使

用が、気象条件と生態系に決定的な変動を引き起こしている。化学物質とバイオテクノロジーの多用は、遺伝子その他生物存在の基本自体の破壊を進行させている。果てしない物の開発は、人々の物に対する関心を激化させることにより、社会の物的傾斜と各種社会管理領域の腐蝕の病理を進行させている。すべての価値基準を個人に置く考え方は、社会管理の高度化に伴い、社会の個人分化と個人の意識分裂の病理を進行させている。科学的知能の恣意的な利用の放置は、経済社会の圧倒的優位の形成と過度の競争心理の増幅を促進させ、これに伴い、人の心の体質疲労の蓄積と空洞化を着実に進行させている。科学知識の偏重は、民族個有の人文の消退を招くことにより、人間関係と国際理解の質の低下を進行させている。私どもは、徒らにこれらの事象の発生と推移を断片的にかつ平板的に羅列し、その悪化の着実な進行を眺めながら何らなすことなく放置して、その日を送る現況にある。ところで、現代の人間社会が抱えるこのような諸問題の根本的な原因は、すべて自然科学と工業技術及び社会科学と社会管理技術の両面にわたる科学技術の修得に偏した従前教育の欠陥に帰着する。何故ならば、教育とは、人間を形成しその結果として社会を構築する基本的な社会活動で

あるが、従前教育によって形成された人間によって、私どもの社会にこのような諸問題が提起されているからである。

生命科学者中村桂子氏は、その著『科学技術時代の子どもたち』の中で、科学技術時代を支える価値観として、効率を至上とすること、何事にも正解があると信仰すること、すべてを量で測ることの三つを上げておられ、このご指摘は、正に正鵠を射たものと考える。そこで、この点を少し掘り下げて考えてみたい。先ず、等しく科学技術といっても、先述のとおり、自然科学とその成果である工業技術と、社会科学とその成果である社会管理技術とがある。この両者は、その対象の範囲やその性格に相当の差異があるが、人の知能の思推作用が機能する質からすれば、殆ど等質的な分野に属する。前者は、果てしない物の開発を通じ、人間の生体とこれを取り巻く自然の環境に限りない損傷や破壊などの危険をもたらし、後者は、社会の表面的整備と画一化を通じ、人の心と人文のとめどもない消退と破壊の危険をもたらす。次に、科学技術は、本来的に盲目的作業である。強いていえば、物を開発して生活環境をよりよくより快適にするための作業とでもいうべきであろう。ところが、人にとって、よりよい

生活環境に生きることは大切な価値の一つではあるが、人は、快適にのみ生きるものではない。人は、人間の全存在として生きるものであり、快適な生活は、人が生きるための価値の一部に過ぎない。人は、科学技術以外に、個人として生き、社会の中に生きることの価値への自覚と認識を内容とする自己の倫理を持たなければならぬ。科学技術は、人がその倫理の下にこれを利用することによって、初めてその内蔵する危険を封じ、人のため真の効用を発揮することができる。ここにおいて、科学技術を主体とする知能教育がより高度な水準を求めて専門化すればする程、人の生存の基本の自覚を求める倫理を内容とする人間教育の充実と強化がはからねばならない。所以が明らかとなる。従って、科学技術をコントロールすべき人の完成を目的とする人間教育を、コントロールの対象たる社会管理技術の枠内の管理教育の手法で実施しようとすることは、そのこと自体が根本的な自己矛盾である所以も明らかとなる。このような性格と価値観を伴った科学技術が支配的な教育環境のもとで、個性を尊重する教育や、ゆとりある教育の実現を論じてみても、果たしてどれだけの意味があるか。

そこで、このような視点から従前教育が帶有する欠陥を具体的に考察すれば、大略次のような諸点に帰着することとなる。基本的に、従前教育には、人間とは何か、社会とは何か、人間の個人としての存在とは何か、社会の中における人間の存在とは何かを、根本的に問い直し省察し学習する哲学と倫理が欠落している。人は一人では生きて行けないが、同時に一人でないとして生きて行けないという根源の矛盾に生きるものである。このことを深く省察する視点が欠落しているわけである。その結果として、以下に述べる欠陥が、さらに二次的に派生している。先ず、自然は人間のために存在するという人間中心の根本的に誤った価値観が当然の前提となつて来る。次に、知能には社会資源としての重要な側面があるのに、その評価の側面が完全に欠落し、知能は個人の資質のみに属するもの速断されている。その結果、教育は、専ら個人的利益を追求する能力を獲得するための手段として位置付けられる。自己責任に基づいて人間を形成し、社会を構築するための基本的な社会活動であるとの視点が全く認識されていない。さらに、人間は社会においてのみ生きて行くことができる社会的存在として、本質的に社会性による制約を受けている存在であるから、人間の資質の一部であ

る知能にも、社会性による制約があることは自明の理であるのに、従前教育には知能の自己制約の必要とその社会的責任のあり方を教える部分が完全に欠落し、知能を恣意的な個人的行使に委ねたまま放置している。その結果、社会経済の外面において、いくらハード面の過度の競争を抑制する修正措置を講じてみても、殆ど効果がない。また、従前教育の内容は、安易に科学技術の学習に偏向し、人文の要素が極めて稀薄である。科学技術にかかる知識は、人間資質のほんの一部にすぎないから、その過大な局部的開発は、人間資質の自壊をもたらし、精神の病理を進行させるだけではない。人間の生活の根は、その生活社会の基盤に横たわる人文に存するものであるから、人文の裏付けなくしては、真の人の幸せも、心の通い合う人間関係の構築も、ひいては国際間の相互理解も、実現不可能である。

以上のような従前教育の欠陥を是正しようとする場合の方策の要点を具体的に摘記すれば、次の諸点となろう。先ず、人と社会のあり方の根本を問う哲学と倫理を中核的なテーマとする人間教育の概念を定立するとともに、人間教育には、従前教育が帶有する前述の派生的な欠陥の是正を含めることとする。次に、既存の管理教育の關係

者や機関とは別に、人間教育に必要な指導者を育成して、高い社会的評価と待遇を保証する。そのために、柔軟な思考に恵まれた適切な委員を社会の各層各面から選出して、新たな審議会と事務主担庁を設けるとともに、新たに国立の教育機関を設置して適切な教員を任命し、指導者育成のための教育の内容と課程を決定して実施する。教育の現場においては、現在の小学校、中学校、高等学校に学ぶ年齢層に大略匹敵する年齢の学童と生徒については、国立学校における一貫教育とし、右の指導者による人間教育を従前教員による基礎学力の養成教育と並行して実施する。この場合、人間教育については、学童や生徒自身の内面からの自主的努力を喚起することを基本とする。非管理的手法によって実施するものとする。また、基礎学力養成教育については、文部省等の既存機関の管轄のもとで、従前の管理的手法により、学童生徒の能力に応じた、適切な学力養成教育を強化して実施する。

なお、この一貫教育は、すべて国立学校において行い、公立及び私立の学校の参加は予定せず、いわゆる学力テスト、通信教育、塾教育の関与を一切禁止する。少年期における能力の不自然な開発は、人格の形成と資質の向上の両面から、極めて有害で

あるからである。さらに、現在の大学、大学院その他の研究施設に学ぶ年齢層に大略匹敵する年齢の学生及び研究者については、国公立及び私立の各種学校施設により、職能教育、技術教育、学術研究の各層各面において、従前教育に倍加する多様多彩で高度な教育研究活動を徹底して実施する。また、幼稚園その他の幼児教育、家庭教育や職場教育、地域教育、生涯学習その他の社会教育においても、前述の指導者の派遣や教育機関における希望者の受講等の機会を十分に確保することによって、学校教育における人間教育の補完に努める。

ここで見過ごすことができないのは、子供たちを取り巻く劣悪な社会の環境や現象が未熟な子供たちを直撃し、彼らが教育を受け入れる基盤を破壊しつつある現実である。特に近年、インターネット、Eメール、ポケベル、携帯電話などの情報機器が急激に開発され、無定見に発信された劣悪な一般の社会情報を子供たちにまき散らし、弊害を倍加させている。ゲーム機器への没入による子供たちの心意の非人間化も、これに輪をかけている。正しく、河上亮一氏がその著『学校崩壊』で指摘されているとおり、「学校が街中と同じになってしまっている。」のである。従って、このような劣

悪情報の氾濫を切断して、子供たちを守る有効な手段を講ずることは、私どもの教育努力を成功させるために絶対必要な前提条件となっている。この意味で、子供たちを自然の風物に日常親しませたり、高齢者や障害者などのあらゆる年代や境遇の人々と接触させたり、色々な職業生活や社会生活を観察させて体験させたり、素朴で良好な地域社会やできうれば外国人との接触の機会を多く持たせる努力は、単に彼らに豊富な教育資料を提供するだけでなく、子供たちに劣悪な情報から自らを守る力をつけさせる意味からも、大変に重要な作業といえよう。

縷々述べてきたように、わが国は、明治の初年以來、物質文明の充実を意図して、科学技術を中心とする知能教育を展開してきた。ところが、その結果わが国は、溢れるばかりの物の豊かさと、最高水準の科学技術知識の保有を達成し、従来教育は、その目的の大半を充足することとなった。しかしながら、同時に、その教育には、人が生きて行くうえで物と知識の豊かさを保有することが持つ意味の理解を深めるための分野を伴っていなかったので、私どもは、果てしない科学技術の開発と物の豊かさを追求する従来路線の上を、引き続きあてもなく走るのみとなってしまう。人間の精

精神的な存在価値、即ち人が自らをどのように認識し、社会においてどのように生きていくべきかを自覚することを欠いたまま、徒に時が経過している。そして、人々がこの精神的存在への自覚を放棄した瞬間から、人間社会は、内からの崩壊を始める。人々が人の精神的存在への自覚を深める教育、即ち「人間教育」を放棄した瞬間から、人間社会は、あてのない迷走を始め、ついには自壊にいたる道を進み始める。科学技術自身は、素材としての知識の一部として、本来的に盲目である。従って、科学技術自体に、人間社会において占める自らの位置とか、将来社会に向けての指向などの定立を求めることは無理であり、人間の精神的存在のみが、その定立を果たしうるものである。子供たちの数々の非行と教育秩序の崩壊や、その根本にわが国社会が現在抱える数々の問題点は、私どもの従前教育が人間の精神的存在への自覚を深める努力を怠ったことにより生じた病理現象の徴候といふべきものである。従って、科学技術を中心とする知能教育の限度内でどのような彌縫ひほう的な対策を講じてみても、表面上は一見解決したかに見えても所詮は一時的なものであり、抜本的解決は不可能であるといわねばならない。

以上述べたところによって明らかなどおり、わが国の子供たちや青少年層はいうに及ばず、政治、行政、企業、教育、医療、福祉、マスコミの関係者らその他社会一般の各層各方面における異常な目に余る非行その他の反社会的行為の続発などを目前にして、従前の管理教育の手法の安易な延長線上で、急遽「心の教育」を対症療法的に分別して取り上げてみても、殆ど無意味であるだけでなく、却って有害である。従前教育で専ら主たる対象とされた知識だけではなく、これを含む人間の資質全体の存在のあり方自体を、非管理的手法により根本的に問い直す「人間教育」によってのみ、充実した心の教育の成果を上げることができる。このことは、恐らくわが国だけではなく、欧米諸国や他の非欧米諸国においても、多少の異同はあっても事情は同様であるうと思われる。もちろん、教育の成果の受け入れ先である従前社会自体がその帶有する諸欠陥を是正しない限り、教育の従前体質を変えることは不可能であるとの論議もあろう。しかしながら、教育と社会とは、いわゆる鶏と卵の関係にある。私どもには、先ず社会を構築する人の形成に着手する以外に、与えられた方法はない。科学技術と経済成果の力によって完全に支配されている人間社会の現状の病理的体質を、非管理

的手法による人間教育の力によって徐々に變えて行くことだけが、着実に一步一步破滅に向かいつつある私どもの人間社会を救う唯一の方途であると考えられるからである。

ロータリーは、人間の個人としてのあり方と社会におけるあり方を根本的に省察し、その社会性を醇化して、成果を社会的な活動に反映することを社会に提言し、行動面において実現をはかつて行くこうとするものである。従つて、先述の人間教育の理念の確立、指導力の形成、あらゆる教育面におけるその実施に向けて、万全の支援と協力に努めなければならぬし、また、その要望と期待に応える実質を十分に具有しているということができると信じるものである。

(一九九九年四月)

科学技術の急激な変化が青少年に与える影響について

—京都におけるR I会長主催アジア会議のパネラーとして—

一口に科学技術といっても、自然科学とその成果である工業技術と、社会科学とその成果である社会管理技術とがあらう。この両者は、その対象の範囲や性格に相当の差異があるが、人の知能が機能する質からすれば、殆ど等質的な分野に属すると思われるので、青少年に与える影響を考える見地からも、ほぼ同様に取り上げる必要があるらうかと考える。

ところで、科学技術は、人間の素質の一部である知能の、そのまたごく一部分を極度に開発したものであり、その主たる目的と効用は、物の開発と生活の快適さの増進にある。現代の教育は、科学技術の修得を中核とする知能教育が主流であるから、子供たちは、ソフトの面から見れば、学校にあつては、そのような科学技術を中心とす

る知能教育の影響を受け、家庭と地域社会においては、そのような教育を受けた大人たちの言動や、そのような大人たちが作り上げた制度と物の影響を受けて成長する。また、子供たちは、環境というハードの面から見れば、学校教育では、学区制によって整然と組織化された学校組織の中を横並びに進級するように仕向けられ、そこで行われる知能教育の学習は管理教育の方法により遂行され、その成果の評価は量的格差を付して行われ、その格差は最終学歴である大学にまで持ち込まれる。子供たちを受け入れる実社会には、行政、企業、各種団体その他各層各方面にわたり格差があり、学校教育の格差は、そのまま社会における格差に持ち込まれる。学校と社会の両面にわたる科学技術知識と経済の支配への対応の良否が、人の生涯を決定する。そのため、教育は最も有力な投資と観念され、受験戦争が激化し、知能を病的に磨きあげる塾教育が世界に例をみない質と量で教育産業に成長し、その競争的展開により、教育の本来的作業は、完全に社会の片隅に押しやられている。

生命科学者中村桂子氏は、いみじくもその著『科学技術時代の子どもたち』の中で、科学技術を支える価値観として、効率を至上とすること、何事にも正解があると信仰

すること、すべてを量で測ることの三つを上げておられるが、この指摘は実に啓蒙的である。

現代教育が科学技術の修得を中核とする知能教育に偏していることは、先に述べたとおりである。そこで、生活の快適化をはかることを目的として果てしない物の開発が追求される結果、科学技術以外の知能や、感性、意思、その他の資質を対象とする教育、いわば人間全体を対象とする人間教育が無視され忘れ去られる。

科学技術が無差別に機能する社会では、地球の自然は人間のために存在すること、人は個人が絶対の価値であること、の二つが価値観の前提となっている。ところが、この二つはいずれも明白に誤りである。何故ならば、人間はたまたま地球上に生を享けた生物の一類型に過ぎず、他の生物と共生すべきものであることは疑いの余地がない。また、人は一人では生きて行けないが、同時に一人でないと生きて行けないという根源の矛盾に生きる存在であるから、個人は絶対の価値ではない。科学技術は、本来的に盲目的作業である。生活環境をよりよくより快適にするために物を開発する作業とでもいふべきであろう。ところが、人にとって、よりよい生活環境に生きること

は大切な価値の一つではあるが、人は、快適にのみ生きるものではない。人は、人間の全存在として生きるものであり、快適な生活は、人が生きるための価値の一部に過ぎない。人は、科学技術以外に、個人として生き、社会の中に生きることの価値への自覚と認識を内容とする自己の倫理を持たなければならぬ。科学技術は、人がその倫理の下にこれを利用することによって、初めてその内蔵する危険を封じ、人のため真の効用を発揮することができる。ここにおいて、科学技術を主体とする知能教育がより高度な水準を求めて専門化すればする程、人の生存の基本の自覚を求める倫理を内容とする人間教育の充実と強化がはからねばならない所以が明らかとなる。

自然科学と工業技術は、果てしない物の開発を通じ、人間の生体とこれを取り巻く自然の環境に限りない損傷や破壊などの危険をもたらす。社会科学と社会管理技術は、社会の表面的整備と画一化を通じ、人の心にとめない消退と破壊の危険をもたらす。例えば、先ずエネルギーの過剰使用が、気象条件と生態系に決定的な変動を引き起こしている。化学物質とバイオテクノロジーの多用は、遺伝子その他生物存在の基本自体の破壊を進行させている。果てしない物の開発は、人々の物に対する関心を激化さ

せることにより、社会の物的傾斜と各種社会管理領域の腐蝕の病理を進行させている。すべての価値基準を個人に置く考え方は、社会管理の高度化に伴い、社会の個人分化と個人の意識分裂の病理を進行させている。科学的知能の恣意的な利用の放置は、経済社会の圧倒的優位の形成と過度の競争心理の増幅を促進させ、人の心の体質疲労の蓄積と空洞化を着実に進行させている。科学知識の偏重は、民族個有の人文の消退を招くことにより、人間関係と国際理解の質の低下を進行させている。子供たちは、人間社会の構成員として、科学技術の開発に伴うこれらの一般的な影響を受けているが、これらの中で特に次のような影響を受けていることを特記すべきであろう。新しく開発された食料品、医薬品、化学物質などの成長期における多用の蓄積によって、その肉体に将来予想のできない重大な生理的な影響を受ける可能性がある。また、彼らが受ける教育の欠陥によって、科学技術が带有する欠点だけが心理的に強調され、精神的に生きることの基本を見つめる倫理が育たないし、生活意識と価値観がとめどもなく混乱する。その結果、好むと好まざるとを問わず、人にはしななければならないこととしてはならないことが存在することの自覚が確立できない。しかも、このような現

象は、学校教育の環境と秩序の崩壊、父親、母親を中心とする家庭の教育能力の喪失、教育環境の格差の定型化、社会環境の物的傾斜と社会意識や価値の混迷、インターネットや、Eメール、携帯電話など情報伝達手段の急速な開発と充実によるいわゆるエロ、グロ、暴力賛美を含む一般の低劣な社会情報の子供たちへの急激な流入と浸透や、情報機器に対する子供たちの異常な執着による人間関係の稀薄化などによつて、さらに悪化の一途を辿っている。その結果、小学生や中学生から高校生に及ぶわが国の子供たちに、陰湿ないじめ、学校や家庭内の暴力、登校拒否ないしは不登校、中途退学、暴走族や暴力団への加入、薬物の濫用、不純な性行動、援助交際などの非行や、学級から学校に及ぶ教育の崩壊など、ありとあらゆる既存の教育価値の否定や教育秩序の混乱が続発している。

このような事態を迎え、中央教育審議会や文部省を中心に、主として学校教育の場における「心の教育」なるものの必要がにわかに声高く論ぜられ、マスコミやPTAその他の周辺関係者を加え、いわゆる学校叩きという社会現象の狂熱的横行を通じ、体罰の禁止とか校則その他諸規則の緩和や撤廃などを中心とする教育方法の対症的見

直し、自由で自主的とする教育への志向、個性を重視するとする教育への移行、ゆとりのある教育を目指すとする教育課程の軽減など、多種多様な具体的方策が提唱され、実施されようとしている。

しかしながら、このような学校教育の場における子供たちの病理現象の真因は、学校にあるというよりは、もつと広域的にわが国の社会自体にあると思われる。さらに、病理現象を呈しているのは子供たちだけでなく、大人たちわが国民の全体であろう。わが国の社会は、金銭感覚の鈍麻、勤労意欲の低下、利己的言動の跋扈^{ばたご}、無定見な情報^{ほうほう}の氾濫、信念その他の精神的志向の消退、公共的な関心や国家意識の稀薄化、人命の軽視などをはじめとして、社会意識や価値観の一般的な混乱と人間関係の不整^{ふせい}が限りなく進行しつつある現状にあるからである。科学技術をコントロールすべき人の完成を目的とする人間教育を、コントロールの対象たる社会管理技術の枠内の管理教育の手法で実施しようとすることは、そのこと自体が根本的な自己矛盾である所以も明らかとなる。このような性格と価値観を伴った科学技術が支配的な教育環境のもとで、個性を尊重する教育や、ゆとりある教育の実現を論じてみても、果たしてどれだけの

意味があるであろうか。

わが国は、明治の初年以來、物質文明の充實を意図して、科学技術を中心とする知識教育を展開してきた。

ところが、その結果わが国は、溢れるばかりの物の豊かさ、最高水準の科学技術知識の保有を達成し、従来教育は、その目的の大半を充足することとなった。しかしながら、同時に、その教育には、人が生きて行くうえで物と知識の豊かさを保有することが持つ意味とその限界の理解を深めるための分野を伴っていなかった。私どもは、果てしない科学技術の開発と物の豊かさを追求する従来路線の上を、引き続きあてもなく走るのみとなつてしまった。人間の精神的な存在価値、即ち人が自らをどのように認識し、社会においてどのように生きていくべきかを自覚することを欠いたまま、徒に時が経過している。そして、人々がこの精神的存在への自覚を放棄した瞬間から、人間社会は、内からの崩壊を始める。人々が人の精神的存在への自覚を深める教育、即ち「人間教育」を放棄した瞬間から、人間社会は、あてのない迷走を始め、ついに自壊にいたる道を進み始めよう。科学技術自身は、素材としての知識の成果

の一部として、本来的に盲目である。従って、科学技術自体に、人間社会において占める自らの位置とか、将来社会に向けての指向などの定立を求めることは無理であり、人間の精神的存在のみが、その定立を果たしうるものである。子供たちの数々の非行と教育秩序の崩壊や、その根本にわが国社会が現在抱える数々の問題点は、私どもの従前教育が人間の精神的存在への自覚を深める努力を怠ったことにより生じた病理現象の徴候といふべきものである。従って、科学技術を中心とする知能教育の限度内でのような彌縫^{ひほう}的な対策を講じてみても、表面上は一見解決したかに見えても所詮は一時的なものであり、抜本的解決は不可能であるといわねばならない。従前教育で専ら主たる対象とされた知識だけではなく、これを含む人間の資質全体の存在のあり方自体を、非管理的手法により根本的に問い直す「人間教育」によつてのみ、充実した心の教育の成果を上げることができる。

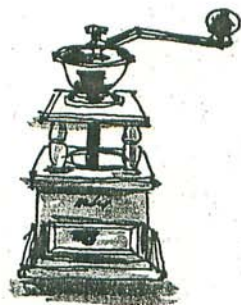
そして、そのような人間教育をさらに実効あるものとするためには、劣悪な情報の子供たちへの直撃による教育基盤の破壊を、そのような情報を子供たちから切断することや子供たちに自衛力を賦与することによつて防止することが、喫緊の要であろう。

その意味で、子供たちを自然の風物に親しませたり、あらゆる年代や境遇の人たちと接触させたり、色々な職業生活や素朴な地域社会の生活を体験させたりして、自然や人間社会の多様さと深さを認識させ理解させる努力は、非常に重要であろう。そしてこのことは、恐らくわが国だけではなく、欧米諸国や他の非欧米諸国においても、多少の異同はあつても事情は同様であろうと思われる。もちろん、教育の成果の受け入れ先である従前社会自体がその帶有する諸欠陥を是正しない限り、教育の従前体質を変へることは不可能であるとの論議もあろう。

しかしながら、教育と社会とは、いわゆる鶏と卵の関係にある。私どもには、先ず社会を構築する人の形成に着手する以外に、与えられた方法はない。科学技術と経済成果の力によって完全に支配されている人間社会の現状の病理的体質を、非管理的手法による人間教育の力によって徐々に変へて行くことだけが、着実に一步一步破滅に向かいつつある私どもの人間社会を救う唯一の方途であると考えられるからである。ロータリーは、人間の個人としてのあり方と社会におけるあり方を根本的に省察し、その社会性を醇化して、成果を社会的な活動に反映することを社会に提言し、行動面

において実現をはかつて行こうとするものである。従って、先述の人間教育の理念の確立、指導力の形成、あらゆる教育面におけるその実施に向けて、万全の支援と協力に努めなければならぬし、また、その要望と期待に応える実質を十分に具有しているということができると信じるものである。

(一九九九年四月)



科学技術の急激な変化と子供たち

私どもは、ジェームス・レイシー国際ロータリー会長が指摘されるとおり、ロータリーの夢を語り、そして実現するために、現代の子供たちを取り巻く様々な問題をあらゆる角度から検討し、子供たちの幸福への道を確認する方策を見出さねばならない。そして、子供たちの幸福への道を見出すためには、単に飢餓や貧困の問題を解決するだけでなく、識字率、計算能力の向上の問題を始めとして、子供の置かれている教育など社会環境の改善、その他あらゆる問題の検討が必要である。特にわが国の子供たちは、高度な科学技術の急激な変化の影響を受けた教育環境に取り巻かれており、数々の特異な憂慮すべき問題を私どもに提供していることは、周知のとおりである。

第二六六〇地区においては、先年教育問題特別委員会が設置され、二年有余にわたり、わが国社会における教育のあり方の問題を取り上げて検討を加えて来た。委員会

においては、あらゆる角度から真剣な検討が加えられて来ているが、例えば、清風学園で中学、高校教育の私学運営を担当される平岡龍人委員からは、わが国の教育には、責任と義務を教えるリーダーの教育、強者の教育がないこと、戦後教育の特色は横並び一線の教育にあったが、その一線がリードする側でなく、リードされる側にあったので、不満や要求には適していたが、責任をとるには適当でなかったこと、日本人は折角本来利他的であるのに、戦後教育のせいで専ら自利的となったことや、社会への奉仕、隣人への愛、高齢者への尊敬その他の利他を取り戻すべきであること、優れた人間には、集中力、持続力、判断力が求められ、この中で正しい判断力が決定的であること、判断力は、しっかりした価値観から生まれるが、この価値観の基本は宗教、各自の信仰、信念、断固たる正義の原則から生まれ、これらが現代の教育に欠けていること、などの指摘がされている。

また、大阪市立大学で医学教育を担当される前学長山本研二郎委員からは、科学技術には自律的に進歩する悪魔的な要素があること、科学技術によって傷害された環境は科学技術によって修復可能であること、医学の分野では、病気を数量化し画像化する

ると結果が一人歩きし、学習量が膨大化して知識教育化が進み、医師や診断の非人間化が進行し、人の心への悪影響が多大となること、技術の変化は人間として本来順応可能だが、速度が速すぎるために弊害が出ること、子供たちには、もつと自然に親しませて野性の感覚を取り戻させ、古典文化との接触を深めて、言語や躰の乱れを正させるべきであること、などの指摘がされている。

委員の一人である私は、科学技術には社会科学と社会管理技術を含めて考えるべきであること、科学技術は人間の一部である知能の、そのごく一部を開発したにすぎないものであること、子供たちは、科学技術中心の知能教育や格差で整然と区分された学校組織といわゆる教育産業の中で窒息しようとしていること、科学技術は物の開発と生活の快適化を増進するだけのことで、人の生の一部にすぎないこと、科学技術への執着は、人の生を全体として捉える人間教育を阻害すること、科学技術は盲目であるから、人間自身が嚴重なコントロールをしない限り暴走し、子供たち始め人間と自然に数々の被害を発生させること、このような被害は、求心力を失った家庭と社会の中で、無定見な情報機器の開発と低劣な情報の氾濫を放置して教育の基盤を破壊する

ことにより、益々深刻化していること、病理現象を呈しているのは、学校や子供たちだけでなく、大人たちと社会全体であること、このような被害を解決し、科学技術と経済によって占められた人間社会を本来の姿に戻し、その破滅を回避するためには、人間教育を創設し、強力な推進をはかる以外に方法はないこと、などの指摘をしている。

孔子は、「衣食足りて礼節を知る。」と教えられたが、今日のわが国は、衣食足つて社会がとめどもなく乱れているようで、どうも孔子の言葉と反対のようである。先般あるロータリー・クラブの創立周年記念式典に出席した砌かきに、バイマーヤンジンという来日五年目のチベットの女性音楽家の在日感想を中心とする素晴らしい話を伺ったが、「貧しいチベットの子供の目は生き生きと輝いているのに、豊かな日本の子供の目は生気がなく虚ろで死んでいる。日本の子供たちは、どうしたのだろうか。」と問いかけられ、出席者一同肅然と襟を正した。レイシー会長は、「子供たちを救う一〇〇の方法」を私どもに提示しておられるが、どの一つをとってみても、子供たちに対する溢れるばかりの愛情に満ち満ちている。私どもは、この会長のご提案を拝見して、

貧しい国であれ、豊かな国であれ、子供たちを救おうとするロータリーの夢が一つであることがよく理解されると思う。

ロータリーは、人間の個人としてのあり方と社会におけるあり方を根本的に省察し、その社会性を醇化して、成果を社会的な活動に反映することを社会に提言し、行動面において実現をはかって行こうとするものである。従って、先述の人間教育の理念の確立、指導力の形成、あらゆる教育面におけるその実施に向けて、万全の支援と協力を努めなければならないし、また、その要望と期待に応える実質を十分に具有しているということができると信じるものである。そこで、その第一歩として、私どもが次の世代を担う子供たちを救う方策を検討することにより、わが国、アジア、そして世界の将来に関するロータリーの夢を見出し、その実現のための方策を見出すように努めたいと思う。

(一九九九年五月)

人の幸せとは

人は、その持てる知能の働きで、一人でない生きて行けないが、同時に一人では生きて行けないという矛盾に生きることを余儀なくされている。従って、人は、自分のことのみを求めているだけでは決して幸せにはなれず、却って、他人のために盡くすことによつて、初めて自分の幸せを手に入れることができることとなるのであろう。

ところで、科学技術を支える知能、いわゆる左脳の一部は、これを磨けば磨くほど、人の違いが意識され、他人の欠点が目につくようになる。そのようなことでは、他人と共に働くことはできず、集団は個人に分解し、個人も自分の中で自己分裂する。これではもはや病理状態で、とても他人のために盡くすような気持にはなれない。幸せはますます遠くなる。自他の違いよりは、ごく自然に自他の共通点を意識するようになれば、他人の長所が自然に目につくようになり、ひいては他人のために盡くすよう

になる。幸せが近づいてくる。そのためには、科学技術の知能だけに執着してはいけない。それ以外のいわゆる右脳その他の部分の働きである知能や感性とか意志などもっと人間の資質の全体を大切に開発して行かなければならない。

ポール・ハリスは、逝去を目前に脱稿した自伝『ロータリーへの私の道』の巻末に、「神よ、人々や国々の欠点が目に入らなくなりますように、長所だけが目につくようになりますように。——地上に平和がありますように。」という言葉を書き残しておられるが、これこそは、ポール・ハリスが、人間としての最後の困難な作業を、祈りの形でロータリーに託されたものといふべきであろう。

(一九九九年五月)

企業その他の団体の倫理とサービスの理念

ロータリアンたる私ども個人が、ロータリーの基本理念である「サービスの理念」
The Ideal of Service を倫理として生きていることは、論を俟たない。

ところで、企業その他の団体は、個人と同等の活動をし、或いは個人を遙かに超える規模で社会的活動をしている者も多いので、その実態を社会に反映させるため、近代の法的社会にあつては、法人格を与えると否とを問わず、実質上法律上の主体たる人としての権利と義務を賦与することにより、個人と同様に、社会における人としての存在を明確にしている。

近年、企業などの社会的貢献や社会的責任のあり方について、色々な見地から数多くの論議がされているが、ロータリーの立場からすれば、企業その他の団体も、個人と等しく社会における人の一員として、職業の見地からも、地域社会においても、ま

た国際社会においても、個人と同様にサービスの理念をその倫理として行動すべきも
のであり、かつ、それを以て足りると考えるべきであろう。

右のような立場において、企業その他の団体も、法人会員としてロータリアンの資
格を取得することができるとし、また、このような法人会員を以て構成されるロータ
リー・クラブが存在してもよいとする考え方は、ロータリーの道を大きく外れるもの
であろうか。もはや時代は、企業その他の団体の役員がロータリアン個人として活動
するだけでは、企業その他の団体自体に醇良な社会的活動を期待することができない
事態となつてしまつている。換言すれば、現代の社会にあつては、個人の存在はとも
かくとして、企業その他の団体の存在が、社会の質を殆ど決定的に左右しているとい
う現実を直視するとき、ますますその感を深くするのである。

(一九九九年五月)

新しい原始生産への回帰を夢みる

当節の長びく不況や雇用の悪化を観察していると、わが国経済のあり方の規模と限界からして、現状が本来あるべき景況ではないかとの疑問が根強く湧いて来ると指摘する人がいる。そのような論者は、資源やエネルギーに乏しいわが国の狭溢な国土に一億二千万人を超える国民が密集しているのであるから、極論すれば、江戸時代か明治期の景況が本来のわが国経済の姿であり、余程異常な努力と工夫をしない限り今日のような生活の豊かさは生み出されないうし、また維持できない筈であるという。私どもは、今日にいたるまで、営々と磨き上げた科学技術と独自の組織的な勤勉さを武器として、官僚たちの机上で限りなく先行して創出できる公共工事を先取りしたり、とめどもない輸出が可能であることを前提に世界の工場を自任する工業生産その他の二次産業活動に没頭するなどして、異常に嵩上げされた経済活動に注力し、併せて情報、

サービス等の三次産業への追隨に努めることによつて、この課題に一定の解決をえたと考へて来たが、このような条件のすべてが崩壊しつつある現在、事態は、私どもが考へてゐるような安易な手法で解決できるであらうかという。確かに、科学技術知識の高度化は、かけがえのない心の喪失という致命的で高価な犠牲を私どもにもたらしているし、組織的な勤勉さと世界へ向けてのとめどもない生産活動などは、人間社会のグローバル化に伴い、従前のままのあり方では構造的に継続困難となつてゐることは事実であるし、公共工事の先行創出などは一種の欺瞞的手法であり、本来手を着けるべきでないことは、論を俟たない。さすれば、今日の不況や悪化した雇用が、わが国が帯有する本来的景況であるとする見方は、相当に肯綮こゝげに当たつてゐるとも考へられる。

このような視点から、わが国經濟の将来にわたる安定と充實のためには、農、漁、林のいわゆる原始産業の現代的な再構築のために、抜本的な見直しを加えられるべきではないかと思われる。何故ならば、農漁林の三業こそは、資源に乏しいわが国に与えられた豊かな基本的資源であり、その新たな育成と活用こそは、わが国經濟の再生

と充実の基盤を構築するために不可避の課題であるからである。

先ず、農業生産は、一国存立の基礎である。わが国の農業は、永年にわたり開発され維持されて来た優良な農地と、成熟した農耕手法により、極めて高度な生産体質を保有しているにも拘わらず、その合理化に手が付けられないことによる高コスト体質のため、休耕の強制その他の生産の抑制が慣行化し、折角の農地が荒廃し、農耕技術が低下しているだけでなく、主食その他農業生産物の自給率が他の先進国の平均値を大幅に下回り、輸入依存度の極端な上昇が進行している。

このような事態は、わが国農業の実態から大きく乖離し、これに背馳するものであるだけでなく、今後世界的規模で食糧の大幅な供給不足が確実に予想される現在、事に逆行するまことに遺憾な事態といわなければならない。その抜本的な解決のためには、生産体制の根本的な改革を早急に企画して実施することが不可欠である。

具体的手法としては、経営主体を都道府県ごとに一ないし二の公益に準ずる事業遂行の純然たる株式会社として、思い切って市場原理の経営方式を導入する一方、農地法その他の関係法令及び農業協同組合その他の関係団体を廃止し、農民は農地を会社

に売却するかまたは賃貸するとともに、農作業の継続を希望する場合は会社との雇用制度によるものとするほか、周辺に農生産物の加工事業所を多様かつ豊富に設置して、その活動を振興する。これらの施策により、生産コストの削減と国際競争力の育成、食糧の確保、農生産活動の充実と輸出実績の向上、農民の生活の合理化と向上、失業者の大幅な吸収その他の関連課題の総合的解決をはかる。このような改革は、選挙制度における集票の実態が現実の障害となろうが、達成後は却ってその合理化に資するものであると考えられる。

次に、漁業についていえば、わが国は世界有数の海岸線を有するだけでなく、海流等の関係で豊富な魚種、魚量その他資源が極めて充実した漁業水域に恵まれているにも拘わらず、高コスト体質のために、魚類その他の水産物を必要以上に大きく輸入に依存しており、この現状は、わが国漁業の基本的與件（よびごと）の実態に大きく背馳（へんし）するものである。その抜本的解決のためには、漁業法その他の関係法令の見直しと、水産業協同組合による漁業管理体制の廃止を前提として、前項に述べた農業改革と類似の手法の導入が必要であり、これによってえられる公私の利益も同様である。

さらに、林業についても同様である。世界有数の林地と豊富な樹種、樹量を保有しながら、高コスト体質のために殆ど活用されず、輸入材に実需の充足を委ねている。その解決のためには、大胆な林道の開発と低コストによる計画的な伐採、植林を実施して、その生産活動を振興しなければならぬ。そのためには、関係法令の抜本改正や管理団体の廃止と、前項に述べた農業改革と類似の手法の導入が必要であり、よつてえられる公私の利益も同様であろうと考える。

来るべき二一世紀には社会基盤の激甚な変動が予定されるが、これに備えて、私どももの生存を支える原始産業の基盤を近代的に再構築することが必要であり、そのことは同時に、自然環境への副次的効果を視野に入れつつ、わが国経済の従来のみずみを生正して、その安定した成長を確保する手段となるであろう。ロータリーも、これからは、来るべき社会基盤の構築にかけて、積極的に提言して行くことが求められると思われるので、このような見地に立って、見識の不足を顧みず、あえて発言する次第である。

原田、鴻池両先輩会員の思い出

昭和四四年二月に、四〇代半ばの若僧弁護士として大阪北ロータリー・クラブに入会を許された私は、初めて出席した例会で、かねてご高名を拝していた同クラブの原田秀雄、鴻池藤一両先輩にご挨拶をする機会を与えられた。原田先生は、大阪大学名誉教授としてすでに六十代半ばを過ぎられた造船工学界の泰斗で、地区ガバナーと国際ロータリー理事を務めていられた。物静かな物腰と慈父の眼差しで手を差し延べられながら、「あなたが昔生さんの弟さん？」と、柔らかく声をかけていただいた。ポール・ハリスもかくありなん、といったご風情であった。鴻池先輩は、未だ五十代後半のご活躍盛りで、建設業界名門鴻池組の現役社長であられたが、すでにパスト・クラブ会長としてクラブの指導的な会員であられた。同じテーブルの隣に座った私に、端然とした古武士のご風貌で会社関係の法律問題を質問されたところ、私が緊張の余

り支離滅裂な受け答えをしたために、何と頼りない弁護士が入会したものと苦笑されたに相違ない。思えば、この日を契機として、実に四半世紀の長きにわたるクラブライフを通じて、お二人の卓越した先輩から、父のような、年の離れた兄のような、ご指導とご厚誼を拝受することとなったことは、私にとって得難い幸せであった。

原田先生は、愛と友情を持って生きて行くことが人の幸せの基本であるとされていた。そしてそのためには、正しい人間の関係を築き、真の知り合いを広め深めて行くことに努めることが大切で、ロータリーの親睦は、会員の一人ひとりが、心の中でのように心掛け、人と接するときはその心掛けを実行して行くことであるとされた。その一方で、ロータリーの精神と存在意義を堅持され、ロータリー・クラブを所謂仲良しクラブの飯喰い会に墮とす心ない言動には、よき時代に国際ロータリー理事を務められたご見識から、仮惜のない鋭い批判を加える峻厳さを持ち合わせておられた。

鴻池さんは、ロータリーの定款、細則から貴重なロータリー情報にいたるまで、人知れずよく勉強されて周囲に提供され、物事の筋道を厳守して、自他の言動の責任を洒脱な表現に包みながら明確にする風格ある態度に終始された。その反面、歌沢、常

磐津、長唄、各派の小唄から当節のカラオケにいたるまで、まことに屈託のない多彩で豊かで格調の高い人情と趣味の世界を持ち合わせておられた。

この偉大な両先輩は、平成五年から同六年にかけて踵かかとを接するように相次いで他界されるまで、最後の在籍創立会員として、クラブが真のロータリー・クラブとしての骨格と肉付けを保持できるよう、四〇年の長きにわたって陰に陽にクラブを懇切にご指導いただいた。お二人に共通するところは、ともに寡黙であり、素朴であり、素直なお人柄であったことである。そして、ともに、真のロータリーの精神と親睦の心を、深く豊かに持ち合わせておられた。しかも、ロータリーの厳しさと楽しさの二つは、別々にあるものではなく、表裏渾然一体として人の心の中に育つべきものであるとのご自覚のもとに、自らの心の中にその二つをしつかりと蔵されていただけでなく、ご自分の責任で誠実かつ克明に周囲に働きかけておられたことである。

クラブのホストとして、私がガバナーを務めさせていただいた年度の地区大会が、当時RI会長代理として出席され、現在RI会長をつとめられているジム・レイシーさんから、東西を問わず過去経験したことがない空前の素晴らしい地区大会であった

と評される大成功を収めた原因は、古市先輩会員はじめクラブ会員の皆様の絶大なご盡力の集約にあったことはいうまでもないが、この両先輩の日常からの長い充実したご指導とご支援の成果の賜物であったことは、衆目の一致するところである。

思えば私は、この卓越した両先輩の背中を見つめながら今日までロータリーの道を歩んで来た。生者必滅もやむなしとはいいいながら、この偉大な両先輩を失った痛みと損失は、永久にはかり知れない。ただ、在りし日のお二人のお姿は、様々な形で今なお私の脳裏から消えることなく、日々温かくかつ厳しく、不断に不肖の後輩を励ましていただいていることが、私にとってせめてもの救いである。あらためて、お二人のご冥福を心からお祈りする次第である。

(一九九八年一月)

一九九三～九四年度R I 第二七〇地区大会 におけるR I 会長代理の挨拶

当地区は、前年と本年の両年度のR I 理事及び本年度の財務長をお務めいただき
おります松本卓臣パスト・ガバナーのお膝元でございます。また、先年アナハイムの
国際協議会に勉強に参りました際に、私どもの先生として懇切なご指導をいただきま
した松尾パスト・ガバナーのお膝元でもございます。当地区大会に会長代理として参
上させていただきましたことを大変光榮に存じますとともに、ご派遣いただきました
ロバートR・バース Robert R. Barth R I 会長に心から感謝申し上げます。
ます。

さて、当地区のロータリアンの皆様におかれましては、大変に古くかつ豊かな歴史
に彩られた海峡の街この下関市において、深まり行く晩秋のたたずまいのなかで、盛

大な地区大会をお迎えになりました。まことにご同慶の至りでございます。村岡山口
県副知事、亀田下関市長、関係ライオンズ・クラブ、国際ソロプチミスト、青年会議
所の会長はじめ役員の皆様、松本卓臣R I理事財務長ご夫妻、ガバナーとご同期のガ
バナ―夫人の皆様、地区内外のパスト・ガバナー、ガバナー・ノミニ―、分区代理及
びご夫人の皆様、特別参加のローターアクト、インターアクト、ロータリー財団国際
親善奨学生、米山記念奨学生、国際青少年交換学生、GSEチームの方々など、各界
各方面からのご来賓及び内外多数のご招待者とロータリアンのご参加をえて、林ガバ
ナーのご主催のもと、永富大会委員長はじめホストクラブ、コ・ホストクラブの皆様
のご運営により、参加者合計二千人になんなんとするご盛況で本地区大会がこのよう
に盛大に開催されましたことに、心から祝意と敬意を表する次第でございます。なか
んづく、韓国からは、姉妹地区である第二二六九〇地区の金ガバナーご夫妻、ガバナ
ー・ノミニ―はじめ、多数の会員ご家族の皆様、また関係姉妹クラブである中釜山及
び釜山港都両ロータリー・クラブからも多数の会員ご家族のご出席をいただき、錦上
花を添えていただきましたことに、感銘を深くしている次第でございます。当地区に

おけるロータリー活動の一層の活性化のため、本大会が輝かしい成果を収められますことを、心からご期待申し上げるものでございます。

「私は、一九九三～九四年度の貴地区大会に出席しておられるロータリアンとご来賓の皆様方にご挨拶を差し上げることができませんことを、心から喜びといたします。私は、皆様が、多くのロータリアンの皆様とともに、この大会を通じて、ロータリーの信念と、ロータリーが八八年間にわたって果たして来た役割を分け合って下さることを期待いたします。どうかこの大会の数日間に、ロータリー活動の最前線を探求し、ロータリアンとの心温まる親交を深め、ロータリーという世界的な組織が果たしている素晴らしい業績に感激と献身を新たにして下さい。大会のご成功を心から祈念いたします。」ロバート R・バース R I 会長は、当地区大会の開催にあたり、このようなメッセージを会長代理の私に託されました。ここに、謹んで皆様にご披露させていただきます。

バース氏は、一九二二年スイスのチューリッヒで生まれました。チューリッヒ大学で法学を修めて法学博士号を受けられたのち、二三歳でボランティアとして国際

赤十字で働くことを希望し、第二次大戦中はトラック輸送隊の指揮者として活躍されました。一九四九年にはガーティ夫人と結婚され、三人の子供をもうけられました。一九五二年からは乳漿を原料とする清涼飲料水リベラの製造をチューリッヒ湖畔で始められ、同グループは現在では国際的な企業グループに成長しています。一九五六年にはスイス北部で最も古いアラウRC（一九二七年創立）に入会、一九六〇〜六一年度会長、一九七〇〜七一年度RI第一九八〇地区ガバナー、一九八三〜八五年度RI理事、一九八四〜八五年度財務長、一九八五〜八八年度ロータリー財団管理委員を歴任されたのち、本年度のRI会長に就任されたのであります。

チューリッヒRCの会員で、スイスのロータリーの公式地域雑誌『Der Schweizer Rotarier』の編集長ゲーアト・ヘーデル氏の言によりますと、バース氏は、率直かつ説得力がありながら謙虚なお人柄で、自らを批判的に見ることでできる度量があり、ユーモアのセンスを持ち合わせ、上質の広報活動をこなせる才能と合理的なバランス感覚の持ち主であるとされております。バース氏は、一見哲学者のような静かな考えの人といった風貌の持ち主であります。法律家であり銀行家であるとともに、重要な

スイスの電力持株会社の最高経営責任者で、チューリッヒ RC の会員であった父親エドモンド・バース氏を、自分の個性の中で知性と感性とを結び付けた見事な実例として尊敬し、深い影響を受けられました。バース会長は、ビジネスや人間関係の処理だけでなく、奉仕活動に成功するためにも、単なる専門的知識やその理解だけでなく、愛情や献身が必要で、これらを一体とした「知性ある心」が必要であると説かれているのも、このような影響の結果でありましょう。また、バース氏は、父親から経験に基づく助言と実例に基づく実際的な教育を受けるとともに、自ら希望した赤十字の仕事では、大戦中の混乱と破壊と人間の苦悩を直接体験されました。これらのすべては、本年度の R I のテーマとして結実したものと思われまます。

申すまでもなく、バース会長が提唱されました本年度の R I のテーマは「行動に信念を——、信念は行動に——」Believe In What You Do And Do What You Believe In. であります。松本 R I 理事がご指摘になっておりますように、信念とはロータリーに対する信念であり、わが国浄土真宗の教義「信・行・証」に相通するものでございましょう。またこの信念とは、「奉仕の理想」と邦訳されている綱領の The Ideal of

Serviceであり、或いはこれを中核として、四つのテスト、超我の奉仕、綱領、職業宣言、決議二二—三四などによって培われて来たロータリアンとしての信念であるとも説かれております。いずれにせよ、信念と行動とは一体であってこそ価値があるものであつて、信念のない行動は無意味であり、行動を伴わない信念は空虚であるといふことでありましょう。

バース会長は、「ポール・ハリスの理想の上に、四世代の男女が築き上げたほほ一世紀に及ぶ奉仕が、私どもの進むべき道を示している。奉仕の希望と世界に広がる人道的プログラムに対する献身によって、一八八の国及び地域の二六、〇〇〇を超えるクラブと一〇〇万を超えるロータリアンが一つに結ばれている。私どもは、ロータリーの徽章かしらに導かれ、信念を持つて行動するボランティア・サービスという伝統の力に励まされ、いま新しい世紀の明日に向かつて前進する。」とされたのち、「私どもの歯車は、何よりもまず優れた品性の象徴であり、私どものトレード・マークの信用は、一にかかつてロータリーに捧げる私どもの努力と献身にある。」とされたうえ、「私どもの奉仕の基礎は私どもの夢からでき上がるが、私どもが心から信ずるところに従つ

て行動を起こせば、夢見た目的は現実のものとなり、困難を極めた障害も乗り越えることができる。人類の最も驚嘆すべき業績は、夢を実行に移した人々によって実現された。私どもが自分の行動に信念を持てば、私どもは自分の個人的限界を超えて前進し、本当に他人の求めに応じて奉仕できる活力を見いだすであろう。理想と行動、信念とその具体的実現、この二つの連結が大切である。ここで私どもは、行動に信念を持ち、信念は行動に移す、という私どものテーマに到達する。」と述べておられます。そして、具体的な実行目標として、青少年、教育、国際理解と平和の増進の三点をあげられました。青少年問題につきましては、健康管理と衛生的生活、実際の職業技能の修得、指導力の育成を、教育問題につきましては、学力の向上、識字率の向上、すべての年齢層に対する職業技能の再訓練を、国際理解と平和の増進につきましては、自分以外の地域の文化への理解、各種交換プログラムや合同プロジェクトの提唱、人道的補助金プログラムへの参加を、それぞれあげておられます。

以上のほか、バース会長は、一九九三年三月三十一日から四月八日までの間アメリカのカリフォルニア州アナハイムで開催されました本年度のための国際協議会や、一九

九三年七月一五日エバンストン・ロータリー・クラブの例会で行われた講演などの中で、ご自分のお考えを色々な角度から述べておられます。ロータリアンには、例会に出席するだけの単なる「会員」と、常に他人のことを考える態度を持ち続ける真の「ロータリアン」の二種類がある。真のロータリアンは、自分の手を使って奉仕する人である。その満足感は、人間の願望である社会のために役立ち、必要な人間となることから生まれる。同郷フランス・アルザス出身の名誉ロータリアンであった偉大なアルバート・シュヴァイツァーは、「生きていくだけでは十分でない。もつと何かしなければならぬ。何処かで何かよいことをしようと常に求めなければならない。」と述べている。ロータリアンとしての行動の成功は、個人としてのロータリーに対する強い信念から生まれ、ボランティアズムの実質的な強みは、行動に対する信念である。ロータリアンであることは、質がよいことを意味するが、質がよいとは、他人が期待する質の水準に敏感なことである。真の質とは、知性と感覚の双方の質が共によいことであり、真の奉仕には、その連結すなわち「知性の心」ないしは「知性の真心」が必要である。ロータリーの齒車の徽章は、ロータリーの質とサービスの象徴であり、

これを着用することは、「あなたは私を信用できる。私は信頼に値する。私の用意はできている。私は受ける以上のものを与える。私は人のために奉仕している。」ことを表明していることを意味する。

ロータリーの思想は一つの人間世界のアイディアであるから、一旦消滅すると再生は難しいので、世代間で確実に継続して行かねばならない。ロータリーは、善意に満ち平穩でユーモアのある雰囲気ではなくてはいけない。クラブには、居心地がよく、温かく、互いに受け入れ合った心温まる雰囲気が必要であり、クラブ文化の培養が大切である。ロータリーは、沢山の部品からでき上がっている巨大な機械であるから、ユーモアという油が必要である。ユーモアは、心の重荷を軽くし、でこぼこ道を平坦にし、曖昧を明確にし、複雑を簡単にし、思い上がりをへこませ、人々に包容力を持たせる。ロータリーの仕事は簡潔でなければならぬ。新年度としては新しいプログラムを追加せず、すでに行われている立派なプログラムを継続する。世界各地の模範的な奉仕活動に対する表敬行事、バランスのとれたクラブ業績の表彰、特別任務担当の実行グループなどは、前年度のグクターマン会長から引き継いで継続する。ロータリ

「財団には、人道的な奉仕の機会の貯蔵庫として、一層のご支援を期待したい、といったご発言でございます。

林ガバナーからは、去る五月九日に行われました地区協議会関係の資料、地区大会の大綱なる仕様書、ガバナー月信などをご送付いただき、あらかじめ拝見させていただきました。ガバナーは、バース R I 会長の本年度のテーマと運営方針を詳細にご紹介をされましたうえで、ガバナーご自身の所信として、「自由なクラブ運営と個性豊かなロータリー活動の展開」を掲げられ、地域のニーズへの的確な対応、国際交流の先導的役割、理論よりも奉仕の実践、長期的視野に立ったクラブ組織の再検討、 R A C、 I A C、地域共同体の増強と拡大、各種財団への協力の充実を、具体的な運営方針として提示しておられます。ガバナーのロータリーに対する深いご理解とご見識並びに本地区大会への並々ならぬご意欲と周到なご配慮がうかがわれ、重ねて心から敬意を表する次第でございます。また、柳井西及び防府両ロータリー・クラブご提唱にかかる各地域共同隊のご発足などは、わが国ロータリー・クラブの範とすべき活動であらうと存じます。

申すまでもなく、現今の人間社会の情勢は、国の内外を問わず、激甚な変動の渦中にあります。まず、私ども自身の足元におきましては、わが国の短期間における驚異的な経済発展の原因や経緯とその結果をめぐって、国際的には、数々の摩擦や過敏な反応が次々と発生して私どもを苦しめております。また、国内的には、安易な経済の嵩上げとその急激な崩壊に伴い、仮装的な実態が露呈されて国民一般の不信を買い、構造的な不況の継続を余儀なくされております。そして、これらを契機として、従来 of 私どもの生き方や国際的な適応のあり方自体について、各種色合いの論議が加えられて来ております。次に、所謂東西の冷戦構造の解消に伴い、国家とか民族といった人間集団のあり方やその経済的な或いは社会的な管理の手法や秩序の再構築をめぐって数多くの不幸な国際的紛争が発生し、その解決を求めて、ほとんど果てしのない模索と努力が払われております。さらに、私どもが生きている社会環境と自然環境の双方に深刻かつ致命的な環境障害が発生するというかつてない事態を目前にして、人間資質を無制約に開発することに対する深刻な検討が始められようとしております。これを要するに、私どもが今まで既定の真理として疑いを容れなかつた従前の社会意識

と価値観の両面にわたり、人類社会の今後における生存をかけて、すみやかに抜本的な省察と検討を加えなければならぬということをごぞいましょう。

このような現今における国内社会や国際社会のあり方を踏まえ、今後におけるロータリーのあり方について、数多くの人々が、幾多の問題を指摘されて来ております。そこで、私は、国内的な見地、国際的な見地、及び一般的な見地の三つの視点から、それぞれの分野で私どもが当面している課題のうち最も基本的と考えられる問題の一つずつを取り上げて、検討を加えてみたいと思っております。

先ず、国内的な見地においてであります。申すまでもなく、ロータリーの基本の観念は、「ロータリーの綱領」Object of Rotary に掲げられております「サービスの理念」The Ideal of Service *じやういそごましよう*。ところが、この「サービスの理念」の正確な理解は、わが国のロータリーの現実において比較的不十分ではないかと思われ、そのことが原因となつて数多くの問題が派生しているのではないかと思われるのであります。

端的に申しますならば、私ども一人ひとり、自分一人だけで生きられるものでは

ございません。私どもは、他人様の職業や社会的活動の成果を利用していただくことによつてのみ、初めて豊かにかつ幸せに生きることができるのであります。従つて、私ども自らも、社会を構成する当事者の一員として、自分が携つております職業について最も良質の成果をあげて社会に提供しなければなりませんし、さらに一般の社会的諸問題につきましても、徒に他人様や行政任せにせず、最終的には社会の構成員である私ども自身の当事者としての責任において解決して行かなければならないという基本的な社会的責務を負つていると考えるべきでありましょう。他人様が提供してくれる成果は遠慮なく利用させていただくが、自分の方は何もしない、いい加減なことですましておくといった考え方ややり方は、人間としての基本の倫理に反するものではないでしょうか。このような社会の当事者としての自己責任と責務を厳しく自覚し、その実現のための努力を重ねなければならぬとする考え方が、「サービスの理念」でありましょう。ところで、このような考え方は、おおむね欧米の人々の社会意識な いしは価値観を前提とするものであります。キリスト教的な背景を指摘する向きもあ りますが、さらにその奥にあるのは結局において欧米的資質自体であろうと思われま

す。従つて、所謂欧米の社会におきましては、「サービスの理念」は、むしろ議論の余地のない当然の常識でありましょう。

ところが、わが国を始めとするアジアの社会など非欧米的な社会では、どちらかといえは自分を取り巻く社会は単に他から与えられた生存環境にすぎないと捉える受け止め方が強いようでございます。そこでは、周囲に合わせて上手に生きて行くことが幸せであるといひわば適応の意識が主流となつてゐるようです。従つて、当事者としての意識や自己責任を前提とした「サービスの理念」といった観念が存在するかどうかは甚だ疑問でありますし、仮に存在するとしても、その発現の形態は、欧米の社会とは相当に異なつてゐるのではないかと思われまゝ。現に、わが国の社会におきましては、「サービスの理念」The Ideal of Service という観念、なかならず「サービス」Service という観念が存在するかどうかは、極めて疑問であります。わが国における職業とか或いは一般の社会的活動は、単なる生活上の手段とか、社会的地位や力の象徴とか、自己犠牲的な無償の奉仕行為とかのいずれかでありました。従つて、ロータリーのわが国への導入にあたり、私どもの先輩ロータリアンの方々は、大変に

「苦心の末、The Ideal of Service」というロータリーの本質自体を規定する用語に、「奉仕の理想」という訳語をあてざるをえなかったのでございましょう。ただ、先人の方々の「苦勞にも拘わらず、この訳語がThe Ideal of Service」という觀念の正確な伝達のために必ずしも的確ではなかったことを認めざるをえません。私どもは、今や、社会意識や価値観その他の文化一般などの民族的資質の相違を克服して、「サービス」の理念」The Ideal of Serviceの正しい本格的な理解とその周知措置について、あらためて遅まきながら、最善の工夫と努力を払わなければなりません。しかも、そのこと以外にロータリーを正しく理解する方途はないことに、思いをいたさなければなりません。また、そのような正しい理解がえられますならば、巷間繰り返し指摘されるロータリー情報の不足や不徹底、職業分類の乱れ、「質か量か」に集約される会員増強や拡大のあり方への批判、「アイ・サーブかウイ・サーブか」に集約される奉仕活動の変質の指摘の可否を始めとして、わが国のロータリーが当面する数多くの具体的な諸問題が、自ずと改善と解決の方向に向かうのではないかと思っております。

次に、国際的な見地においてであります。ご高承のとおり、一九九三年九月二七日

現在、二六、五四一のロータリー・クラブが世界一八八の国と地域に存在し、ロータリーの数は一、一七五、七四九人を数える状況にあります。ところで、このような世界各地の国家や地域において、ロータリーはどのように受け入れられ理解されているのでありましょうか。ロータリーのロータリーたる所以は、その綱領に規定される「サービスの理念」The Ideal of Service ですが、この観念は、歴史的にも社会的にもおおむね所謂欧米社会の社会意識や価値観などの文化観念を前提とするものでありましょう。しかしながら、国際社会のすべてが、欧米的資質を体質とする社会であるわけではありません。わが国を始めとするアジア的な社会はもちろん、インド、アフリカ、ラテン、アラブ、スラブその他数多くの非欧米的な社会は、それぞれ独自の社会意識や価値観その他の文化観念を前提として存在し、しかも、そのような民族的資質は、歴史と伝統によって社会の実質として定着し、一朝一夕に変質するものではありませんし、また安易に変質すべきものでもありません。ロータリーは、そのような多様な世界の各地域に、「サービスの理念」を伝達し、理解を求めて行かなければならない宿命を負っていると申せましょう。

結論を急ぎますならば、ロータリーは、独自の文化と社会意識や価値観を持つ世界各地域の人々に、ロータリーの掲げる「サービスの理念」をどのように伝達し理解を求めて行くかについて、さらに一段の工夫と努力を盡くすべきでありましょう。そしてさらに進んで、その掲げる「サービスの理念」が、世界の人類社会一般に通ずる普遍的な真理として世界のあらゆる人々に理解をされるように思想的な熟成をはかり、その周知と浸透に努めて行かなければなりません。そして、そのことが、今後におけるロータリー活動の真の国際化を充実させ、本格的な国際的存在として一段とロータリーの存在意義を高めて行く所以であることに、深く思いをいたすべきであると思ふのであります。

最後に、一般的な見地においてであります。マクロな見地から眺めますならば、結局においてロータリーとは、資本主義の発展に伴う各種の弊害や社会の歪みなどの被害を、いわば付添人の立場において、「サービスの理念」The Ideal of Service に表象される精神的価値を人々に提示することによって、是正し軽減しできれば解消しようとする社会的努力を意味するものでありましょう。

ここで、資本主義とは、原則として人間の思考と行動の自由を前提としつつ、人間の快適生活を高度化することを主たる目的として、人間の資質の主要な一つである知能の開発を進め、その具体的成果である技術により生み出される経済的な実果に立脚して社会の運営をはかつて行くという社会管理の手法でありましょう。それ故に、このような手法やその成果の過去数世紀にわたる世界的な拡大と蓄積によって、現に私どもは、物質的にはある程度は豊かで快適な生活を手に入れることはできましたが、同時にその代償として、その大半を経済と科学によって支配され、その両者の相乗効果によって占拠され管理される社会に生きることを余儀なくされているのであります。しかも、自然環境の側面におきましても、社会環境の側面におきましても、その状況がもはや人間による管理の限界に達しつつあるとされるもののようにございませう。そこで、各種の修正形態を含むこのような社会運営の方式自体のあり方は是非はもちろん、その素因である人間の知能の無制約な開発の当否をめぐりましても、各種の見地から、根本的な批判と検討が近代史以来はじめて加えられる状況に立ちいたっているのではないかと思われるのであります。

ここにおいて、ロータリーは、資本主義的な修正手法に拠る経済体制に立つことを当然の前提としつつ、過去におけるようなその単なる付添人の立場ではなく、いわば本人としての立場において、「サービスの理念」The Ideal of Service と「うその掲げ」る精神的価値を、よりよき社会と人間自他の幸せのために社会に提供すべく努めて行かなければならないのではないかと思われます。私どもは、従前の私どもが肯定するか或いは否定すること以外は殆ど手を付けることができなかった「営利」とか「競争」といった一見制御困難な人間の所為に合理的で適切な制約を加えるため、あらためて人間の存在自体に深い根本的な省察を加えて行かなければなりません。

そして、その場合の省察は、人間に「知能」という特殊な資質が与えられていることがすべての問題の出発点でありかつ同時に終着点であることを自覚することから始めなければなりません。私どもが手にした若干の豊かさや幸せは知能に由来しますが、同時に、私どもが現在被っている堪え難い莫大な人間的な被害や社会的な被害も、知能の恣意的で無制約な開発とその利用に由来するものであります。知能に由来する被害の解決の鍵が知能の中にしか存しないことは、自明の理であります。

ここにおいて、私どもは、知能の開発と利用は都合のよい部分だけに着目して恣意に行われてはならないこと、知能の開発と利用は自然の一員である人間自体の存在にとつて一般に公正でありかつ有用であるよう人間自らが自律的な自己制約を課しつつ行うべきものであること、そのこと以外に、今後人間社会をよりよい社会としてその中で私どもが自他共に幸せに生きる方途はないこと、そして、そのためには、ロータリーが提唱する「サービスの理念」The Ideal of Serviceが、今後の私どもの思考と行動にとつて決定的な規律としての新たな価値をもつこと、しかも、そのような認識は、ロータリアンが個人的な立場で理解し実践するだけではなく、ロータリアンが関係する企業なり団体なりの現実の経済的社会的な活動単位自体の運営にまでの確に波及させ浸透させて行かなければ実効を収めることとならないことに、あらためて思いいたるのであります。

ロータリー創立後三〇年を経過した時点で、ポール・ハリスは、「世界は常に変化している。ロータリーは、この世界の変化とともに変化し成長して行かねばならない。ロータリーの物語は、幾度も書き換えられなければならない。」と述べておられます。

このような考え方の中に、ロータリーの発展と成功の秘密があるとともに、私どもに現在課せられた課題もあるのではないかと思われれます。もちろん、ロータリーが掲げる「サービスの理念」、「奉仕の理想」と邦訳されている The Ideal of Service の考え方は、時代とかわりなく不変であります。私どもは、人間社会不変の真理として承認しているこの考え方をしっかりと心の基礎に据え、この考え方のもとに、現在のこの社会、そして来るべき次の世代の社会が、より明るい、温もりのある、住みよい、人々に真の幸せをもたらす平和な社会となりますように、現実的で、具体的に、根本的な工夫や計画とその実現のために最善の努力を続けて参りたいと念ずるものがございます。

この山口の地は、わが国が初めて国として成立した前後の時期においてすでに極めて先進的な地域でございました。また、下ってわが国の近代化の大きな節目となりました明治維新前後におきましても、毛利家の事実上最後の藩主となられた敬親公が、維新の本質である廃藩置県を主導されるという決定的な歴史的使命を果たされた先進的な地域でございました。この地域で開催されました本地区大会が、本年度 R I のテ

ママのもと、「サービスの理念」を中核とするロータリーの信念の再認識とその実践を掲げ、ロータリー活動の真の活性化のために先覚的で画期的な成果を収められますことを確信いたしました。ご挨拶とさせていただきます。

(一九九三年八月)



一九九八～九九年度 R I 第二七二〇地区大会 における R I 会長代理の挨拶

当地区は、日本最古の歴史に彩られた大分の地と、九州の中核地域である熊本の地とを併せ擁する地区であり、また、一九三九年日本全国一地区であった当時の第一回地区大会が別府市で開催された地区であり、R I 会長向笠広次氏が「人類はひとつ、世界中に友情の橋をかけよう。」との極めて先見的なテーマを世界に向けて発信された地区であることに思いをいたし、感無量のものがございます。特に、この熊本の地は、一九三九年以来のロータリーの古い歴史と伝統に彩られた地であるだけでなく、幕末には横井小楠を、明治には徳富蘇峰、盧花の兄弟を輩出し、熊本洋学校、済々黌旧制第五高等学校を擁した西日本における政治、文教の中核都市であることに思いを重ねるとき、ますますその感を深くするものがございます。

当地区のロータリアンの皆様におかれましては、日一日と深まり行く秋のたたずまいのなかで、内外多数のご来賓、ご招待者及び地区内外のロータリアンとご家族の皆様ご出席のもとに、このように盛大な地区大会をお迎えになりました。まことに同慶の至りでございます。当地区におけるロータリー活動の一層の活性化のため、本大会が輝かしい成果を収められますことを、心からご期待申し上げます。

東ガバナーからは、当地区の地区史と、ガバナー月信などの資料をご送付いただき、あらかじめ拝見させていただきました。ガバナーは、レイシー会長のRI本年度のテーマと運営方針を詳細にご紹介をされましたうえで、ガバナー自身のテーマは特に設けず、RIのテーマが即ガバナーのテーマであるとされたうえで、ロータリーの奉仕活動の原点はロータリー・クラブにあり、ロータリアンには、クラブの諸活動に参加し、国境を越えて人と人との提携の輪を広げ、世界の平和に貢献する大きな夢があり、地区としては、このようなロータリーの夢と活動を十分にお手伝いしたいと述べておられます。また、当地区には、ワンダーフォーゲル運動、大分車いすマラソンへの援助、環境倫理に関する地区宣言の制定、熊本グリーン・ロータリー・クラブの『ロータリ

『情報集』の作成出版、幾多の奨学会の設立、大分県ホタルの里育成への協力、松本ファンドの創設など、全国的に著名な、また地域に密着した奉仕活動が枚挙に遑がななく、当地区ロータリアンの皆様の活性あふれるご活動に対し、あらためて深く敬意を表するものでございます。また、ガバナーもロータリーの夢賞を制定された由で、適切な措置に敬意を表する次第であります。

ジェームスL・レイシー会長は、テネシー州の州都ナッシュビルの東約一二〇キロに位置するクックヴィルのお生まれで、学生時代はよくできた生徒で、市民としての関心も深く、スポーツなら何でも好きで、一七年間も地元少年野球のリトルリーグでコーチを務められたことは、夙に有名です。ハイスクール卒業後間もなく一九四八年に、同級生のクローディーンと結婚し、最初デトロイトで自動車の販売を手がけ、一九五〇年にポンティアック社（現在はGMの一部門）の最も若いセールス・マネジャーになり、一九五六年に故郷のクックヴィルに戻り、不動産の開発と建設業で成功を収め、ビジネスマンとしての地位を築きました。一九八六年ケンタッキー州パデューカの製菓会社ギリアム・キャンデー・ブランド社を買い取り、各地に製造工場を

持つ他の製菓会社を何社か買い取って、その事業を一〇倍に拡大されましたが、常に従業員に福利に最大の留意を払い、買い取った会社の経営陣をそのまま維持して来られました。その間、一九五二年には、国家の要請にこたえて二年間の兵役を務め、一九六五年からは、テネシー州下院議員を二期務めておられます。

ロータリーでは、一九七八〜七九年度のクックヴィルRCの会長、一九八〇〜八一年度地区ガバナ―、一九八八〜九〇年度RI理事などを歴任され、一九九二年には国際協議会のモデレーターを、一九九四年から一九九七年まではロータリー財団管理委員会委員を務められました。ポール・ハリス・フェローであり、ロータリー財団のベネファクターで、大口寄付者でもあり、教育的、人道的プログラムに対する盡力を多くとして、ロータリー財団功労表彰を受けておられます。

自分より恵まれない人と何事も分かち合うという両親の価値観が彼のロータリー人生の根本を形成し、また、家族経営の陶器製造を手伝ったことで金は自分で働いて得なければならぬという終生変わらぬ強固な労働観を身に付けられました。一九七七年に英国へのGSEの団長を務めたときに初めてロータリーの真価を自覚し、この体

験によって一会員からロータリ안의名にふさわしい人間になったといっておられます。また、困っている人の手助けをし、心配事を抱えている人の話を聞き、初めて会った人にほほ笑みかけ、そして、ロータリーを通して、恵まれない人たちに手を貸し、夢を叶えるという素晴らしい機会を手にすることができるともいっておられます。今年の一月に金婚式を迎えられますが、周りの人を助けるといふロータリーの夢を追い続けることができたのも、夫人の献身的な協力があったればこそであると言っておられます。

彼の性格と奉仕に対する態度を明瞭に物語る話があります。彼のゾーンでは、各種会議や研究会などの参加者に、記念品のほかに、ちよつとしたお土産などの入ったゾーン・バッグ (Zoney Bag) という袋を出すのが恒例になっています。R I の元役員が毎年ゾーン・バッグ委員長を務めることになっていますが、案外難しい割にやり甲斐のない職務であるために、だれも引き受けたがらない仕事なのです。R I 理事になったジムは、あるパスト・ガバナーがこの委員長を引き受けてくれるよう頼みました。そのパスト・ガバナーは、もつと名誉ある職務を期待していたわけで、あまり乗

り気でない旨を表明してこの「名誉ある」職務を断ろうとしましたが、その前にちょっと尋ねてみました。「ところで、前年度の委員長は誰でしたか？」ジム・レイシーは、にっこり笑って答えられました。「私でしたよ。」と。

レイシー会長は、私が第二六六〇地区（大阪）のガバナーを務めさせていただきました一九九一〜九二年度の地区大会に、クロード・ディーン夫人とともに、RI会長代理として出席され、その前後から現在にいたるまで、親しくお付き合いを願っておりませんが、ご夫妻共々真にアメリカの良識面を代表するお人柄であり、今回のテーマなりメッセージも、本当にそのお人柄そのものであります。私は、彼と接触することにより、さらに一段とロータリーの理解が深まったと自覚しております。私の直接の体験をご披露して、ご紹介に附加させていただく次第でございます。

このようなお人柄と基本的なお考えを基礎として、レイシーRI会長は、一九九八〜九九年度のRIのテーマとして、「ロータリーの夢を追い続けよう。」を掲げられ、私どもロータリアンに、次のように呼びかけておられます。「私たちは、思いやりの心があればこそ、ロータリアンになった。私たちは、他の人々のこと、地域社会のこ

と、私たちの住む世界のことを心にかけ、常に隣人と社会に対する配慮で一つに結ばれている。多くの人々が、貧困、不健康、栄養失調、劣悪な衛生居住環境といった恐るべき諸問題に悩まされているし、仕事を見つけないために必要な教育や研修を受けられない同胞もいる。薬物濫用、アルコール過飲、家族崩壊その他の原因で派生する犯罪や暴力に見舞われ、騒乱に明け暮れる社会に住んでいる人々もいる。あまりにも多くの子供たちが、利用され、見捨てられ、蔑ろあざむにされている。高齢者の多くは、社会の片隅に追いやられている。ロータリアンは、社会の心配事で心が結ばれていると同時に、夢でもまた心一つにしている。私たちは、子供たちが愛され健康で十分栄養を与えられ教育を受け保護される世界を、高齢者が自分にふさわしい尊敬と支援を受け威信を保って生きられる世界を、飢えたすべての人に食糧を、泣き叫ぶ人々の声には聴く耳を、病める人には等しく慰めと癒しを、そのような世界を夢見る。すべての人々が教育と品位ある仕事に恵まれる夢、戦争も暴力もない世界という夢、これがロータリーの夢である。」と述べられ、一段と力を込めて、「しかし、私たちロータリアンは、単なる夢想家ではない。心一つにして手を携え、この夢を現実のものにするべ

く、想を練っている建設者である。」と続けられます。そして、「今日のロータリーの姿は、皆ロータリアン一人ひとりの夢から展開してきた。もともとロータリー自身が、ポールP・ハリスという一人の人間の夢から出発した。ローターアクト、インターアクト、WCS、青少年交換といった色々な活動も、皆ロータリアンの夢から生まれた。私たちのロータリー財団は、アーチC・克蘭フという一人のロータリアンの夢から始まった。そして、その夢が次々と別の夢を呼び起こし、現在の財団プログラムとなった。ポリオ・プラスは、子供たちに予防接種をしてよりよく生きる機会を与えたいという夢で出発した。」と指摘されています。ここで私たちは、会長の「夢」が何物であるかに思い当たるのです。そして最後に、「ロータリアンは、夢見ればこそ、建設者になる。ロータリーの夢は、私たちが奮い立たせ、行動に駆り立てる。私たちは、思いやりの心にあふれていればこそ夢を見続け、実に沢山のことを成し遂げてきた。ロータリーの夢は、確かな現実の認識と、全世界のすべてのロータリアン一人ひとりの行動に根を下ろしている。それは、空虚な願望や観念ではなく、実際にこの世の生活の質を日々高めていこうという実のある奉仕活動である。ロータリアンは、九三年

の歴史を通じて、よりよい生活の実現という夢を抱いて成功してきたが、未来に目を向ければ、すべての人々にとってこの世界が安住の地となるためには、なお成すべきことがあまりにも沢山あることに想いいたる。この年度、私たちは、さらに新しい夢を抱き、それを現実のものにするために力を盡くし、新しい世紀に向かって旅立とう。ロータリーの夢を追い続け、新しい世界を築こう。」と結んでおられます。レイシー会長が最も関心を持っておられるのは、子供の問題であろうと思われます。よい子供を育てるのはよい人間を育てよい社会を実現する、最も確実な方途であるからです。レイシー会長が全ガバナーに世界の子供を図柄にしたネクタイを贈り、ガバナーがそれを垂れ幕としてこの会議に掲げ、プログラムの表紙に印刷された所以であります。

人間のより良い資質の育成や、より良い社会の実現への努力は、古今東西を問わず、ややもすれば、私どもの現実の生活の軋轢と摩擦の中で消耗し、やがては消失して行く運命を辿るものであり、その故を以て正に「夢」と呼ばれるのでありましょう。しかしながら、私どもは、信念と勇氣を持って、敢えてこの夢を持ち続け、その実現を追求しなければならぬとするのが、本年度の R I のテーマであろうと思われます。

そして、そのような正しい夢を持つ者の精神は強靱であり、粘り強い持続力と追及力を併せ持つものであることが、その背景にあらうかと存じます。もともと、アメリカにおける Dream と、わが国における「夢」とは、その意味するところに多少のニュアンスの差があると思われます。アメリカにおける「ドリーム」は、現実を超えるものではあるが、努力次第では実現可能な肯定的なニュアンスのものですが、わが国の「夢」は、現実との落差が大きく、到底実現不可能か、むしろ実現を予定しない否定的なニュアンスを帯びているように思われます。レイシー会長の「夢」は、アメリカの夢ですから、私どもは、その意味するところを正しく受け止めて、その実現に努力しなければなりません。

わが国をはじめとする現今の世界的不況を理由として、ロータリーの停滞もやむなしとする声を巷間耳にしますが、誤りであろうと思われます。不況といい好況といい、人間が作り出した社会の常況であります。不況は、贅肉を取り去って人間と社会を健全なものにするための貴重な作業を遂行する得難い機会であります。真の価値とは何か、真に正しいものは何かを、私ども自身が省察し自覚する好機であります。私ども

は、世界的不況の今日、人間と社会のあるべき姿を検討し、ロータリーの精神の真価を再認識し、その所在を確かめるべきでございましょう。

世界で新たに毎年一二万人を超える新会員が入会しながら、一二万人もの会員が退会し、そのうち四万人は自分の意思でロータリーを去る人たちであると言われている。レイシー会長も、入会直後に一旦退会されましたが、よき先輩会員のお蔭ですぐに復帰しましたし、私も、当初退会を考えましたが、よき先輩会員たちのお蔭で、退会を思い止まった者です。新会員に対する心温まる行き届いた配慮によってその退会を防止することが、いかに大切であるかに思いいたるのであります。先に入会された会員やベテランの会員の皆様が生かされた新会員に手を差し延べ、語り合う機会を提供されることは、単に新会員の退会防止に役立つだけではありません。それによって、皆様方会員のお一人おひとりが自らのロータリアンとしての精神と活動をリニューアルされ、同時に、クラブもまたその質を高める絶好の機会が生み出されるのであります。

例えば、二〇世紀はロータリーの世紀であり、ロータリーは今日までは既存の社会基盤を前提として、その上でいわば定常的な活動を提供して参りました。一回にわた

る大戦も、社会基盤の実質まではさほど破壊しなかつたと思われまゝ。ところが、来るべき二一世紀は、真に激動の世紀となると思われまゝ。すぐれた知能という人間の類い希な資質を、科学技術を中心に過去無制約かつ無限定に開発し利用して、その成果を集積して来た結果が、善きにつけ悪しきにつけ、私ども人間社会の基盤自体の激甚な変化として、表面化して来る世紀となるものと思われまゝ。人の心の変質は、戦争以上に社会基盤の変質をもたらしでしょう。

先ず、エネルギーの過剰消費による生態系と気象条件の変化、新たな化学物質の多用による生理条件への悪影響の累積、バイオテクノロジーによる遺伝子への引き返すことのできない加工など、数多くの自然の破壊があります。次に、科学技術の進歩に伴う物への関心や欲望の挑発、社会管理技術の整備に伴う価値観の混乱、その相乗効果としての社会の物的化や個人と人間関係の意識の分裂、分解など、人間と社会の病理現象の進行があります。さらに、欧米の画一的価値観の世界への彌漫ヒマンによる諸民族の多様な人文その他の精神文化の衰退があります。最後に、人間中心の価値観、人間資質の社会的側面、なかならず社会構築活動としての側面の無視、個人的利益追求手

段への偏向、知能の自己制約の欠落などの教育の欠陥があります。そして、これらの相乗的効果として、数々の深刻な事態の続発が予想されます。そこで、私どもロータリアンは、従来世紀におけるように与えられた既存の社会基盤に安住するだけでなく、その損傷と変質自体に対しても、自らの活動を強化し拡大して参らねばならないと思うのであります。二一世紀の到来を目前にして、私どもロータリアンが抱くべきそして追い続けるべき夢は、そのようなところに存在するのではないかと思うのであります。

では、今後におけるそのような私どもの夢と努力の中核となる精神的活力は何か。それは、ロータリーの精神であり、綱領のサービスの理念 *The Ideal of Service* であります。科学技術を中核とする経済社会の自然発生的な本則であった資本主義の考え方の弊害を是正するために、人為的な抑制としての共産主義の考え方が考案され、過去、世界の相当部分で実施されましたが、このような外部からの管理と抑制を加えるという考え方は、人間の心と活動を消退させるものであるとの判断が、漸く多くの人々の心に定着しました。ところが、その本則とされる資本主義に戻ることによって国際社

会の混乱が收拾されたかといえば、決してそうではありません。冷戦の枠組みと抑制が取り去られたあと、却って混乱はより多様で深刻の度合いを深めています。その真因は、結局は個人の存在の絶対という思念への硬直した執着であり、しかも殆ど見るべき是正措置が講じられていないことにあるうと思われれます。個人の存在の絶対という思念は、人間を身分社会から解放するための必要条件ではありませんが、そのままでは、よりよい社会を築くための十分条件ではありませんでした。そこには、妥当な制約が必要であったのです。しかも、その制約が外部からのものである限り、すべての努力が結局失敗に終わることは、経験の教えるところであります。その制約は、内部的なもの、一人ひとりの心の中で自ら課するものでなければなりません。人間は一人でないとして生きて行けません。しかしながら、人は一人では生きては行けないのです。人間は、このような大変な矛盾をかかえた生物なのですから、この矛盾を解決しない限り、問題の本質的解決とはなりません。このような一連の諸点の検討と省察が、従前の私どもには不足していたのであります。ところが、このような自己制約の理念は、実は私どもロータリアンにとりましては、各自の身边にずっと存在していたので

あります。それはロータリーの精神であり、サービスの理念であります。

私どもは、ポール・ハリス以来一〇〇年の歴史を背負った輝かしいロータリー精神、サービスという自己制約の理念を、今こそより高らかに掲げ、来るべき二一世紀の人間社会の基盤の新たな構築に向けて、夢を抱き、そして一步一步その実現の道を歩むべきであると、確信する次第であります。

(一九九八年一〇月)



〈著者略歴〉

菅生浩三 (すごう こうぞう)

1926年10月生

1952年3月

東京大学法学部卒業

1954年4月～56年3月

神戸地方裁判所、同家庭裁判所裁判官

1956年4月～

弁護士として弁護士会の役職ならびに数多くの企業と公私の団体の法律顧問を務める

1969年2月

大阪北ロータリー・クラブ入会

1987年～1988年

同クラブ会長

1991年～1992年

国際ロータリー第2660地区（大阪府大和川以北）地区ガバナー

現在

菅生総合法律事務所主宰

朝日カルチャーセンター講師

著書に『ロータリー随想—その周辺とともに—』『続・ロータリー随想—その周辺とともに—』『建設工事判例提要〈上・下〉』『請負契約の基本問題』『不動産判例集成〈1～5〉巻』他がある。

新・ロータリー随想—その周辺とともに—

1999年9月25日 初版第1刷発行

2004年12月1日 初版第2刷発行

著者 菅生浩三

発行所 株式会社出版文化社

〒540-0003 大阪市中央区森ノ宮中央1丁目14-2

TEL06-6941-1321(代) FAX06-6941-1671

〒111-0052 東京都台東区浅草橋1丁目9-16

TEL03-5821-5300(代) FAX03-5820-9543

受注センター TEL03-5821-5300(代) FAX03-5820-9543

E-mail book@shuppanbunka.com

発行人 浅田厚志

協力 朝日カルチャーセンター

印刷・製本 株式会社デジタルパブリッシングサービス

当社の会社概要および出版目録はホームページで公開しております。また書籍の注文も承っております。→<http://www.shuppanbunka.com/>
郵便振替番号 00910-1-32891

© Kozo Sugo 1999 Printed in Japan

乱丁・落丁本はお取り替えいたします。

ISBN4-88338-233-8 C0036

定価はカバーに表示しております。

新・ロータリー随想 - その周辺とともに -
菅生浩三

1999年9月初版発行

電子文庫発行 2008年11月